

さくら荘の空太君が開
き直った様です。《完
結》

こいし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神田空太に変化が起きた。元々の性格は何処へやら、彼は才能云々の話に疲れてしまったのだ。故に変貌した空太はさくら壮にて騒動を起こす。

さて、どうなる

目次

神田空太の変貌	1
神田空太の遭遇	10
神田空太の期待	24
神田空太の才能	36
神田空太の前兆	44
神田空太の羞恥	50
神田空太の内心	59
神田空太の信頼	67
神田空太の焦燥	73
神田空太の全力	83
神田空太の信頼	90
神田空太の逃げ道	98

神田空太の嫉妬	106
椎名ましろの視点	112
神田空太の休日	120
神田空太の冗談	127
神田空太の作戦	140
神田空太の意地	145
神田空太の無職	156
神田空太の援助	161
神田空太の悩み	168
神田空太の溜息	174
神田空太の衝撃	179
神田空太の失敗	184
神田空太の本当	190

神田空太の看病

神田空太の認識

神田空太の改革

神田空太の一手

神田空太の挑戦

神田空太の笑顔

|

|

|

|

|

|

227 221 216 210 204 199

神田空太の変貌

神田空太は元々、とても悩みの多い少年だった。小さい頃から他人の言葉には一々揺り動かされ、起こる出来事には人一倍敏感で、責任には自分のだろうが他人のだろうが気にする性分だった。

故に、彼は何時も何時も他人と自分を比べて自身を卑下していたし、周囲に居る才能のある人間には少なからず嫉妬の感情を持った。

つまり負けず嫌いだったのだ。そして、それなのにきつと出来ないと心の底で諦めている様な矛盾した人間性。

負けた訳じゃないのに、本当に負けるのが怖いから挑まない。何かと理由を付けて行動を起こさない。そんな自分を毛嫌いしている。

神田空太はそんな人間のまま、小学校に上がり平凡な日常の中卒業。中学に上がると多少何か華やかな青春を送りたいと思いはじめて少しだけ奇抜な行動を取ってみたり、自分の趣味として様々なゲームに取り組んだりした。

この時が、空太が初めてやりたい事を見つけた時だった。ゲームを作りたい。誰もが楽しくプレイ出来るようなゲームを。

そう思った時から、中学生生活もそこそこ楽しくなってきた——筈だった。

そう思ってゲームに関する知識を多少調べていたのだが、空太の周りには余りにも才能のある人間が多すぎた。別にゲームを作りたいと周囲の人間が思った訳じゃない。それこそ、短距離走や書道、イラストやファッション、歌唱と様々な才能を持つ人間が周囲に居たのだ。

そして、そんな人間が周囲に居る事に気付いた空太は、小さな頃から染みついていた人間性が前に出た。

空太は自分と彼らを比べた。比べてしまった。

短距離の才能に負け、嫉妬した。書道の才能が無く、嫉妬した。イラストの才能は平凡以下で、嫉妬した。ファッションの才能はセンス自体無かったから、嫉妬した。歌唱の才能は陳腐な物でしかなく、嫉妬した。

なにより、自分にそんな彼らの様な才能が無かったことに、苛立ちを覚えた。

別に、ゲーム作りの才能が無くても良かったから、彼らに一つだけでも勝てる才能が欲しかった。でも、負けている部分を見つけると、全てが劣っている様に思えて自身に怒りを覚えた。

だから、神田空太はここから変わった。全てに負けている様に思えた負けず嫌いの臆

病者は、耐えきれずにこうつぶやいたのだ。

「めんどくさ。もーいいや、やーめた」



—— 四月五日、夕刻17時。とある寮の一室。

神田空太は一つの邪魔者によって眼を覚ました。片方の視界を覆うピンク色の何か。神田空太は目の前に覆い塞がる物体を抱え上げ、眠気眼をパチパチとまばたきさせて心底めんどくさそうに呟く。

「ひかり、またお前か」

ひかりとは、空太の飼っている猫の内の一匹。真っ白な毛並みの猫だ。とりあえず、空太はひかりを横にどかして起き上がった。ひかりが不満気な声を上げたが、空太は気にせず立ち上がって窓を開けた。

差し込んでくる夕焼けに目が一瞬焼けた様なダメージを負うが、空太は徐々に戻って

くる視界に入った茜色の街並みと吹き込むの暖かい空気に笑みを浮かべた。

「さて、お腹が減った」

空太はそう言つて、窓を閉めて騒ぐ猫達に餌をやりながら自身のベッドに胎児の様に丸まつて眠る少女の声を掛けた。

「美咲先輩。起きろ」

「……zzzz」

少女は起きない。まあ空太の発した並の音量では誰でも起きないだろう。だが、空太はそんな事承知で声を掛けたのだ。空太は頭の中でこう思った。

——一度普通に起こした、なら次はもう少し過激に起こしても言い訳は出来る。

その考えに空太は笑みを浮かべて美咲と呼ばれた少女をベッドから蹴落とした。ビタンツ、と鈍い音が鳴り響いた。短い呻き声が少女の口から洩れたが、空太は気にせず追撃を仕掛ける。転がっている枕を掴み上げて、美咲の頭へと叩き付けた。

「ふげっ!!」

「起きろつつつてんでしようが」

「いてて……もうっ、こーはい君! こういう起こし方はおかしいと思う! 女の子はもつと丁寧に扱うべきだよっ!」

「知らないですよ。起きたならさっさと……」

「あ。あたし……将来お嫁さんになりたい」

「なれば？」

急な美咲の方向転換に空太は冷たい視線を向けて素気無く返した。美咲はそれでもめげずに畳みかけようとする。

「じゃあ、あたしお嫁さんやるからこーはい君旦那さん役ね！ 仕事から帰って来た所からね！」

「はいはい、分かりましたよ。こほんっ……えー『今帰ったぞ』」

『『お帰りなさい、あ・な・た♡』』

『突然だが、今役所に離婚届を出してきた。お前のサインと判子は俺が代わりに押したから問題ない。ということでお前とは此処で終わりだ。荷物はまとめてあるから早々にこの家から出ていけ！』』

空太は夫婦のやり取りに一回成功させただけで終了の知らせを出した。美咲は空太のいきなり離婚展開に眼を丸くして修正しようと試みた。

『『ま、待つて！ 私は出て行きたくないよっ！』』

『『そうか……なら仕方ないな』』

空太の言葉に美咲はイケると判断したのか更に畳みかけようとして

『『なら俺が出ていく。荷物はまとめてあると言ったな、アレは俺の荷物だ。』』

突破口を土砂で潰されるかの如く塞がれた。空太はそう言うのと、頭を掻いて欠伸を一つ出した。

『じゃあな、お前とはもうやってやれ「スト——ツプ!!」ストツプストツプだよ、こーはい君!」……なんですか?』

「何ですかじゃやないよ! なんてお嫁さんと旦那さんの役をやってるのにいきなり離婚してるのさ!」

「ノリが悪いですね先輩。悪いですが俺は幸せ者は死んでしまえという思いを持っているので」

空太がそう言うって視線を移した先にあつたのは、書き初め用の半紙に書かれた『脱・さくら荘!』の文字。空太がなんか起きないかなあと書いて書いた、特に意味もない仮初めの目標。達成するつもりは別にないし、これで何かしらイベントが起きればいいなあと思っただけだ。

「じゃあ、先輩。昨日の続きしましょう」

「え、」

空太が足元のゲームコントローラーを拾い上げてテレビの電源を入れてゲームを起動させた。だが、美咲は空太の差し出すコントローラーを一向に受け取らない。

「どうしたんですか?」

「も、もういいよ！　だつてもう一週間は徹夜でやつたもん！　もう気持ち悪いよ！　画面で動くキャラクター見てたら吐きそうになっちゃうもん!!」

「え？　でも二人とも満足するまでやろう！　つていつたの先輩ですよ？　俺はまだ満足して無いんですが」

「うう〜……そ、そうだ！　じゃあ代わりにコレつコレを見よう！　前々からこーはい君対策に用意してた……じゃなくて、前々から作つてた新作！」

美咲が取りだしたのは、彼女の作ったオリジナルアニメーション。

というのも、彼女はその界限ではかなり有名な実力者なのだ。彼女にアニメーションを作らせたら5分だけのアニメーションでも300万人が視聴するという大人気ぶり。

空太がまた才能人か、と嫉妬したあとどうでもいいかと開き直った一人でもある。

「……………あー、まだまだですね」

空太はそう言つて美咲の作品を貶した。自身にそれ以上の作品が作れるわけでもないのに。開き直つた空太はいつだつて才能のある人間に対して敗北感を抱く事を受け入れているが、その才能を認める事はしなかつた。

故に、空太は才能のある人間から一種の勘違いをされていた。

「あー、やっぱりそう思う？　こーはい君はやっぱり見る目があるねえ。こーはい君に認められたらわたし誰にも負けない気がするよ！」

この言葉。美咲の言葉はその勘違いを簡単に現していた。

空太が他人の成果を認めずに、無意識なアドバイスとも取れる言葉を言う事から生まれた勘違い。それは、才能のある人間全員が思った事。

『神田空太は非常に高く幅広い才能を持ち得た人物である。』

こういうことだ。空太が一切に人の事を認めずに、無意識的で投げやりな助言を行なった結果、何の因果かその助言はその作品を更に良い作品へと昇華させてきた。分かり易く言うのなら、評価Bの作品が空太の助言で評価A?にまで上がる位の物。

故に、空太は他人を育てる事に対して高い実力を秘めた人間、または誰よりも優秀な才能人と思われる訳だ。

「そうですか?」

「そうだもん! で、こーはい君! 今回の作品の駄目だし、お願い!」

「ええ……またですか? えくと……」

空太は別に、自身のアドバイスに特に頭を使っていない。適当に眼に付いた部分に指摘を加えるだけだ。のらりくらりとそれらしい事を言ってやり過ぎし、そしてその言葉を才能人が勝手に脳内変換して良い案を思い浮かぶだけの話。

「……この部分。この部分は何んというか……薄いですよね(色が)」

「あーやっぱり? 私もそこは薄いと思ってるんだ(演出が)」

「あと、このシーン。キャラクターの動きがなんだか不気味かなあ……（適當）」

「んー、それは思い付かなかったよ……確かになんだか不気味だね……（真剣）」

そこから空太の言葉を勝手に脳内変換してインスピレーションを働かせる美咲。彼女の頭の中ではその作品を良くする案が浮かんでくると同時に、空太への称賛と尊敬があつた。

「さて、それじゃありテイクしようかな！　こーはい君も手伝つてよー」

「いやです」

空太はこの状況を重々理解していた。だからこそ、自分が手伝う訳にはいかなかった。何故なら、自分にその才能は無いからだ、寧ろ勘違いを正した方がいいと思うが面倒なので止めている。

そしてそんな所に一人の人物がやってきた。

「神田ー入るわよー？」

「千尋先生？」

それは、神田空太の担任の教師——千石千尋だった。

神田空太の遭遇

神田空太の部屋へ入って来たのは、さくら荘の担当教師である千石千尋。空太が最初に彼女の名前を聞いた時『千』という感じが名字と名前に両方入っていることから、厨二ネームを付けるならサウザントマスターかな(笑)、と考えた人物である。それと同時に某ジ○リの神様の銭湯に迷い込んだ少女と同じ名前だあとも考えた人物でもある。

空太は入って来た千石千尋の顔に首だけ回して視線を向けた。空太の視界に入った千石千尋の顔は、客観的に見てとても酷い有様だった。化粧は濃く、それに合わせた衣装は反比例するかのよう顔との相性を崩壊させ、浮かべたほくそ笑みはその異様さを加速させていた。

「千尋先生」

「何よ?」

「その化粧。夜の蝶と言うよりはアマゾンの毒蜘蛛見たいです」

「……神田には大人の色気が分からないみたいね。まあいいわ」

千石千尋もまた、空太に高レベルの才能人という認識を持っている人間である。そしてその空太に化粧が駄目だと言われた事で少し心にショックを受けたが、なんとか大人

の威厳として言い返した。

だが、空太の笑みはその心境を見透かしている様で、なんとも負けた感が否めなかった。とりあえず、千尋は後で化粧やり直そうと心に決めた。

「で、何の用ですか？」

「ああ、そうそう。神田に報告しなきゃいけない事が有つてね。はい、コレ」

「写真ですか？ ……へえ」

空太が千尋から受け取った写真に写っていたのは、なんとも透明な少女。おそらく年齢は5歳か6歳程だろう。無表情な顔立ちからは少しだけあどけなさに交じって大人っぽさがにじみ出していた。

「この子の写真を俺に見せてどうしろと？」

「この子、私の従姉妹なんだけど……こんどからさくら荘で預かる事になったから迎えに行つて欲しいの」

「ああ……なるほど」

空太はさくら荘に入るといふ事実と千尋の従姉妹という所から、恐らく少女も何かしらの才能を持った才能人なんだろうなど当たりを付けた。まして、この写真通りの少女が此処に来るわけでもないだろうとも思っていた。

神田空太はいろんな事を諦めてから、様々な事に目を配れるようになっていた。何か

一つの事を頑張ろうとしなくなったから、四方八方に目が行く様になったのだ。

そんな空太が思ったのが、写真の古き。見れば、所々に古い折れ目があるし、傷も多い。色もなんだか褪せているから最近取った物じゃない。最低でも5年以上は昔の物と見たのだ。

「この子、今俺と同じ年くらいですね」

「……良く分かったわね。そうよ」

千尋は内緒にしている後々空太のびつくりする表情が見たかったのか、少し不満気だがそう答えた。内心でやはり空太は凄い人物だ、という再認識をしながら。

「……分かりました。俺が迎えに行きますよ。千尋先生の従姉妹ですもんね？」

空太はそう言って、部屋を出る。だが、千尋は空太を引き止めた。

「アンタ、進路調査表まだ出してないでしょ？」

「ええ」

「あんなの適当にパイロットとでも書いときゃいいのに」

「まあ、俺にも色々と考えがあるので」

「そう、まあアンタの事だから別に心配はしてないけど。最悪……進学、の二文字で職員室は安心するわよ。つと、そろそろ時間だから行くわね！」

千尋の出掛け先。それは、合コン。神田空太はこの千石千尋という人物の人となりは

把握しているのもう一々指摘するのは止めている。

ただ、確信している事はあった。

「あの人、多分行き遅れ組だろうなあ」

それは、千尋にとって才能人である空太に一番言葉にして欲しくない台詞であった。

◇ ◇ ◇

その後、空太は千尋から請け負った仕事をこなす為にその少女を迎えに行っていた。場所や少女の名前等を聞いていなかった為に少しでもどうしようかと思つたが、渡された写真の裏に場所と時間、少女の名前が書いてあった。

18時に駅で待ち合わせ。少女の名前は椎名ましろ。

神田空谷は、少女の名前に若干の聞き覚えが有った。それもその筈、空太がまだ才能に関して諦めていなかった時、テレビで一度だけ見た世界でも屈指の才能人。それが絵画の天才、椎名ましろ。

神田空太が中学時代に憧れ、比較し、敗北を認めて、嫉妬した人物の一人でもあった。テレビの向こう側に存在する天才にまで嫉妬するとは、今思えばなんともまあ滑稽な話である。

「お、神田の坊主じゃねえか！ 今日ハサバがいいぞ！」

空太は商店街ではかなり顔の知れた人物で、人との交流は実はかなり広い。

「あら、空太君じゃない！ ね、今日は何が良い？ コロッケおまけするわよ？」

魚屋のおじさんや肉屋のおばさんは、空太になにかと良くしてくれているので、空太もかなり親しくしている人物だ。

魚屋のおじさんに軽く挨拶をして、肉屋のおばさんからはコロッケを貰い、駅へと急ぐ。

辿り着いた駅前には、まだ少女は居なかった。空太はコロッケを頬張りながら、とりあえず駅前のロータリーで腰を下ろす。空を見上げながら考える事は、面白い事でも起きないかなあという事。

神田空太は、才能云々を諦めた後に求めた物が有った。それは、軽薄な奴ほど好む様な指標。

——人生面白ければ良いっしょ？

つまり、神田空太は才能から逃げる為の何か目的が欲しかった。そして差しあたって見つけたのが、面白い生活を送る事。神田空太は面白ければ良い、という指標の下に才能からの逃避を始めた。

だから、神田空太は才能人の溢れるさくら荘に居る事が出来るし、笑っていられるのだ。

「あれ？ 空太じゃん。何、俺を待ってたのか？」

「ん？ ああ、仁さんか。いや、そうじゃないですよ」

空から声のした方へと視線を移すと其処に居たのは、さくら荘の住人。部屋番号10

3号室の先輩、三鷹仁であった。

「だろうな。で、なにしてんの？」

「いや、ちよつと人を待ってるんですよ」

「へえ……あ、コロツケじゃん。俺にもくれよ、朝以来喰ってないんだ」

「良いですよ」

空太は仁へ手もとのコロツケを手渡して、少女の写真を取り出した。仁が駅から出て来たのなら、少女もそろそろ出てくるから顔を確認して探そうとしているのだ。

「空太ってすげえよな。商店街歩くだけでコロツケとか貰っちゃうんだから。才能だよ」

「商店街に居る女の人をその気になれば全員口説いて孕ませそうな仁さんよりはマシかなと思ってます」

「いやいや、俺だってちゃんと避妊くらいするって……」

「知ってますか仁さん。避妊用具や薬って、絶対じゃないんですって。有名な所で言うコンドームですら8から9割という所で、決して100%避妊出来る訳じゃないんです。現に、アメリカでは女子高生と男子学生がコンドームを付けて性行為を行なった結果、避妊出来ずに妊娠させて、男子学生の方は遊びだった様ですが責任を取らされたそうです。」

空太の言葉に、仁は若干冷や汗を掻いた。だが、それはそれで責任を取る覚悟はしているのですぐに立ち直った。

「まあ、才能なんてどうでもいいですが……仁さんだって美咲先輩のアニメ、好評みたいじゃないですか」

三鷹仁の才能は、脚本。空太が先程アニメーションで話をしていた上井草美咲は、知つての通りアニメーションの天才だ。そしてまた、この三鷹仁はそのアニメーションを支える脚本を作った張本人。

神田空太が脚本作りの才能に興味を示し、最終的にはいつも通り嫉妬した人物でもあ

る。

「アレは美咲の作品だ。美咲が凄いだけさ……うん、美味しいなこのコロッケ」

「そうですか。まあ、どうでもいいですが」

空太はそう言つて三鷹仁の浮かべた少しの苦笑を一切気にせずに切り捨てた。その

様子に、仁はまた苦笑し、やっぱり空太には分からないかと頭の中で思った。

三鷹仁もまた、空太に類稀なる才能があると勘違いしている人物だった。

「で、空太はなにを……空太、その写真は？」

「コレですか？ 千尋先生の従姉妹さんです」

「それ、いくつだ？」

「写真の通りなら5歳前後という所では？」

「分かった、空太。警察へ行こう」

「仁さん……遂に強姦に走ったんですか？ 分かりました、一緒に行つて骨は拾います

よ」

「違えよー！」

仁は少女の写真を利用して空太を警察へ連れて行き、ロリコンの罪で逮捕させよう……という感じに冗談を言つてからかうつもりだったが、空太の思いがけない反撃に返り討ちに合つてしまった。

「全く……前からだけど、空太は口が上手いな」

「仁さんの口説きテクニクには敵いませんよ」

「減らず口め」

「まあ冗談は……ここまでにして……この子がさくら荘に入るらしいので、迎えに来てるん

ですよ」

「なるほど」

そう言うのと、ロータリーの近くに黒いタクシーが停まり、中から空太の通う水明芸術大学付属高校の制服を着た少女が降りてきた。少女はツカツカと迷い無く歩き、ベンチにトスツと腰をおろした。

空太はその少女を見て、少しだけ見惚れた。少女は日に焼けた事もない様な白い肌
に、さらりと流れる長い髪は傷みもない。

間違い無く、美少女と呼べる女生徒だった。

「あの子、雰囲気あるなあ空太」

「そう、ですね」

「お？ なんだ、空太的には気になるって所か？ 仕方ない、俺の特技を見せてやる。彼女
は身長162cm、体重42kg、上から79・55・78で間違いない。貧乳かと思
うだろうが、見た目は数値より印象深い筈だ」

「いや、そんなのどうでもいです。とりあえず、あの子が多分そうなんで行ってきます」
空太は仁のふざけた雰囲気を一蹴して少女に近づいた。何処か大人びた雰囲気のあ
る少女に話し掛けるのは少しだけ躊躇われる物があつたが、仕事という事で割り切る事
にした。

おそらく会話が可能な位の距離へと踏み行つて、空太が口を開いた瞬間――

「ねえ、貴方は何色になりたい？」

少女の透明な声が響いた。空太は一瞬で動きを止められ、鼓動を高めて驚愕した。

「――俺？」

「そう」

「考えた事は無いよ」

「なら、考えて」

「……強いて言うなら、いろいろな色かな」

「いろんな？」

空太は首を傾げる少女に少しだけ可愛いと思いつつ、こくりと頷いてまた言葉を紡ぐ。

「いろんな色さ。真つ赤だったり、青かったり、緑色だったり、とにかくいろんな色。一色だけじゃつまらない。俺は面白い物が好きだから」

空太の言葉は、少女の眼を少しだけ見開かせた。

「そう、面白いね」

「そいつは重畳。で、君はどんな色になりたいんだ？」

「私？」

「そう」

「私は……今は白かな」

空太は少女の言葉を名前通りだなあと短い感想を持った。

「それは俺の中には無い色だな。面白いよ」

「そう」

空太は少女に手を伸ばして、握手の様な形を作った。少女はその行為に首を傾げているが、空太は久々にニコリと微笑みながら少女に言った。

「千石千尋の頼みで君を迎えに来たんだ。俺は神田空太、君の名前は？」

少女はその言葉に、若干納得と言った感じに答えた。

「私は……椎名ましろ」

「よろしく、椎名」

少女は空太の手を取った。少女の顔は少しだけ、口元が微笑んでいる様にも見えた。



「空太って良いね、音が綺麗。私、好きよ」

椎名ましろは、神田空太に連れられてさくら荘へ向かう途中、そんな事を言い出した。空太は、今までそんな事を言われた事が無かったので、苦笑した。

「それは良かったよ。でもそれを言うならましろっていう名前も良いと思うぞ。イメージに合ってる」

「それはないわ」

「俺の感想だから気にしなくても良いよ」

「そう」

空太は、この時椎名ましろの事を思い出していた。世界的にも有名な超天才的芸術家、椎名ましろ。

空太にとっては周囲の才能人が霞んで見える位の才能人だった。でも、実物を見ると、ただの少女であり、空太にとっては結構天然の入っていると印象を受けた少女だった。

「椎名はスイコーに入るんだっけ？」

「編入」

「やっぱり美術科か？」

「うん。空太は、何処？」

「俺はそんな才能ないからな。普通科だよ」

そう言うと、椎名ましろは黙ってしまった。別に何か悪い事を言ってしまった訳じゃない。ただ単に話題が尽きたただけだ。椎名ましろは空太が話し掛けない限り、まともに話題を振ってくる事は無い。

先程の様に突然空太の名前に付いて褒めて来たりするくらいなのだ。

「椎名はさ、何をしに此処へ来たんだ？」

「……漫画を書きに来たの」

「漫画？」

「そう」

空太はここで、椎名ましろという人物が何故漫画を書くのかと疑問に思ったが、別に彼女が絵を書かなくてはいけないというルールは無い。下手に突っ込んだりはしなかったのだった。

「さて」

「？」

「着いたぞ。ここがさくら荘だ」

空太は少女に振り返ってそう言った。

神田空太の期待

無事に椎名ましろをさくら荘に連れ帰って来た空太は、椎名ましろがさくら荘に馴染めるかどうかの心配を全くしていなかった。何故なら、あの千石千尋の親族であるからだ。

空太としても、親族だからというだけでそんな偏見を持つつもりはないが、この少女はこの道中だけでその特性を垣間見せていたのだ。それは、こちら側の干渉に全くと言つて良い程感情表現が薄い事。つまりは無表情で無感情な返答しかしてこないのだ。

この分ならば、さくら荘の面々が干渉して来てもペースに巻き込む事はあるだろうが巻き込まれる事はないだろう。寧ろ流されるままに動きそうだ。

また、空太の経験則から、才能人と才能人は同種の才能でない限り高確率で上手くやっついていけるのだ。

「椎名、とりあえず入ってくれ」

「分かったわ」

空太はそう言つて椎名ましろをさくら荘へと引き入れた。当然、彼女が此処に入ってくる事は千石千尋からさくら荘全体に言われているだろうから、空太は上井草美咲が何

もしないわけがないと予想していたので、玄関に入って急に鳴らされたクラツカーの音には対して反応しなかった。

「美咲先輩。クラツカーを鳴らすなら不意打ちは止めてください」

「こーはい君はいつもいつも反応が薄いなあ！ そんなんじや厳しい社会は生き抜いていけないぞー！」

「ははは、そんな社会を生き抜いていくには俺には才能やら気力やらが足りていないので心配せずとも大丈夫ですよ」

「さくら荘一の才能人が何を言ってるのかね！ 気力に関しては私がこーはい君に分けてあげよう！ 受け取るが良い〜！」

びびび、と言いながら空太に両手を向けて気力を送ってくる美咲。それに対して空太は少しだけ呻き声を上げて、若さを吸い取られていく……と斜め上の反応を返して美咲を困らせたのだった。

「ま、とりあえず少しは気力が出ましたよ。っと椎名、女子の部屋は2階だから美咲先輩に案内してもらおうと良いよ」

「そうするわ」

「じゃ美咲先輩。椎名の事頼みましたよ」

「任せたまえこーはい君！ ささっ、ましろんこっちだよ〜！」

美咲はそう言って二階にとてててと登って行き、椎名ましろはその美咲に付いていく様にゆっくりと階段をトテトテ登って行った。空太はその様子を苦笑しつつ送り、自分も靴を脱いで部屋へ戻ろうとした。

すると、背後の扉が開く音がしたので、振り返る。そこには駅で何時の間にかどこかへ消えていた三鷹仁と椎名ましろの事を空太に任せた千石千尋が死人の様な顔色で立っていた。その手にはイベントでもするのかと思わせる鍋の材料やお菓子などが詰まったビニール袋がぶら下がっていた。

「先生、仁さん。お帰りなさい。その様子だと合コンは失敗したみたいですね」「うっ……神田に言われて化粧もやり直して言ったんだけどねえ……」

「その結果がそれですか……」愁傷様です」

「くっそ……今度は絶対素敵な彼氏をゲットしてやる……」

ぶつぶつと呟く千尋を放って、仁は靴を脱いで玄関に上がった。空太は三鷹仁の持つビニール袋に眼を向けて、話し掛けた。

「仁さん。それは？」

「ああ、椎名ましろの歓迎パーティの材料だよ。必要だろ？」

「ああ……いい考えですね。面白いですよ、ソレ」

空太はそう言って、仁の両手にぶら下がるビニール袋を一つ持った。

「一つ、もちますよ」

「おう、健気な後輩を持ったもんだ」

「そう思うならその後輩を労わってください」

「気が向いたらな」

そう言いつつ、笑う空太と仁。その光景を見た千石千尋は、だるそうな表情を浮かべて靴を脱いだ。玄関に上がって空太達に近づいて言う。

「アンタらも程々に仲良いわねえ」

「まあ、仁さんにはお世話になってますし」

「空太には随分と助けられてるからね」

「げえ、男同士の友情って奴？ アタシには分かんないわ」

千尋はそう言つて、リビングへふらふらと歩いていく。空太はその千尋を見て仁と苦笑した。そして千尋の後を付いていく様にリビングへ向かう。その途中で、階段上の2階をちらりと見た。

「椎名ましろ……ね。真っ白なましろ、なんちゃって」

「面白くないな、それ」

「俺もそう思います」



翌日、神田空太はいつも通りに眼を覚まして最低限身支度を終えて部屋を出る。すると、昨日の夜椎名ましろ歓迎パーティをしていた一人である上井草美咲が元気に玄関を飛び出ていくのが見えた。その勢いにひらりとスカートが揺れたが、空太は別段美咲に性的な眼を向けている訳ではないのですぐに視線を切つて欠伸を漏らした。

「よっ、空太。随分と眠そうだな」

「ええ……あ、昨日は美咲先輩が寝かせてくれなかったので」

「ゲームの話だよな？」

「そうだったら苦労しません」

「え？ まじで？ マジの話なのか？ やったのか、ヤツたのか!？」

空太はそんな仁の慌て様にくすりと笑つて嘘を証明した。それを見た仁はほつと肩を落として空太に恨みの籠つた視線を向ける。空太はその視線を物ともせずには笑つた。

「はあ、全く……朝から変な冗談止めてくれよ」

仁は空太の笑顔に毒を抜かれた様のため息を履いてダイニングへと入つて行つた。

入れ替わりの様に千尋が出て来て、玄関へ向かう。空太はそんな千尋に話し掛けた。
「今日は早いですね。先生」

「まあね……ああ、神田。ましろの事頼んでいい？ 職員室まで連れて来て頂戴」

「まあ、昨日の今日だし良いですよ」

「頼んだわね」

そう言つて、千石千尋は玄関を出て行つた。

「さて、それじゃあ椎名を起こすでしょう。あの天然の事だ、退屈しないだろうな」

空太はそう呟いて二階へ上がる。椎名ましろの部屋の扉には、上井草美咲が作つたであらうネームプレートが掛かつていた。

「……そういえば女子の部屋に入るのは初めてだったっけ？ 結構緊張するもんだなあ」

そんな事を言いつつ、躊躇なく空太は部屋に踏み行つた。中に入ると、そこには大嵐でも遭つたかのような惨状になっている椎名ましろの部屋。服はばら撒かれ、部屋に有つた小物やシートなんかもそこらじゅうに散らかつていた。

そして、ベッドに椎名ましろの姿は無かつた。

「……退屈しないとは言つた物の……こんなのは想定外だぜ」

とりあえず中に入って椎名ましろの姿を探すと、その姿は案外簡単に見つかった。椎

名ましろの机の下、パソコンが置かれた机と少し離れた位置にある椅子の間に詰め込まれたシーツやタオルの山の中に、椎名ましろは寝息を立てていた。

「やっぱり、この子もさくら荘に入っただけあるな。ほら、椎名起きろ」

「むう……」

「朝だ、起きろ」

「……朝はもう来ないわ」

「人が朝と認識したらソレはもう朝だ。夜だろうと朝だ。朝は眼を覚まして一日を始める時間だ。だから起きろ」

「……おはよう、空太」

空太の言葉に、椎名ましろは眼を擦りつつ起き上がった。のそのそと机の下から出て来て立ち上がる。それに準じて椎名ましろに纏わり付いていたシーツがはらはらと地面に落ちて行った。

その下から出て来たのは、椎名ましろの白く柔らかい肌。下着なんか一切身に着けておらず、全くの裸。その透き通るような肌が、空太の眼に入り、日差しが更にその肌を白く見せた。

「……何故裸ですかね、椎名さん」

「……どうしてかしら」

「俺が知る訳が無い」

空太の言葉に、少し視線を上に向けて何かを考えた後、椎名ましろは昨日の行動を順に答え始めた。

「昨日お風呂で」

「うん」

「服を出して」

「コレ全部？」

「そうよ」

「お前白くなりたいたいとか言ってたけど、もうなってるよ。頭ん中真つ白だ」

空太はそう言って、頭を抱えた。第一印象で白い子だなあとは思ってたけれど、ここまです真つ白だとは思ってなかったからだ。

「失礼ね」

「そう思えるのなら、まずは服を着てくれよ。ほら、制服」

「分かったわ」

「うん、待て。順を追って服を着ようか。いきなりブレザーを着るな」

「？」

空太はまた頭を抱えた。仁や美咲、千尋といった面々に口八丁で上回る空太だが、こ

んなのは初めてだった。言葉自体が通用しない、そんな相手。

空太にとつては、まさしく天敵と言つて良い程に常識知らずな女の子であった。

「はあ……ほら、とりあえずこのパンツ履いて」

「履いたわ」

「じゃあ次はブラ着けて」

「……どうやってつけるの？」

「……マジかよ」

パンツ自体は履かせた者の、椎名ましろはブラジャーの着け方を知らなかった。空太はいままでどうしていたのか、昨日まで着けていたであろうブラジャーはどうやってつけたのか、疑問に思った。

だが、遅刻するのは避けたいし、ずっと彼女の裸を見ているのも目の毒だし恥ずかしくなってきたので四苦八苦しなから彼女にブラジャーを着けてやった。

「女の子にブラジャーを着けさせる、なんて経験したことある奴いるのか……男の中で」

空太はそんな事を思いながら、若干泣けてきたので早々に着替えさせることにした。

「ほら、次はブラウス着てくれ」

「うん」

椎名は手渡されたブラウスに手を通し、そのまま動かなくなった。

「……いやボタン留めなさいよ！」

空太はそう言つて、椎名のボタンを全部上から留めてやる。着るといふ行為に此処までシビアな感情を持ったのは初めてだった。

「ほら、次はスカートだ」

「うん」

椎名はパンツやスカートといったただ履くだけの簡単な物は着る事が出来た。まあ、それが着れない様なら空太は既に匙を放り投げている。

「とりあえずそのまま顔を洗うぞ、こっち来い」

「空太」

「なんだ」

「遅刻するわ」

「そうなたら間違い無くお前のせいだよね」

空太はそう言つて、やってきた洗面台に水を流して椎名ましろの顔を濡らしたタオルで拭いてやる。此処までのやり取りから、椎名ましろに顔を洗うなんていう高度な行為が出来るとは思えなかつたからだ。

「よし、はいブレザー」

「着れたわ」

「はいじゃあ顔を上に上げてくれ」

「分かったわ」

顔を上に向けた椎名ましろの首に、ネクタイを巻いてやり、そのまま洗面台に有ったブラシで寝癖を直してやった。

「……最後に、ほら靴下」

「空太が履かせて」

「……右足、上げろ」

空太はそう言つて靴下を履かせる。自分で履かせようとすれば時間がかかるだろうと瞬時に判断したからだ。足を上げてバランスを取る為に空太の頭に手を乗せる椎名だが、空太はそんなの気にしている暇は無かった

「はあ……ほら、行くぞ」

「どこに?」

「学校だよ!」

空太は思った。千石千尋に任せられた椎名ましろを学校に連れていくという仕事。そんなの簡単に受けなければ良かったと。

だが、その反面。こうも思っていた。

——また面白くなってきた、と。

神田空太の才能

神田空太は改めて椎名ましろという存在の非常識さに頭を抱えつつ、内心で歓喜していた。

それと言うのも、無事に身支度を整えてさくら荘を出た後の事だ。思ったより時間を喰ってしまった事から、用意できなかった昼食を買う為にコンビニに寄ったのだが、椎名ましろは空太が目を話したほんの一瞬に置いてあつた売り物のバームクーヘンを開封してもそもそと食べ始めたのだ。

空太がそれに関して言及すれば、好きだから、という答えが返ってきた。

まあ、コンビニの件はなんとかお金を払う事で店長に許して貰い、昼食も一緒に買ってようやく登校することが出来た。

だが、空太は後悔後に立たず、また過去の後悔後を濁さずという自前の心構えを持っているので、過ぎた事は気にしていなかった。

そして、そんな事よりも気になっていた事があつた。コンビニでなんとなく聞いてしまった質問。お前は今まで何をして来たんだ、という質問に椎名ましろはシンプルに答えた。

『絵を描いてきたの』

椎名ましろはただ、そう答えた。簡単に、単純に、安直に、平凡に、愚直に、当然の様に答えて見せた。そして、その言葉はぐざりと空太の心を揺らした。

何故なら、一番の才能人であると思つていた少女の生涯は絵を描く事全てに費やされてきたと知つたからだ。最高の才能は、最大の経験と努力によつて生まれた物だった。

無論、空太だつて才能だけで椎名ましろの様な功績が得られるとは思つていない。それ相応の努力が必要と言う事は百も承知だ。

だが、それでも椎名ましろの努力は規格外だった。才能人になるには、ここまでの努力が必要なかと空太に衝撃を与えた。

また、その努力を日常と思つて過ごしてきた椎名ましろは神田空太にとつてとてつもなく眩しく、とてつもなく遠い存在に見えた。何故なら空太と真反対に位置した存在だったからだ、

特筆した才能を持たず、努力を諦め開き直つた臆病者と卓越した才能を持ち、呼吸する様に努力してきた天才。

反対にも程がある。だが、それでも二人は出会つてしまった。この出会いはやり直せない。この関係は消すことが出来ない。

だが

今の神田空太にそんな事は関係無かった。開き直った神田空太に椎名ましろは衝撃を与えた、が……それだけだ。

神田空太は衝撃を受けただけでなんら変わりは無かった。何時もの通り、心の中で笑って言葉に出すのだ。

「面倒臭い。やーめた」

その言葉と同時に、神田空太は考える事を止めた。

そんな椎名ましろの状況をさくら荘会議で一応報告した神田空太。そこには千石千尋を初め、三鷹仁、上井草美咲、椎名ましろが在席していた。

だが、結局皆がその報告を聞き流して椎名ましろの世話役掛かり……『ましろ当番』の役目には神田空太が就く事になった。

「まあ良いですが……何れ俺は此処を出ていく予定らしいので」

空太は誰も聞いていない中、そう呟いた。

「空太」

「なんだ？」

「仲良くしてね」

「ああ、むしろこっちからお願いたしたい位だ」

空太はましろのそんな言葉に笑みを浮かべてそう言った。

◇ ◇ ◇

神田空太の朝は早い。此処二日程は皆と同様の時間で起床していたが、元々空太の起床時間は朝の5時だ。

では、そんな時間に起きて何をやっているのか？ 答えは簡単だ。神田空太は起床してから7時までの2時間、自身の研磨に費やしている。特に意味は無いのだが、最初は面白そうだなあとという理由から初め、最近では惰性で続けている。

だが、そんな日課も中学時代から続けてもう3年。随分と身体は鍛えられ、喧嘩ならば随分と強くなっていた。

やっている事は、ジョギングとシャドーボクシングの真似事。自身の手をどう動かせば効率的に打撃を与えられるのか、どうすればよりダメージを与えられるのかを思考

し、研鑽してきたのだ。

これが、他の誰も、神田空太自身ですら気付かない神田空太の誇るべき努力だった。神田空太はこの日課こそ、椎名ましろの日常の様な努力と同種の行為だと気付いていなかった。それも、3年というけて人の人生の中で短くない時間の中で行なつて来た行為。

—— 『継続する才能』

それが神田空太の持ち得る才能に他ならなかった。だが、気付かない。この行為が齎している事実には誰も気づかない。これまでも、そしてこれからも。

「ふう……こんなこと続けてても意味ないんだけど……い！」

空太は脱力した状態から最高速の速度まで瞬時に加速させて左拳を振り抜き、反対に作つた右手刀を左拳の振り抜きの勢いを利用して回転で下から上に切り上げた。

その動きは、もはや中学上がり立ての高校一年生というには随分と熟練されていた。速さは並のボクサーの拳より迅く、威力も成人した男性なら一撃で意識を狩りとれる位には大きかった。

「——ふう……さて、それじゃあそろそろ準備しないとな」

空太は置いておいたタオルを使って汗を拭く。空太の身体からは尋常じゃない位汗が流れていた。

それだけ空太が集中していたという事。なんとなく行なう何百回の素振りより、最大限集中し、どうすればいいのか思考して行なう最高の素振り一回の方が何倍もの価値があるのだ。

とどのつまり、そういう事。空太の行なつて来た行為は、プロボクサーの行なう様な数のある長い特訓ではなく、質ある短い特訓。

故に、空太の特訓はプロの行なう訓練と同じ位の成果を上げる事が出来ていた。ルール無用ならプロボクサーともやりあえるのだ。ボクシングでやった場合は一撃でやられてしまうが。

「ましろ当番、か………おもしろいね、さくら荘は」

空太はそう言つて、自分の部屋へと戻り、シャワーを浴びた。

「時間は………6時30分か。そろそろ椎名を起こさないとまた遅刻するな」

空太は制服に着替えて、自分の身支度を終える。そしてキツチンで昨晩の内に準備しておいた弁当の材料をささっと料理して弁当を作る。無論、椎名ましろの分もだ。

そして、空太は弁当を作つたら2階に上つてなんの許可も取らずに椎名ましろの部屋へと踏み入る。マナー違反と言われるかもしれないが、最早空太に椎名ましろに対する

マナーは存在していなかった。

「椎名、起きろ」

「……………」

「……………はあ……………ん？」

若干大きめの声量で起こしたのだが、起きない。かといって、美咲の様に乱暴に起こすにはまだ知り合つて間もなかった。どうしたものかと思考錯誤するなか、空太は机の上に置かれた物に視線を向けた。

それは、椎名ましろの書いた漫画。手に取つてみれば、上手い。絵はとてつもなく上手かった。流石と言うしかない。

だが、反対に物語はとんでもなくつまらなかった。

「つまらない」

「……………おはよう」

「ああ、おはよう椎名。色々疑問はあるけど服を着ようか」

空太は視線をましろへ移す。そこにはやはりというかなんというか、裸のましろがそのそと出て来ていた。

ちなみに、何故空太がましろの裸を見て反応が薄いのかというと、もう見せてんだし見て良くね？ という開き直りから来ている。いやまあそんな理屈が通るほど世間は

甘くは無いのだが、これがさくら荘という物であった。

「眠いわ」

「それは錯覚だ」

空太は椎名ましろがやってきた翌々日もまた、こうしてましろ当番の役目を果たすのだった。

神田空太の前兆

神田空太がましろ当番になってからという物、椎名ましろの奇行は空太に様々な気苦
勞を掛けていた。

生活能力皆無な所から始まり、コンビニに行けば売り物のバームクーヘンをもしやもしやと食べ始め、学校ではちよくちよく空太の教室へやって来ておやつや弁当を強請^{ねだ}する。

いくら神田空太が面白い事が好きだと言っても、椎名ましろの非常識さはとてもじゃないが空太の許容量を軽く超えていた。

そんな中、空太にもさくら荘以外の付き合いがある訳で、学校に通学してましろと普通科と美術科の教室で離れた後は、自身の教室で友人と共に駄弁つたり授業を受けたりする。

そして、現在午前10時40分。空太の学校では二時限目が終わった後の休み時間。空太の席の近くに座る女生徒、青山七海が神田空太に話し掛けた。

「神田君」

「ん？ ああ、青山か。どうした？」

「いや、何でもないんだけど。ひかり達は元気？」

「ああ、元気だよ。まあ、引き取り手が見つからないのがちよいとネックなんだけどね」
ひかり達、とは空太が拾って来た計七匹の猫達である。現在、空太がなんとなく掲げた『脱・さくら荘！』を実現させようとしていると見せかけるために上辺だけは猫の引き取り手探しをしている。

普通寮に行くには猫は連れていけないからだ。それに青山七海は手伝ってくれてい

る。
「あ、そういうえば……青山。美咲先輩が新作出来たって言ってたぞ」

「え？ そうなんだ」

「……なんか歯切れ悪いな。いやなら断っても良いんだぜ？」

「いや、やるよ。やりたい」

「ならいいけど」

何をやるか、と問われれば美咲の作ったアニメーションの吹き替えだ。何を隠そうこの青山七海の将来の夢は声優になる事、演技力はかなり高い。なにせ、アニメーションの天才上井草美咲が指名して頼みたいという位なのだ。

この青山七海もまた、才能に恵まれた一人であった。一応、生粋の天才という訳ではないのだが、彼女の努力あってこそその才能だろう。謂わば、後天的に生まれた秀才。そ

れが青山七海。

そして、神田空太が性懲りもなく嫉妬した人物の一人であり、神田空太に自分とは比べ物にならない位の才能があると勘違いしている人物でもある。

神田空太もまた、後天的な才能を目覚めさせた一人であるのだが、やはり誰一人として気付く事は無いのだった。

「まあ、頑張れ」

「神田君に言われると皮肉に聞こえる」

「そうか。そいつはまごうことなく錯覚だよ」

空太は苦笑して七海にそう言った。七海はそんな空太に仏頂面を浮かべ、次の瞬間にはため息を吐いた。

「ねえ、新しい子……来たんだよね？」

「椎名ましろ。絵画の天才だよ……全くもって羨ましいねえ、そんな才能俺も欲しいぜ」
「……神田君には必要ないよ。私が羨ましい位の才能を持つてるじゃない」

「——そう、だったらいんだけどね」

青山七海の言葉に、空太は苦笑しつつそう言った。ただ、なんとなく胸がじくりと傷んだのだが、空太は開き直る事でその痛みを切り捨てた。

そこへ、神田空太に声が掛かる。

「神田ー！ お客さんだぞ〜」

「ん、ああ。……って、椎名じゃないか。どうしたんだ？」

空太は呼ばれたので教室のドアに向かって行ったのだが、そこに居たのは件の椎名ましろ。

「空太、バームクーヘンが食べたいわ」

「ああ、なるほど。それを言う為だけに此処に来たのか」

「そうよ」

「はあ……青山あ」

「な、なに？」

椎名ましろから視線を切ってクラスの方へと視線を向けると、全員が空太と椎名の両名を見ていた。その視線に含まれるのは、9割の好奇と1割の嫉妬。非常に居辛くなる視線だった。

だが、空太はそんな視線を気にせずに青山七海に言った。

「ちよつと椎名に餌上げてくる。先生に適当な言い訳をしておいてくれ」

「ちよ……そんなの私に頼まないでよ！」

「頼んだ。青山だけが頼りだ」

「ぐっ……むう……仕方ないわね」

青山がそう言った瞬間、空太はましろの手を取って教室を出る。

「空太、バームクーヘン」

「はいはい、今から買いに行くんだ。つべこべ言わずに付いておいで」

「分かったわ」

空太は権名を連れて、教室を離れていった。

◇ ◇ ◇

さて、それから時間が経ち、空太はさくら荘へと帰って来ていた。ましろはすでに部屋へと戻り、原稿を書き始めている。無論、漫画の新人賞に応募するためだ。

空太は特にやる事は無いので自由に過ごしていた。ゲーム作りがしたいと、今でも思っているのだが、いかんせん空太はやる気が起きていなかった。

落選が怖いからだ。開き直った空太は何もしないのだ。敗北から逃げ、勝てる様な勝負しからない。

「……部屋に戻るか」

空太は部屋へと戻る。それ以外にやる事は一切なかったのだった。

——そしてこれから、椎名ましろと神田空太を中心とした騒動が始まる。

神田空太の羞恥

神田空太と椎名ましろが出会ってから、少しだけ時間が経った。空太がましろを迎えに行つた四月五日から既に一カ月。

空太もましろ当番が板について来て、もうましろの世話に関しては手慣れた物。空太以上にましろの世話を出来る人物は、さくら荘にはいなかった。

だが、神田空太もましろ当番をやるに当たつて随分と頭を悩ませたものだった。何故なら、一カ月経つた現在においても椎名ましろは生活能力零であり、洗濯も着替えも起床も登校も買物ですら何も出来ない。全て空太が世話をしていたのだ。

幸い、空太の朝は日課によつてとても早い。故に準備によつて取られる時間は十分にあつた。空太の朝の行動は、5時に起床し7時まで訓練をして、終わつたら軽くシャワーを浴びて自分とましろの分の弁当を作る。7時15分頃にましろを起こして準備させ、登校出来る状態にさせる。そして7時45分には寮を出て登校、途中のコンビニでましろのおやつであるバームクーヘンを買つて学校へ。

これが空太の毎朝の行動。訓練以外はほぼ全てを椎名ましろの為に使っていた。

それは、今朝もそうであり、いつものように空太はましろと一緒に登校した。だが、今

日は少しだけ違う所があった。

神田空太は椎名ましろがやって来てから、一人で下校した事は無い。椎名ましろの世話役として、毎日登下校を共にしているからだ。無論、椎名ましろにも諸々プライベートはある。漫画を描くに当たって彼女のサポート役として編集者が付いているので、たまに彼女はその編集者に会う為に空太と共に下校しない事もあった。

だが、そういう時は青山七海が決まって共に下校していたので、やはり一人で下校するという事態には陥らなかった。

でも、今日は違った。椎名ましろは編集者の下へ、青山七海はバイトでいかなかった。つまり、久方ぶりに一人で下校する空太の姿が、そこにはあった。

「久しぶりだなあ……一人で帰るのは」

空太はそう呟きながら、さくら荘への帰路を歩く。

「さくら荘、出ていくのか……俺は。まあそんなつもりはさらさらないけど、何も起きないなあ……いつそ破り捨てようか、アレ」

そう言いつつ、空太はさくら荘の玄関に辿り着いた。扉を開いて中に入ると、そこには大量のキャベツが栄光のキャベツロードを築いていた。平たく言えば、大量のキャベツが道に沿って置かれており、それは神田空太の先輩である三鷹仁の部屋へと延びていた。

「……面白いな、コレ」

「何が面白いもんか。全く」

「ああ、仁さん。居たんですか」

空太が仁の部屋の前でそう呟いていたら、背後から三鷹仁がやって来て空太に話し掛けた。空太は顔だけ仁の方へ向けて、面白そうに笑った。

「どうせ、美咲先輩の仕業でしょ。さしあたり、仁さんの誕生日と見た」

「ああ、その通りだよ」

「美咲先輩の事だから、今朝俺が弁当でキャベツを切ってる所を見てこんなこと思い付いたんだろうなあ」

「原因はお前か」

仁は空太の肩を軽く小突いて責める様な口調でそう言った。空太はその言葉が本気ではない事を分かっているので苦笑で返した。

「さて、開けないんですか？ きつと美咲先輩全裸にリボン巻いてデツカイ箱の中に待機してますよ。多分に部屋の中もキャベツで埋まってるんじゃないですかね」

「なんでお前あの宇宙人の考えが読めるんだ？」

「実は俺心が読めるんです」

「なるほど。お前も宇宙人だったか」

「そういうことです」

空太はそう言って仁の部屋の扉を開ける。仁は勝手に開けるなよと今更な言葉を吐きつつ、自室の中を見る。そこには、空太の言った通りにキャベツだらけの部屋があり、真ん中にはデカイ箱が置かれていた。

「ね？」

「……マジで宇宙人なのか、空太」

「そんな訳ないでしょ。何言ってるんですか」

空太は仁の割とマジな問いに、少々馬鹿にした様に鼻で笑ってそう言い捨てた。仁は、どっちなんだよと小さく突っ込んだ。

「それじゃ、俺はこれで。美咲先輩と夜までしつぱりやっててください。一応誰も来ない様に取りはからっておきますよ」

空太がそう言った瞬間、仁は息を詰まらせ、箱はぴくくと動いた。

「さて！ こんなのを放置して行くな！」

「ええ……俺はちよつと用事があるので」

「嘘付け。どうせ部屋に戻って寛ぐくらいしかないんだろ」

「重要な用事じゃないですか」

「まずはその重要さに付いて俺を納得させてみる」

に何故かあったガムテープで扉をこれでもかという位に塞いでやった。

「さて……部屋に戻ろうかな」

空太はそう呟いて部屋に戻る。後ろの方で響き渡る仁と美咲のじたばたする物音が聞こえてきたのだった。

◇ ◇ ◇

「空太」

「椎名か、どうした?」

仁の部屋から戻る途中で、空太は椎名ましろに遭遇した。彼女は空太に様があった様で、空太はましろの目の前で立ち止まり、言葉の続きを待った。

「お願いがあるの」

「へえ……まあいいよ。どうすればいい?」

「私の部屋に来て」

そう言うと、椎名ましろは自分の部屋へと歩いて行ってしまった。空太は嘆息して二階に上がり、扉を開けて待っていた椎名ましろに付いて彼女の部屋へと入って行った。

「脱いで」

「分かった」

空太はましろの変なお願いにも従順に従った、空太はこの一カ月に椎名ましろという人物をいろんな面で観察し、知った。

彼女の行動理念は大抵一つ。漫画を描く事だ。故に、何か変なお願いをするときには漫画を描く為に必要だと思つたから頼んでいるのだと、空太は知つていた。

故に、空太は服を脱げという一歩間違えれば変態な頼みにも従つた。しかし、最低限の羞恥心は空太だつて持っている。上半身裸になつた所で空太は脱ぐを止めた。

「流石に俺が恥ずかしいから上半身だけで勘弁してくれ」

「……分かつたわ」

ましろは少し残念そうに言つて、空太をベッドに座らせた。そして、空太の肌に触れ始める。その身体は、日々鍛えられてきた無駄のない肉体。引き締まつた筋肉、無駄な肉の無いスマートなスタイルは、まさしく肉体美であつた。

椎名ましろは、芸術家という視点でも漫画家という視点でも、その魅力に目を見開き、しばらく見惚れた。触れば押し返してくる張り詰めた筋肉は、ずっと触つて痛いほどたくましく、見た目からは分からない空太の努力の結晶がそこにはあつた。

「——空太」

「ん？」

「抱いて」

「……抱きしめる、であつてる？」

「うん」

空太はましろの腰に手を回して、力強く抱きしめた。ましろはその身体から伝わる温かさと、肉体の強靱さに若干癒される様な感覚を味わった。

また、それは出来る事なら少しでも長くそうして欲しいと思う位の物だった。

「もう………いいわ」

「おう」

空太はましろを放して、若干赤くなつた顔を熱を覚ます様に手でパタパタと仰ぐ。正直に言つてしまえば、女子を抱き締めるなんて初めてやったのだ。いくら空太でも無反応ではられない。

「はあ………椎名。漫画、描けそうか？」

「………」

椎名ましろはその問いに答えずに漫画を描き続ける。空太は苦笑して服を着ようとしました。そしてそのまま部屋に戻ろうとしていた。

だが、それは椎名ましろが許さなかった。

「駄目よ。まだ付き合つて貰う」

「……一回じゃ足りないのか？」

「そうよ。今夜は寝かさないわ」

「そいつはまあ……一回は言われない言葉だね」

空太はそう言って、手に取ったシャツをその辺に投げ捨てたのだった。

神田空太の内心

翌日

結局、神田空太は椎名ましろによつて本当に夜を起きたまま過ごす事になった。空太の身体に触れては漫画を描き続けるましろは、まるで機械の様にずっと起きていて、スイツチが切れたかのように急に眠った。

最終的に、空太が解放されたのは朝の5時。空太の起床時間を過ぎていたので、空太は今更寝るのもなあと思いつつ、普段の日課をこなす為に庭へと足を向けていた。

だが、庭に出るに当たつて水分補給のための飲み物とタオルを取りにダイニングへ入つた空太。入り口に差し掛かつた所で空太は足を止めた。

何故なら、そこには先客がおり、先輩である三鷹仁がいたからだ。なにやら深刻な雰囲気で携帯電話を耳に当てていた。会話の内容から、電話の相手はおそらく上井草美咲のアニメーションに魅せられた会社の地位の高い者だろう。

脚本家としてそこそこ才能を持つ三鷹仁だが、その才能は上井草美咲に大きく劣る。故に、彼女のアニメーション演出の前に、彼の脚本作品は霞んで消えてしまう程良くは無い作品だった。

「——俺は美咲のマネージャーでも何でもないので、そういう話なら美咲に直接持つていってください。それでは」

仁はそう言つて携帯の通話モードを切つて一息吐く。空太を見つけて苦笑すると、仁は椅子に座つて空太に話し掛けてきた。

内容は、おそらく空太が聞きたいであろうと推測した電話の内容と相手の事。

「アニメ会社のプロデューサーだよ。美咲にはもつと良い脚本で作品を作つて欲しいんだとさ。まあ自分の作品で代表作を出して欲しいっていう魂胆見え見えだけだな」

「美咲先輩はモテますね。良い人からも悪い人からも、あと……仁さんからもね」

「！ はあ……空太には敵わないな。本当に心でも読めるんじゃないのか？」

「心が読めたらさくら荘にはいないし、椎名の事で四苦八苦しませんよ」

そりゃそうだ、と仁は首を振つて嘆息する。

「空太はなんでまたこんな朝早くから？」

「椎名の奴が寝かせてくれなくて。寝るのも面倒なので日課をこなそうかと思ひまして」

「日課？」

三鷹仁は神田空太の日課を知らない。彼は普段から朝帰りなんて日常的に行なうのだが、空太が日課を行なう場所は、玄関からは丁度見えない場所にある故に知らないの

だ。

ほんの少しの気まぐれで空太の日課を知ることが出来たが、これまで知られなかったのは偶然の生み出した結果と言つて良い。

「はい。まあ惰性で続けてる様な意味もなく、才もない唯の日課ですよ。それ以上でも以下でもなく、可もなく不可もなく、ただ続けてきた俺の平凡な日課です」

そう言つて、空太は水筒にお茶を注いでタオルを持ち、ガラス戸から庭へと出た。

空太の格好はタンクトップに膝下程までの短パン。寝間着のままの格好だが、寝汗や洗濯の関係から空太は普段からこの格好で日課を行なう。

「日課って……一体何の——!?!」

仁は空太の後を追う様にゆっくりと庭へと通じるガラス戸へと出る。そして、そこから庭を視界に入れた瞬間、言葉を失つた。

「ふっ——!」

何故なら三鷹仁は、一瞬で集中状態に入つてその四肢を一切ブレさせずに綺麗に軌跡を描かせる空太の動きに魅了されたのだ。

神田空太の一挙手一投足に込められた空太の気迫が仁の肌を通り抜け、鳥肌を立たせ

た。空太の瞳に映るのは、自身の動きを投影させた同等の相手。動きながら自身の動きを観察し、見定め、改良していく。ひとつ前の動きより鋭く、一つ前の動きより美しく、その四肢を振るう。

「……………すげえな」

三鷹仁のそんな眩きは返事もなく、仁の視線はただ空太に釘づけになった。

二人の間に生まれた騒々しい沈黙は、空太の日課が終わってタオルを手に取る二時間後まで続いた。

◇ ◇ ◇

「……………凄いな、空太は」

「何がですか?」

一旦シャワーを浴びて制服に着替えた空太に仁はそう言った。現在は仁と空太の二人で軽い朝食を食べていた。現時刻は6時40分。空太の日課は仁もいる事から何時もより少し早く終わったのだ。

「なんというか……………才能もあるし、空気も読めるしさ」

「仁さん」

「なん……なんだ？」

仁は俯かせていた顔を空太に向けて、一瞬言葉に詰まり、もう一度聞きなおした。何故なら、空太の表情が何時になく真面目だったから。その言葉は間違っていると、雰囲気からそう言っているのが理解出来た。

「まず、最初に言っておきます。俺には、特筆した才能なんてありません。凄い、という言葉は椎名ましろ見たいな天才が向けられる言葉です」

「……」

仁は、空太の言葉に同様に真剣な表情を浮かべた。神田空太より2年ほど多く人生での経験を積んでいる三鷹仁。

彼は、その空太の言葉を聞いて、ある感情がふつふつと湧いてきた。結果、空太に向けて仁は自分勝手な八つ当たりの言葉を吐いた。

「空太。お前さくら荘出ろ」

「………椎名と猫がいるんで無理です」

「なら、猫もましろちゃんも俺が引きとる。これで残る理由は無くなっただろ？」

「……」

「空太、人のせいにするなよ」

三鷹仁の心に浮かんだのは、嫉妬と苛立ち。空太に才能があると思っっている仁にとっ

ては、空太の才能を馬鹿にするような言葉に怒りを覚えたのだ。また、彼の才能に対する嫉妬もあった。

その感情は、幼い頃より空太が抱いてきた感情だった

故に、空太には目の前で仁が自分に投げつけてくる言葉に込められた感情がなんなのかをすぐに察した。

「人のせい、ですか」

「空太の気持ちはよく分かる。他人に理由を求めて、逃げ道を作って安心してる。敗北が怖いから負けた時に自分に責任が来ない様にしたい、そうだろう？」

その通りだった。空太がさくら荘に入ってからこれまで一番良く話していたのは仁だ。故に、仁には空太の人となりが良い分かっていた。

本来の人間性とは少し違うが、空太は才能がある癖に憶病な性格をしているのだと、そう考えていた。

「空太が出ていくなら、俺は猫もましろちゃんも引き取る。これは嘘じゃない」

「……へえ」

「自分の居場所位、自分で決めろ。出ていく詐欺なら、もう飽きたぞ」

仁はおそらく、これが空太へのトドメになるだろうと思う言葉を容赦なく吐いた。空太はその言葉に俯くでもなく、仁の視線から自身の視線を外さなかった。

そして、空太はその言葉に対して——笑った。

「？」

「あーあ、やっと来た。何時まで経つても来ないからそろそろ止めようかと思つてたんですけど」

空太はそう言つて、自分の部屋へと戻り、『脱さくら荘！』の文字が書かれた半紙を持つてきた。仁はそんな空太に困惑し、何も言えないでいる。

「悪いですが、仁さん。俺はこのさくら荘を出ていく気はありません」

そう言つて、空太は手に持った半紙を縦に引き裂いた。

「なっ……！！」

「俺は、さくら荘が好きです。こんなに面白い場所、出ていく訳が無い。それに、なにやり今は此処に……椎名ましろがいる」

「ましろちゃん……？」

「そうです。俺はさくら荘を出ていく気は無いし、ましろ当番を止めるつもりもないです」

空太は仁の言葉を一つ一つ潰していく様に否定していく。

「俺が他人に理由を求めて、逃げ道を作って安心してる？ 敗北が怖いから負けた時に自分に責任が来ない様にしたって？ そんなの、俺が一番分かってますよ」

そう、分かっているのだ。神田空太は自身の人間性を良く分かっている。敗北は怖いし、責任を問われるのは嫌だし、逃げ道があれば安心する。

負ける勝負は逃げればいいし、逃げられないなら手を抜くなりして負けたのは本当の実力じゃないと自身に言い聞かせればいい。

そうして生きて来たのだから。それでも、空太は笑って過ごしている。何故なら、神田空太は既に――

「俺は全部投げ出したんだから」

――開き直っているのだから。

神田空太の信頼

神田空太は、三鷹仁とのやり取りを終えて、学校へやって来ていた。さくら荘を出る気は無い、そう言い放った後の三鷹仁の様子は黙り込んでしまっただけだった。神田空太は決して全てにおいて才能が皆無な男じゃない。確かに、もち得る技術の中には才能人に匹敵、もしくはそれ以上の物を持っている。

生まれ持った才能は無い、が後天的に得た才能ならある。それが神田空太の氣付いていない【継続する才能】。形ある才能とは違って、どう誇ればいいのかは分からない才能だが、それでも確かに空太はその継続力で得た武芸をもって三鷹仁を魅了してみせた。これはどうとらえても才能だろう。

だが、神田空太は椎名ましろという生まれながらの才能人で生まれてなお努力し続けた天才を知っている。そしてその努力が他の誰でもない神田空太のやってきた事と同等の価値を持っているという事は知らない。

それを知っているのは、神田空太の武芸を垣間見た三鷹仁唯一人。さくら荘の誰もが思っている神田空太が高い才能をもっているという事実。それはもはや勘違いでは済まない所まで来ていた。

「空太」

「どうした椎名」

「さくら荘、出ていくの?」

「仁さんの会話聞いてたのか?」

「途中まで」

「なるほど」

学校へはいつも、椎名ましろと登校している空太。当然、教室へ向かう際に分かれる所までは一緒に居る。そんな中、椎名ましろは神田空太にそう聞いた。

「出ていかないよ」

「本当に?」

「ああ、椎名もいるし。俺はさくら荘が嫌いじゃないしな」

「そう」

椎名ましろはそう言って、自身の教室へ向かって行った。振り返る際に見えた椎名ましろの口元は微笑んで見えたが、神田空太は気付かなかった。

背中合わせでそれぞれの教室へ向かう二人。神田空太は教室の前で一瞬だけ立ち止まり、ドアを開けながら呟いた。

「椎名がいるのに、離れる訳もない」

神田空太の頬は少しだけ、赤かった。



神田空太は、商店街だけに留まらず学校内外でかなり顔が広い。この高校に入ってから、神田空太は猫を拾ってさくら荘へと移り住んだのだが、そのせいで神田空太の名前は学校中に広がった。それだけさくら荘と言うのは認知度が高いのだ。勿論悪い意味でだ。

そうして上がった知名度をどうしようかと神田空太は5分程の時間で考え、結論を出した。ここまで来たらもっと知名度上げてしまえと。

次の日から神田空太は積極的な様々な行動を取り始めた。教師陣の手伝いを率先して行い、上級生との交流として何でも屋的なポジションを気付いて運動部や文化部関係無くマネージャーの様に準備や備品整備の手伝いを行ない、誰もやらない様な窓ガラスの拭き掃除や雑草の草むしり、体育倉庫の整理や寮や体育館などの学校施設の掃除及び備品整理等々色々だ。

時には生徒会の手伝いも行なったし、生徒に知られても良い範囲で教師の仕事を手伝ったりもした。校長先生とは休み時間を利用してたまに雑談しにいたりマツサー

ジをしたりと交流を持ったし、校外でも商店街の掃除やボランティア活動、保育園や小学校へは読み聞かせや子供達の世話をしにいたり、こづかい稼ぎ感覚で商店街のお店を時々アルバイトしたりもする。

そうしていると、自然と神田空太の顔はさくら荘と言う知名度を抑え込んで良い方面で有名になっていった。教師達からは随分と慕われ、校長からは孫の様に慕われ、生徒からは普通科や美術科の分け隔てなく顔が知れており、すれ違う生徒一人一人が神田空太へ挨拶したり声を掛けたりする。

もはや神田空太はこの高校の中で知らない生徒は一人もおらず、神田空太を嫌っている生徒を見つける事の方が難しかった。

「神田先輩、こんにちはー」

「おう、こんにちは」

そんなこんなで、神田空太は一年生の時間の殆どをそう言った活動へと注ぎ込み、二年生へと進級した。今もちよくちよく掃除をしたり、ボランティアをしたりと活動を続けているが、むしろ当番故に最近はあまりやれていない。

それでも、神田空太への様々な信頼と慕っている人々の気持ちは全く揺らがない所を見れば、三鷹仁の言う神田空太の人に好かれる才能と言うのも、あながち間違いではないだろう。

「空太」

「ん？」

「お弁当」

「ああ、そーいや渡してなかったっけ？」

椎名ましろは神田空太の所へお弁当を受け取りに来ていた。最初は椎名ましろが空太の教室へ来ると、教室中でざわめきが起こったのだが、今ではこれも日常と化している。

それは、椎名ましろの知名度と神田空太の知名度が大きい事から来ている。

「ほい」

「……」

「どうした？」

「空太も、一緒に食べる」

「なるほど、そいつは嬉しいお誘いだ。でも悪いな、俺この後用事があるんだ。今度埋め合わせするから今日の所はいつも通り美術科で食べてくれ」

「……分かった」

椎名ましろはそう言って元来た道を帰って行った。神田空太はそんな椎名ましろの後ろ姿を見送りながら微笑し、自分の席へ戻る。

用事というのは、担任の教師の手伝いだ。活動があまり出来ていないとはいえ、学校に居る間は良く教師から手伝ってくれないかと言葉が掛かる。

とはいっても、別に単なるお手伝い係扱いされている訳ではない。代わりにいろんな教師から駄賃としてお菓子を貰ったり、図書カードを貰ったり、生徒大勢でやる進路ガイダンスより細かく質疑応答出来る個人面談の機会を貰ったり、食事に連れて行ってもらったりと等価交換でのやり取りとなっている。

故に、空太はパシリに使われる事は無いし、寧ろお互いの為に何かをしあう様な関係が築かれているのだ。

「さて、それじゃあ行くとしますか」

神田空太はそう言って、食べ終わった弁当箱を仕舞い、教員室へと足を向けたのだ。た。

神田空太の焦燥

神田空太はましろ当番である。ましろ当番とは椎名ましろのお世話係であり、介護役。

椎名ましろは絶望的なまでに生活能力の無い人間である。故に、洗濯や食事、果ては自分の着る服や下着まで誰かが面倒を見なければならぬ。

この二人は持ちつ持たれつの関係ではなく、片や一方的に持ち、片や一方的に持たれる関係だ。無論、神田空太が持ち、椎名ましろが持たれる関係。

そんな二人が最近行なった事といえば、椎名ましろの夢である漫画を描く事に必要であるという事で、空太が上半身裸になってましろを抱きしめるといふ行為。

実体験は未体験時より精密に絵を描くことが出来る。それが椎名ましろにとって必要な事だったのだ。

「空太」

「なんだ？」

そんな体験をして来た二人は、今日も椎名ましろによって新たな体験を始めようとしていた。

「付き合って」

そんなましろの言葉に、神田空太は冷静に対応した。下手すれば告白にも聞こえるこの言葉だが、神田空太は椎名ましろに対して彼女が恋愛に目覚めたなんて思わなかった。彼女にあるのは漫画と絵位の物だ。

「何処にだ」

「今度の日曜日、行きたい場所があるの」

「なるほど……」

空太はそう言って自分の予定を思い出す。次の日曜日は、空太に予定があつた。それは、商店街の店のバイト。となると、彼女に付き合うのは少し難しいだろう。

「悪い、その日は忙しい。仁さんにでも頼んでくれ」

この時、空太はちゃんと行く場所を聞いておくべきだった。聞けば、空太はバイトをぶつちぎってましろに付き合つただろう。

「……分かつたわ」

「おう」

そうして、椎名ましろは神田空太に背を向けて去っていく。神田空太はこの時、胸の中で少しだけ黒い渦の様な不安を抱いた。嫌な予感、虫の知らせ、そんな言葉が合う様な不穏な感情が、空太の中で渦巻いたのだった。



日曜日

そんなこんなで、神田空太は嫌な予感がしつつも日曜日を迎えた。学校も休みで、バイトをするべく商店街に向かう為に準備をしていたら、不意に電話が鳴った。

「はい。ああ島田さん、今からそちらに向かう所で……ええ?」

その電話の相手は空太が今日バイトに行く先の店長。そして空太に告げられたのはその店長が風邪をひいた事による臨時休業。つまり、バイトのキャンセルだ。

それにより、空太は今日の予定を失ってしまった。

「はい、分かりました。お大事に……さて」

電話を切つて、一息吐く。そしてとりあえず部屋を出ようとしたその時、勢いよくドアが開いた。ドアを開けた本人は上井草美咲。その様子はかなり慌ただしかった。

「こーはい君こーはい君! 大変だよ! 仁とましろんが!」

「どうしたんですか?」

「ラブホテルに向かったんだよ!」

その言葉を聞いた瞬間、空太はバイトの為に準備を終えていた自分の携帯と財布を持

ち、上井草美咲を押しつけて部屋を出た。その表情に浮かんでいたのは、神田空太には珍しい――

――焦りの感情だった

◇ ◇ ◇

空太は迅速にさくら荘の住人である赤坂龍之介の作りあげた発信機を利用して仁とましろの位置を探知、その鍛えられた脚力と体力をフル活用して追い掛けた。

「こーはいくんっ……は、速いよ……！」

その後ろから追いかけて来たのは、上井草美咲。彼女は仁の事で追い掛けて来たのだ。だが、空太はそんな彼女を見て冷静になり、どうにか表情をいつもの空太に戻した。「美咲先輩、仁さんと椎名の場所は分かっています。とりあえず追い掛けましょう」

「ふう……うん！」

空太と美咲は頷いて発信機を利用して仁とましろの居場所へと向かう。そして、その二人は存外早く見つける事が出来た。

ましろと仁はラブホテルに向かうと言いつつも、こんな明るい内に向かう訳では無かったようで、一緒に買い物をしていた。

「……椎名」

不意に、空太がそう漏らした。美咲はその言葉を聞いて、空太の顔を覗き見る。その横顔から垣間見えたのは苦しそうな空太。そして、その気持ちを美咲は良く知っていた。

故に、声を掛けてやることが出来ない。いつものように元気に空太を元気づけてやりたいのに、出来ない。何故なら、美咲自身がその気持ちをどう抑えればいいのか分かっていないからだ。

自分でも良く分かっていない感情を抱いている相手を元気づけるなんて、誰にも出来ないのだ。

「こーはい君。仁とましろん……どう見える?」

だから、彼女が空太に掛けてやれる言葉は元氣づけるどころか現実を押しつけるような言葉。そんな自分が嫌になったが、それしか出来なかった。

「デートに見えますね」

空太はそう言った。

だが、その表情からは先程までの苦しさが消えていた。美咲は力強くそう言った空太の顔をもう一度覗き見る。

空太の横顔からは苦しきではなく、決意が見えた。

「こーはい君、どうしたの？」

「何がですか？」

「なんか、やる気に満ち溢れてる感じがする」

「ああ……俺は椎名に対して、多分少なからず好意を抱いています。それはまあ仲良くなりたいたとか、一緒にいたいだとか、そういう類の物です。美咲先輩が仁さんに抱いている感情と、多分一緒ですよ」

それが意味するのは、神田空太が椎名ましろに対して恋をしている事。だが、美咲はそうなるきっかけが今まで有っただろうかと首を捻る。

「こーはい君は、ましろんを何時好きになったの？」

「最初に会った時からです」

一目惚れ。それが空太の恋の始まり。

「なるほど」

「俺、決めました。仁さんに、椎名ましろは渡さない」

神田空太のその言葉に、美咲は眼を見開いた。

「美咲先輩。俺はどうしようもなくアイツが好きになってしまったんですよ。だから、待たない。恋愛は相手が告白してくれるのを待つ物じゃない。相手をどれだけ自分の思いを伝えて手に入れるかです」

神田空太はそう言って、椎名ましろと仁を追う。美咲はそんな空太の後ろ姿を眩しそうに見ながら、追い掛けた。



時間は経ち、ましろと仁は聞いていた通りにラブホテルに向かった。空が茜色に染まる中、椎名ましろと三鷹仁がラブホテルの前でなんだか入るか入らないか争っている。

「こーはい君……私」

「美咲先輩。逃がしませんよ」

「え？」

ここまで、空太達はましろと仁を追ってきた。何故ラブホテルに向かうのかを知りたかったが故に、尾行することにしたのだ。

だが、見れば見る程美咲の不安は募り、耐えきれなくなったようだった。それでも空太はまだ、諦めていない。

「先輩には仁さんを捕まえて貰わないといけないので」

「それってどういう……」

「ふう……先輩。ちゃんと仁さんを捕まえてくださいよ？」

空太はそう言い、美咲が言葉を紡ぐ前に跳びだした。ましろの手を引いてラブホテルに入ろうとする三鷹仁を睨みつけ、地面を蹴る。

椎名ましろの手を放して空太を見る仁に、空太は怒りの表情を浮かべて近づく。拳を握って、仁の顔をしっかりと捉えた。

「ましろを——放せ！」

空太はそう言つて、仁の顔を殴り飛ばした。ぐしやつと響く鈍い音と共に吹っ飛び地面を転がる仁に対して、空太はましろに声を掛けた。

「ましろ」

「空太……名前」

椎名ましろは、空太がましろの事を名前で呼んでいる事に気付いた。

「お前、なんでラブホテルに来たんだ？」

「漫画を描く為に必要だから」

「……そうか」

神田空太はその言葉を聞いて、地面にへたりこむ。安心感から力が抜けたのだ。

正直に言えば、空太はそうだろうとは思っていた。でも、行き先が行き先で相手が相手だ。不安にもなる。もしかしたら本当にそういう目的で行くつもりなんじゃないかと不安もあったのだ。

「いつてて……空太、お前本気で殴り過ぎだろ……」

「仁さん」

そこへ、殴り飛ばされた仁が近寄ってくる。頬を押さえてフラフラとした足取りからはかなりのダメージがある事が見て取れた。

「悪かったですよ。でも、俺は堪え性がないんです」

「それはましろちゃんに関することだけだ r——!?!」

「そうそう、仁さん……こんなことをしてかした責任はちゃんと払ってくださいよ?」

仁は背後から羽交い締めにされた。後ろにいたのは、上井草美咲。仁は美咲の姿を確認すると、顔を青ざめた。

「美咲……!?!」

「仁、逃がさないよ!」

「空太、お前……!」

「It is my revenge」
私 かの 仕 返 し だ

そう言った瞬間、仁は真っ青だった顔を白くして美咲に連れ去られて行った。

「……さて、ましろ」

「何、空太」

「必要なんだろ? 入ろうぜ、ラブホテル」

「分かったわ」

空太はそう言つて、ましろとラブホテルに入った。

その後、仁によつて仕組まれた事だと知つた空太は、あの仕返しはやりすぎたかなと思つていたのだが、やつて良かったと思ひ直すのだった。

神田空太の全力

神田空太と椎名ましろがラブホテルに入った日の数日後。結局、あの後空太達がした事といえばラブホテルの一室で設備の見学やスケッチをして、シャワーを浴びて寝ただけ。

ちなみに、三鷹仁と上井草美咲は後々聞いたところによると三鷹仁が逃走し、上井草美咲は結局仁を取り逃がしてしまったらしい。

そして現在、神田空太はいつも通り適当に学校へ行つて適当に日々を過ごしていた。
だが

神田空太の開き直りは、たった一人の少女の純粋な言葉で強制的に前を向かされることになる。神田空太の一目惚れの相手、絵画の天才にして漫画家を目指してひたむきな少女、椎名ましろによって。

「空太」

「どうした、ましろ」

学校の玄関で、椎名ましろは神田空太に話し掛ける。その口調はどこか重々しい。

「空太は何をしてるの?」

「何って……別に何も」

空太はなんでそんな事を聞いてくるのか分からなかった。椎名ましろは神田空太の事を何も知らないし、どんな過去を持っているのかも知らない。

「なんでそんな事聞くんだ？」

「美咲が言ってたの」

「なんて？」

「空太には夢があるって」

それは、たった一度だけ空太が口を滑らせた事のある相手。上井草美咲に話した事のある、ゲームクリエイターになりたいという夢の話。この事を聞いて、空太は失敗したと思った。

椎名ましろは常人とは違う。その事に何も触れない空太に対して気を遣う一般人とは違い、どストリートに言ってくる人物だ。

「……ああ、まああったよ。でもそれは椎名には関係ない事だ」

「……空太には才能があるのに残念だって美咲が言ってた」

「あの人だけじゃないけど、皆勘違いしてる。俺には特筆した才能は無い」

「…そんなことない」

「あるんだよ」

尚も食い下がる椎名ましろの表情は、どこか不満気だった。駄々をこねる子供の様に、かたくなに認めようとしなない。空太はそんなましろにいらだちを覚えた。

幾ら好きな人だとしても、空太の琴線に触れる話題だったのだ。

「……なんでお前はそこまで……」

「逃げちゃ駄目よ」

「——っ」

「空太は今、何色？」

椎名ましろの言葉は、最初に言った言葉を思い出させた。椎名ましろの何色になりた
い？ という質問に空太はいろんな色になりたいと言った。

だが、今の空太は椎名ましろから見ても自分から見ても……無色だった。色など無
く、面白みもなく、中身がからっぽ。空太はその現実を逸らせない。開き直ろうとし
ても、椎名ましろの真っ直ぐな瞳がそれを許さない。

「(なんだ、なんだ、なんでいきなりこんな……なんで……)」

目の前にいる、才能に満ち溢れた少女が自分自身からも逃げた少年に言っている。逃
げるな、と。空太自身、何から逃げるなど言っているのか分かっている。自身から、才
能から、周囲の人間から、いろんな物から逃げるなど言っているのだ。

「空太」

「なん……だよ」

「立ち止まっては駄目よ。前はそっちじゃないわ」

普段の椎名ましろからは、出もしない様な言葉。常識は無いのに、彼女には高い人間性があった。故に核心をつく。神田空太が夢から逃げてると知って、逃げるのは負けだと本能的に悟ったから、空太に逃げないように言った。純粹で純粹な彼女だからこそ、空太の気持ちなんて考えない。空太が逃げているから、逃げないようにしただけの事なのだ。

「……」

神田空太はその言葉で、完全に前を向かされた。開き直る事は椎名ましろが許さない。数年間、開き直って来た神田空太の閉じ籠っていた本心が、剥き出しになった。

「——はぁ」

「?」

「ましろ。お前は酷い奴だな……だから嫌だったんだ。才能と向き合うのは」

空太の言葉は今までの空太とは違い、何か削ぎ落された様な身軽さがあった。

「分かったよ……一度だけ、もう一度だけ……本気になって見るよ……それでいいだろ？」

「……うん」

空太はましろの眼を見てそう言った。ましろはそんな空太の眼を見て、こくりと頷いた。神田空太は椎名ましろによって前を向かされた。今一度、小学生時代までは全力で生きていたあの時の様に、本気を出す事になった。

そしてその事實は、神田空太に大きな変化と驚愕を齎す事になった。



さくら荘に帰って来て、神田空太はまず初めにさくら荘の住人であり、天才プログラマーの赤坂龍之介の部屋の前に入った。そして、その手を拳の形に握って腰を低く構える。神田空太もまさかこんなことに今までの日課の成果を使うとは思ひもしなかった。

「すう……はあ……さて、赤坂。今から俺はお前の扉をぶっ壊して中に入ろうと思う。目的は取り敢えずお前に質問があるからだ。嫌なら出て来い。正直言つて、今の俺は本気を出さないといけない状況にあるからさ……手加減出来ないぞ?」

「待て待て待て、今開ける」

空太が一種の脅しを仕掛けると、中から凄い勢いで赤坂龍之介が出てきた。その顔に

は焦りの表情が浮かんでおり、その理由はドアを壊された場合機材が壊れる可能性を考慮してだ。

「で、何の用だ。神田」

「ゲームクリエイターになりたい。とりあえずその為に何をすればいいのか一から説明してくれ」

「……そんな事で僕の部屋を荒らそうとしたのか？ 全く、無茶苦茶な奴だ」

「いいから教えてくれ。俺にはもう手を抜く余裕は無いんだ」

空太は今だけは全力だった。ゲームを作る為のノウハウを知って、すぐにでも作成に取り掛かるつもりだからだ。

「……何があったかは知らんが。いいだろう、この書物をやる。僕にはもう必要ない物だからな」

「ありがとう赤坂。とりあえずは本気で取り組むとするさ」

「……まあなんだ。頑張れ」

赤坂はそう言って部屋の中に入って行った、空太は赤坂から貰った書物を抱えて部屋に戻る。廊下を歩く途中から既に本を読み始めていた。読む速度は速い。赤坂の部屋から自分の部屋に戻るまでの短い距離で既に10ページは読み終えていた。

空太は生まれつき理解力と読解力が高い。故に、赤坂から貰った本程度なら速読する

ことが可能。一冊10分そこらで読み終える事が出来る。

「……」

部屋に入り、ベッドに座りつつ読むのを止めない。その表情は稀に見る本気の表情であり、空太の全力が今その真価を発揮していた。

才能が無いと思っている空太は日課を初めとして様々な物に手を出す内に随分と多くの技術を手に入れている。無意識な努力という行為を空太はかなり行なって来たのだ。速読や格闘術もその一つ。

「……オツケイ。それじゃあいつちよ本気でゲーム……創ってみますか」

空太はそう呟き、自身のパソコンを起動させる。本は全て読み終わった。掛かった時間は45分ほど。そしてその内容の8割方は空太でも理解出来た。後は読み返しながらゲームを作っていく。アイデアだけならこの夢を持った中学時代から多くのアイデアが浮かんでは消えている。その数はとても多い。ネタには困らない。

「とりあえずはコンセプトから詰めていきますか」

空太はそう言って、起動したパソコンを操作し始めた。

神田空太の信頼

神田空太のゲーム作りは、とても順調だった。元々、空太は現実から目を逸らすあまり、その思考に反して創作者としてではなく、消費者としての視線で面白いと思えるゲームを考えてきた。それは単に自分の夢に対する未練なのだが、今回はそれが幸運にも良い方へと転んだ。

赤坂龍之介によって齎された知識とメイドちゃんによる講座でゲーム制作のなんたるかを知った空太はこれまでのゲームの案を組み合わせてトントン拍子にゲームを作りあげて行つた。

コンセプトから始まり、システム構成を着実に組み立てて行く様は、かなり順調に進んでいる。

「さて……次は……で、……」

ブツブツと何かを呟きながらパソコンに向かう神田空太。その瞳は中々に輝いていて、その表情は中々に楽しそうだった。扉を少し開けて、その隙間からそんな空太を見ている美咲や仁、ましろは空太の様子に微笑し、互いに顔を見合つて音もなく笑いあつた。

あの空太が本気を出す。それだけで美咲や仁は楽しみだった。彼らにとつて空太という人物は才能あふれる努力の人だ。今まで何もせずにとただ怠惰な生活を送ってきた空太に憤慨した人も少なくない。そんな空太が本気を出して作る作品、というのは自分を達を大きく超えた物でも同じく夢を追う物として、身震いする。

「空太の奴。楽しそうだな」

「私もなんだか負けてられないね！」

「空太、楽しそう」

三人はそう言つて、自分達の部屋へと戻る。ましろは原稿の続きを、仁はただ寛ぎに、美咲は美咲で新たに作品を作るのだろう。問題児だらけのさくら荘、だがその住人は総じて、大きな夢に向かう才能と努力の人達だった。



時間は進み、夜。現在、空太もゲーム制作を中断し、リビングで寛いでいた。というのも、今日は七月七日、七夕なのだ。故に、夢追い人といえどイベント好きのさくら荘。ここで騒がない訳にも行かないのだ。

よつて、そのトツプである美咲の提案で七夕パーティをすることになったのだ。

「こーはい君こーはい君！ 見てみて！」

「どうしたんですか美咲先P……おお……」

ドアが大きな音を立てて開き、美咲とましろが飛び込んでくる。空太はその声に振り向き、絶句した。そこには着物を着た椎名ましろが居たからだ。

椎名ましろはそこまでスタイルの良い身体をしている訳ではないが、腰の細さ故に数値より大きく見える形の良い胸や白い肌は芸術品を思わせる。そして基本的に胸の無い女性でも綺麗に見せる性質をもつ浴衣はさらにましろの美しさを際立たせていた。

「すっごく綺麗だ……」

「おお！ こーはい君も絶賛だね！ やったねましろん！」

「……うん……空太、ありがとう」

「あ、ああ」

ましろに一目惚れした空太からすれば、ましろのそんな格好はときめく以上に痺れた。少しだけ嬉しそうな無表情がいつも以上に愛らしい。

「なあましろ」

「何？」

「七夕って知ってるか？」

「知らないわ。でも、美咲は願いを叶えてもらえる日だって言ってた」

「概ねその通りだ。でもな、俺はこう思うんだよ。七夕は御姫様と普通の男が身分の差を気にせずに愛を確かめ合える日だって。まあ、昨今の七夕なんて短冊を飾って形式上行なうだけの小さなイベントに過ぎないけど、そっちの方が面白いだろ？」

「……そうね」

空太とましろは美咲達が笹の葉に群がって騒いでいるのを隣り合って座りながら眺め、そんな会話をする。空太の頭の中では、ましろが御姫様で、自分がその普通の男でありたいという考えが浮かぶ。

浮かんで、そのまま掻き消した。七夕限定の付き合いなど、自分の望むところでは無いのだ。

「空太」

「ん？」

「短冊……何を書けばいいかわからないわ」

「そりゃあそうだろうなあ……適当書いとけ。例えば、新人賞受かりますように、とか」

「……そう」

現在、椎名ましろは編集者のサポートの下、新人賞に作品を応募している。結果待ちなのだ。今は。

空太はそれに追いつがる様に作品を作っている段階。全力というのはかくも時間が

掛かる物だ。

「短冊、飾ってくる」

「おう。行つてこい」

空太はましろが騒ぎの中に入っていくのを眺めながら笑った。全力を出すと決めた以上、今はただそれに尽くすだけだ。

勿論、ましろの書いた物が採用されることを願つてもいる。やはり失敗よりは成功して欲しい物だ。

「さて、俺も飾るとするかな……」

空太はそう呟いて、短冊にさらさらと適当な願いを書いて騒ぎの中に入っていった。



大雨。

七夕の星空を眺めようと準備してきたさくら荘の面々がこの日見れた空は、雲に隠れて水を降らすさめざめとした雨空だった。結局、空太の言う御姫様と男が会おう事は無く、雨は天の川の水位を大きく増水させた。なんとなく、嫌な不安をじわじわと感じさせてくる。

「……ま、これで織姫と彦星は会えない！ 男女の恋は実らないってことね！」

そんな中で、千石千尋は存在していない架空の人物の恋にまで嫉妬の言葉を吐き捨てた。空太は濡れたましろの頭をタオルで拭きながらその様子に溜め息を吐く。ましろは首筋に空太の溜め息がぶつかって少しくすぐったそうに眼を細めた。

「さて、これでいいな。身体冷やささない様にちゃんと風呂入れよ？」

「分かってるわ」

空太の言葉にましろはこくりと小さく頷いてみせた。

すると、ましろのポケットから着信音が鳴り響く。当然、取り出してましろは電話に出た。

「……」

そなたはましろの表情を覗き見る。無表情ながら、少しだけ悲しそうに眉を潜めたましろに、空太はちゃんと気付いた。

そしてましろは一つ、ありがとうございましたと言って電話を切った。

「……どうした？」

「新人賞。落ちたわ」

「……そうか」

ましろの言葉に、美咲や仁、千尋が少し吃驚した後、気まずそうに顔を俯かせた。こ

ういう時、どんな言葉を掛けても慰めにはならない。同じ様に夢を追う者だからこそ、その痛みが分かるのだ。だから、誰も何も言えなかった。

「……それで？」

「？」

「それで、ましろはどうするんだ？ 諦める？ まあお前には漫画よりも確実に成功出来る絵画の道もある訳だし、諦めちやっても良い訳だけどさ」

「空太、言い過ぎだ」

「……部屋に戻るわ」

ましろは敢えて空太に何も言わずに部屋に戻った。そして、部屋を出て行く一瞬。空太と眼が合う。そしてそのまま消えて行った。

美咲達は空太の言葉を言い過ぎだととらえつつ、ましろとの仲が壊れてしまうのではないかと心配になった。それほどまでに、二人の間に流れる空気が緊迫していたのだ。

「俺もゲーム制作の続きに戻ります」

「空太」

「大丈夫ですよ仁さん。俺もましろも、大丈夫です」

仁は空太の様子に少し怪訝な顔をする物の、空太はそんな仁に自信ありげに笑ってそのまま部屋に戻って行った。

「大丈夫、俺の好きな椎名ましろは……この程度で諦めるほど普通な奴じゃないさ」

神田空太の逃げ道

雨の降った七夕の翌日のこと。椎名ましろは部屋に籠ったきり出て来ず、また空太もゲーム作りを続けますと言ったきり姿を見せなかつた。

仁達が考える限り、二人の行動は取り敢えず人の心理状況からして理に適っていた。真剣に打ち込んで挑戦した新人賞に、落ちた——真剣に打ち込んだからこそ、その衝撃はあまりに重い。一人になって心の整理を付ける時間を欲する心境は、真剣に何かに打ち込んだことのある仁達夢追い人からすれば、重々理解出来るものだった。

神田空太はあの時言った。

——椎名ましろは……この程度で諦めるほど普通な奴じゃない

それは今までずっと夢から、才能から、成功から、失敗から、敗北から逃げて来た空太の言う言葉だからこそ、何の信憑性も無い軽はずみな発言だと思った。だがしかし、その言葉には何故か……嘘だとは思えない確信的な何かがあった。

「空太の奴、出てこないな……」

「ましろもだよ……大丈夫かなあ、二人とも」

問題児ばかり、でも才能の塊が集まったさくら荘。そのリビングのテーブルを挟んで座っているのは、三鷹仁と上井草美咲の二人。お互い、頑張っている後輩達が沈んでいることを心配し、表情は何処か暗い。自分達のことでもいっばいいいな仁や、こういつた事態には滅法弱い美咲は他人の心配などしている場合ではないというのに、こうして思い悩んでいる所を見れば、その人柄の良さが窺えるだろう。

「おはようございます」

「！ 空太、大丈夫なのか？」

「何がですか？」

そこへ起きて来たのは、話の中心である神田空太である。仁は心配そうにそう言うが、空太は何を言っているのか分からないという顔を浮かべて聞き返す。その様子を見て、仁は空太は大丈夫かと判断した。

だが、まだましろのことが気がかりだった。

「取り敢えず、作業をしてたから日課をこなす時間も無いし……ましろを起こして来ます」

「あ、ああ……」

空太はそう言って、リビングを去りながら二階へと階段を上がって行った。



「ましろー、起きろー」

二階に上がった空太はましろの部屋の扉を叩きながら呼び掛ける。だが、返答はない。恐らくは寝ているのだろうが、このままではマジな意味で遅刻してしまう。空太は頭を掻きながら溜め息を吐き、一つ決めた様な表情を浮かべる。そして、一つ手を合わせてから扉を開けた。椎名ましろに、鍵を掛けるなんて高尚なことは出来ないので、普段この扉は常時オープン状態なのだ。

「あーあー……こりやまた散らかってんなあ」

踏み場もないほどの散らかり様、バツ印が大きく漫画の上から描かれた原稿用紙が所狭しと散らばっており、その中で普段同様大量の服や下着、小物類が床を埋め尽くしていた。

空太はそんな部屋の中で、珍しく机に突っ伏した形で寝ているましろに近づく。机の上には、描きかけの漫画原稿が数枚ある。

「へえ、やっぱり凄い奴だなましろは……それでこそましろだ」

それを見れば、直ぐに分かった。

やはり、椎名ましろは諦めていなかった。落選したことでシヨックは受けた、だが次が無いわけではない。何度でも挑戦出来る。描けなくなったわけではない、何せまだ絵を描く為の二本の腕があるのだから。元々、椎名ましろの選んだ道というのはそういう道だ。必ず成功を約束された絵画の世界から抜け出して、漫画家への道を進む決意をした時から失敗は覚悟しているのだ。

たった一度、失敗した程度で諦めるほど椎名ましろは弱くない。

「……………空太？」

「おはよう、ましろ。良い夢見たか？」

「……………眠いわ」

「遅くまで描いてりや眠くもなるだろ」

「……………落ちたから、描くの」

「そうか」

「空太……………」

「なんだ？」

「次は……………通るわ」

「そりゃ楽しみだ、通ったら何でも一個言うこと聞いてやるよ」

空太がそう言うのと、ましろはキリッとした表情になった。

「絶対取るわ」

「お前俺に何させるつもりだ……つたく、ほら準備して学校行くぞ」

「眠いわ」

「お互いにな」

「空太……限が出来てる」

「俺も徹夜だよ。ゲーム作りに熱中し過ぎた……正直眠い」

空太が欠伸を漏らして苦笑すると、ましろはふっと小さく笑みを浮かべた。かなり感情の起伏が薄い彼女だが、その時ばかりは空太もましろも、疲れて動きたくも無い状態なのに反して……

——気分は良かった。

「じゃあ寝るわ」

「サボりか？」

「空太も」

「あー……そうだな、俺も正直眠い。学校サボるか、一緒に」

「………良いの？」

「なんだその信じられない、みたいな顔は」

空太はそう言いながら苦笑する。今までの日常の中で、空太はましろに結構厳しかった。朝は遅刻を許さず、着替えはパンツ位なら穿けるようにさせ、ご飯は好き嫌いを許さない。故に、学校をサボることを空太が承諾したことが予想外だったのだろう。

「ま、こんな日があつても良いだろ」

「……………そう」

ましろは小さく返すと、ふらふらと頭を揺らして空太の方へと倒れた。空太はそれを片手で受け止める。

見れば、ましろはすやすやと寝ていた。そしてその手は空太の服をしっかりとつかんでいる。

「全く……………ここまで逃げ道を封じられるなんて、困ったもんだ」

諦めたように笑う空太。

ここでましろが当選していたのなら、空太はまだ言い訳が出来ただろう。椎名ましろが前を向かせた神田空太、取り敢えず本気は出そうと約束した。だが、まだ逃げ道を諦めていなかっただかと言われれば否だ。

空太は、本気でましろの当選を願っていた。そうなれば、空太は一つの逃げ道を作れたから。

ましろはこれまでの人生で、つまり絵画の世界での人生で、失敗を味わった事などない。周囲から多大な期待を寄せられ、それに幾度となく応えて来た。だから、漫画の世界に入って成功したのなら……空太はこう言っただろう。格好悪く、悪足掻きで、負け犬みたいに、

『お前みたいに誰も彼もが成功する訳じゃない、他人に自分の意思を押し付けんな』

逃げる為に、そう言っただろう。負け犬上等、逃げるが勝ち、楽しんで生きるならば、幾らでも地面に這い蹲って格好悪く言い訳してやる。開き直ってヘラヘラ笑って、努力している奴を嘲笑おう。

だというのに、椎名ましろは悉く逃げ道を封じてくる。成功して欲しいと思っていたのに、失敗してくる。空太の逃げ道の可能性を、全て潰してくる。惚れた弱みもあるのだろうか、椎名ましろは本当に……神田空太の天敵だった。相性が良いというか、悪いというか、空太からしても良く分らない。

「……………」

空太はましろを抱き上げ、ベッドに下ろす。そしてそのまま自分の部屋へ戻ろうとして、止められた。ましろが空太の服を掴んで放さなかったのだ。

「……………はあ……………面倒臭い奴」

空太はそう言いながら、ましろのベッドに座る。そして、ましろの頬を人差し指を突つつきながら苦笑した。

「お前には一生敵わないかもな……………こんにやろう」

空太の指の攻撃に、そう言われたましろはくすぐったそうに身じろぎした。

神田空太の嫉妬

空太とましろが学校をサボって、同じ部屋、同じ空間で惰眠を貪った後のこと。日も大分傾いて、夕暮れと昼間の中間の時刻に空太は眼を覚ました。大分長い時間を眠っていたせいか少しだけ身体が鈍っているが、それでも眠る前のことを思い出せばそれなりに気分が良い。

空太は眠る前は掴まれていた服から、ましろの手が放れていることに気がついた。そしてそれを良いことに立ち上がり、伸びを一つ。そういえば女子の部屋で寝ちゃったなあと思いつつ、ましろの携帯電話が鳴っていることに気がついた。見ればまだましろはぐつすりと眠っている、だが放置するには画面に映っている『綾乃』という文字が気になる。何故ならその名前はましろの担当編集者の名前だからだ。

昨夜落選の知らせを送ってきたばかりだというのに、何の用だろうか。急ぎの用なら不味いだろう。空太は取り敢えず、電話に出ることにした。

「もしもし、此方椎名ましろの携帯ですが」

『あら？　もしかして神田空太君かしら？』

「ええまあ……ましろの編集者さんですよね？」

『そうよ……で、椎名さんはいないのかしら?』

「隣でぐーすか寝てますよ、起こすのもなんなんで代わりに出ました」

『そう……あーそれじゃあ伝えておいてくれるかしら? 多分椎名さんよりは話が分かると思うし』

「いいですよ」

空太はそう言いながら用件を促す。すると、綾乃は驚くべき事実を空太へと告げた。

それは、この数時間の睡眠の中で空太がただ一つの逃げ道として用意していた最大の要素。だがそれはましろの落選によって閉ざされた逃げ道の筈だった。

つまり、綾乃から告げられたのは落選の事実を覆すそれ以上のましろの成果。

——連載デビュー

当選にて賞を取るどころではない、それ以上の結果をましろは取って見せた。なんでも、体調不良で休載する者がいて、その代役に抜擢されたい。編集部がこの漫画ならば賞がなくとも十分通用するだろう、と。

空太は眼を見開いて脱力した。立っていられず、再びましろの眠るベッドへと腰を落としました。

なんだそれは、絵画の才能を持ちながらその道を捨て、興味本位に踏み込んだ漫画の世界で初めて応募した漫画賞……

失敗して当然、にもかかわらずデビューだと？ なんの功績も無く、実力だけで当選以上の成果を収めただと？

実力は漫画の原稿を見れば分かる。悔しいが絵のクオリティは高く、さくら荘をモデルにしているだけあってその内容もバラエティ豊かだ……これならば確かに面白い、賞を取ったとしても何の不満も無い。

だが、ましては神にでも愛されているのか？

偶然送ったネームが編集の目に止まり、

偶然休載する漫画家がいる、

幸運にも代役としてデビューを許された。

なんと出来過ぎな運命だ。恐ろしいほど運に恵まれている、運も実力の内という言葉がこれほど憎らしく思うことも無いだろう。

『——だ君？ 神田君？ 大丈夫？』

「……あ、ああ……大丈夫です」

『とにかく、椎名さんにちゃんと伝えておいてね。ちゃんと話は最後まで聞きなさいつてのも付け加えておいて！ それじゃ』

電話が切れた。空太は通話終了の文字を表示する携帯を眺めながら、呆然とする。逃げ道が、出来てしまった。全力を約束して、才能や夢から眼を逸らせない状態にある空太に、この知らせはあまりにもダメージが大きかった。

寝ているましろの顔を見ると、どす黒い感情が胸の中を掻き乱す。

「う……ああ……ぐう……！」

久しぶりに感じる、この嫌な気分。小さな頃、まだ開き直ってなかった頃毎日のように感じていたあの感覚が戻ってきた。空太は胸を抑え、この感情をどうすればいいのか分からず呻き声を上げた。歯を食いしばり、気がつけば眠っているましろの顔に向かって手を伸ばしていた。

「っ!?! —— つはあ……はあ……何やってんだ、俺……」

だが空太はその手を抑え込み、気持ちを落ち着かせる。そして、考えないようにした。

今までもそうしてきた、開き直って、思考を停止させ、眼を逸らす。簡単なことだ。
なのに、

「なんだ……これ……くそっ……とまんねえ」

空太の胸中は何時まで経ってもどす黒い感情に占領されていた。眼を逸らせない、目の前のましろがそれを許さない。ましろとの約束が、全力でやってみるといふ約束が、前を向くという約束が、たった一回だけのことであつても空太を縛る。

「……………駄目だこりゃ」

空太はふらふらとましろの部屋を出た。此処にいたら、ましろに暴力を振るってしま
いそうだと思つたからだ。この胸の内に生まれた悪感情、七つの大罪にも数えられる凶
悪でおぞましい感情、

『嫉妬』に狂って暴れてしまう。

空太は自分の部屋に戻って、パソコンに向かった。机の上には、作り掛けのゲーム資
料がある。自分が現在進行形で、順調に作っているゲームだ。ましろの成果を見た後だ
と、これがどうみても矮小な作品に見えてくる。いや、違う……おそろくどれほどの
ゲームだろうが今の空太じゃ椎名ましろに勝てない。

意識が違う、空太自身が無意識のうちに感じているのだ。

凡人^{じぶん}では天才^{ましろ}に勝てない、と

「すー……………つはあ……………」

深呼吸をして、少しだけ気分も落ち付いた。

「す……………つげえなあ……………ましろは、どんどん遠くなつていく」

呟いて、椅子の背もたれに寄り掛かる。でも約束は約束、ましろの真っ白な色で彩られた約束を反故にするのは、無色で空っぽな自分では足元にも及ばない。

空太は、椎名ましろの強大さを再確認して——考えるのを止めた。

元々でつかい相手だったのは知ってた筈だ。それが更にでかくなっただけのこと、今まで何もして来なかった自分が太刀打ち出来ないのは当然のことだろう。ならば、今は約束を護つてさっさとこの現実から逃避する事を考えた方がまだマシだ。

「さーて……………それじゃ張り切つてゲーム、作ってみようか」

空太は胸の中に芽生えた嫉妬を置いておいて、差し当たり夕飯の時間までの間、現実逃避の為にゲーム作りに無理矢理没頭することにしたのだった。

椎名ましろの視点

さくら荘は、色んな色がある。

私がこのさくら荘に来たのは多分四月、水明芸術大学付属高等学校美術科に編入する為に日本へ渡って来たわ。こっちに来るには皆から反対されたけど、リタの協力もあったからなんとか来れた。リタは友達、小さい頃から一緒に絵を描いていたわ。

こっちにやってきて、空太に出会ったのは駅の近く。私の小さい頃の写真を持って、音も無く近づいてきたから少しだけびびくりした。空太は不思議、良く分からない。いろんな国で私が描いた絵の展示会を開いて回っていたから、色んな人を見て来たけど、やっぱり良く分からない。特別整った顔をしているわけじゃないのに、どこか惹きつけられる様な魅力があった。

私を迎えに来たって言うてたから、ふと気になって何色になりたい？ って聞いた。そしたら空太は考えた事も無いって言いながら、少し考えた後『色んな色』になりたいって言った。

ちよつとだけ、分かる気がした。空太はぐちやぐちやなの。色んな色が綺麗に配置さ

れてるんじゃないなくて、色んな色が混じり合っつてぐちゃぐちゃ。凄く不安定な感じに安定してる、って感じね。

私は日本の漫画が好き。だって私の描いた絵は皆褒めてくれるけど、誰かを笑顔には出来ないもの。でも、漫画は白と黒、そして線だけで描かれたものなのに、読む人を笑顔に出来る。私の描く絵よりもずっと価値があると思う。だから、私はこの日本に漫画家になる為にきたわ。

空太は分からない。さくら荘で私の生活の介護をしてくれて、ましろ当番っていう私の介護係を引き受けてもくれた。でも、空太は優しいのか厳しいのか分からない。私は皆から良く非常識だって言われるわ、でも空太は言わない。空太は私の言うことをちゃんと受け止めて応えてくれる。バームクーヘンもくれる。

でも空太と過ごし始めてから、段々空太の色がもっと分からなくなった。ぐちゃぐちゃだった色が、段々消しゴムで消したみたいに消えていくの。そんな空太が私を見る目は、少しいや。だって私のことが映っていないんだもの。多分、私だけじゃなくて空太は皆の事も見てない。こつちを見てるけど、ずっと眼を逸らしてるみたい。

空太は口癖みたいに良く言うわ、「めんどくさい、やめた」って。そう言う度に空太の色はどんどん消えていくの。その内空太自身が消えてしまいうで、少し落ち付かない

気持ちになる。

空太は普通科なのに、有名。美術科でも空太の名前を出せば皆空太の事を知ってた。なんでも、皆空太に色んなところでお世話になったらしい。空太は凄いわ、私だけじゃなくて皆のお世話をしているの。そのせいかしら、初めは皆私に話しかけてこなかったのに空太の話を中心に話し掛けてくるようになった。

でも不思議と空太の事を悪く言う人はいないの。空太は元気か、とか今度お礼を言いたい、とか言ってた。空太は皆から好かれてる。私にはないモノを持つてるんだと思うわ。だって、私の周りに集まって来る人は私の絵を見に来た人だけなもの。私自身に近づいてくる人はいなかった、空太は空太自身が人を惹き付ける魅力を持つてる。

美咲が空太には夢があるって教えてくれた。空太はゲームが作りたかったんだって。でも、空太はそれを叶えようとしてない。それどころか、空太はなにもしていないわ。まるで、ずっと眼を背けて閉じこもってるみたいに。私には、なんで空太がそんなことをしているのか分からない。夢があるなら叶えればいいのに、なんでそうしないんだろう？

だから、リタに聞いてみた。電話をして、リタに空太の事を言った。

「リタ」

『どうしたんですか？ ましろ』

「空太が分からないの」

『えーと……ちよつと私にも分からないです。空太っていうのは……？』

「さくら荘の、私の飼い主よ」

『なるほど、その方が日本のましろ当番なんですね……それで？』

「空太には夢があるの。でも、空太は何もしないわ……夢があるなら頑張れば良いのに、なんで閉じこもってるの？」

『……………』

リタは黙った。少しだけ様子がおかしかった。

「リタ？」

『……ましろ、夢があるからといって必ずそれを叶えられる人ばかりではありません』

『どういうこと？』

『その空太という方は、きつと怖いんです。失敗する事が』

『どうして？』

『誰もかれがましろみたいではないってことです……それじゃ、これから用事があるので切りますね』

リタはそう言って電話を切った。なんだかリタの様子がいつもと違う感じがしたけど、やっぱり分からない。結局、リタに聞いても空太の事は分からなかった。夢に向かって頑張ることがなんで出来ないんだろう？ リタは何か知っているみたいだったけど、私にはどうしても分からない。

でも、夢があるなら頑張った方が良いに決まってるもの。空太は凄いから、きつと面倒なだけなんだわ。いつも言っているから、きつとそう。

だから私は空太に言った。

「空太は何をしているの？」

空太は首を傾げながら別に何もしてないって言った。

「なんでそんな事聞くんだ？」

「美咲が言ってたの」

「なんて？」

「空太には夢があるって」

そう言ったら、空太は困った様な顔をした。溜め息をついて、面倒臭そうに頭を掻いて私を見た。

「……ああ、まああったよ。でもそれは椎名には関係ない事だ」

「……空太には才能があるのに残念だって美咲が言ってた」

「あの人だけじゃないけど、皆勘違いしてる。俺には特筆した才能は無い」

「…そんなことない」

「あるんだよ」

空太は私の言葉を遮って否定した。空太には私にはない魅力があるもの、そうじゃないとあんなに人が集まって来るわけがないんだから。でも、空太はそれを認めない。空太はやればきつと出来る、ゲーム作りだつて出来るわ。だから、私はそんな空太を見つめ返した。

「……なんでお前はそこまで……」

空太は私が譲らないことに怒ったふうだった。でも、夢を叶えようとしなくて諦める事が間違っている事くらい、私だつて分かることだもの。

「逃げちゃ駄目よ」

「——っ」

「空太は今、何色？」

私はそう言った。空太の色は、もう見えないくらい透明になつた。今の空太は透明で、空っぽ。夢から逃げるなんて、何の意味も無いわ。だつてそんなことをしても何も生まれないもの。

そうしたら空太は一回だけ頑張つてみるつて言った。空太が夢を叶える為に頑張

るってなったから、少しだけ達成感があった。良いことをしたわ。

それからしばらくして、空太は凄く頑張っているわ。ゲーム作りの為に色んな本を読んだり、パソコンの前はずっと座って作業をしている。ましろ当番をしながらだから、あまり進行具合は良くないみたい。だから自分のことをちよつと頑張ってみようとしたら、部屋は水浸しになって、服もちゃんと着れなかった。空太に怒られたわ。

私も漫画を書いて漫画賞に応募した。初めて描いた漫画だから落ち付かない気分だけど、空太や美咲達も応援してくれたからちよつと落ち付いた。

でも、綾乃からの電話で落選って言われた。ショックだったけど、空太は励ますでも慰めるでもなく、これからどうするかって言った。だから、私はまた書くわ。当選出来なかったのは残念だけど、まだチャンスはあるもの。空太はやっぱ凄いわ、空太が応援してくれると、他の人の応援よりもちよつとだけ嬉しい。もっと頑張れる気がするわ。

そうしたら次の日、綾乃からの電話でデビューの知らせが来たって空太が教えてくれた。空太は無理矢理作った様な笑顔でおめでとうって言ってくれた。どうしたのって聞いたけど何でもないって言ってたからきつと大丈夫。

美咲達に言ったらデビューのお祝いをしてくれるって大騒ぎをした。

そういえば、空太のゲーム作りはどうかしら？ 空太は大丈夫って言ってたけど、私も応援してもらったから何かしてあげたい。後で美咲に聞いてみようかしら。

神田空太の休日

神田空太達は、各々夢に向かって動き出している夢追い人である。

だがそれ以前に彼らは高校生、青春時代の絶頂期の最中にいる者たちだ。当然、学校という環境下にいる限り校則というルールによつてその行動は制限される。そういったルールを布かれた環境下で、学力、知識、社交性、協調性、を学びながら成長していくのだ。だが、そんな彼らにも休日はある。社会で生きる全ての者に当然のごとく与えられる基本的な権利だ。

まあ何が言いたいのかといえば、神田空太を含む全ての小中高校生は夏休みという長期休暇期間に突入した訳だ。

だが、夏休みの長期休暇に突入したからと言って神田空太の立ち位置になんら変化がある訳ではない。まして当番である神田空太の日常はやはり、椎名ましろの介護を軸として回っている。朝起きて、日課をこなし、椎名ましろの朝食を作り、椎名ましろを起こし、着替えさせる。最近では手慣れたもので、この一連の流れを最初は1時間掛けていた所、10分にまで短縮させている。しかも、椎名ましろの成長は全くないままにだ。

現在も椎名ましろは一人で着替えられない、一人でご飯が食べられない、勉強も出来

ない、というか漫画を書く以外何も出来ない。徹底的なまでに駄目人間である。それ故に、神田空太の椎名ましろへの扱いは奇妙なものへと変貌していた。

知つての通り神田空太は椎名ましろに一目惚れしている。本人もそれを認めており、本人以外ではましろ以外のさくら荘のメンバー全員を知る所にある。

だが、神田空太は椎名ましろのパンツが落ちていても何とも思わない。神田空太は椎名ましろが裸で寝ていても何とも思わない。神田空太は椎名ましろが思わせぶりな発言をしても正しく勘違いしない。

椎名ましろのことを知っているから。椎名ましろのことを知っているから。椎名ましろのことを世話しているから。椎名ましろの漫画への真剣さを知っているから。そしてなにより、椎名ましろが好きだから。神田空太は椎名ましろを正しく世話する。椎名ましろの扱いを間違えない。彼女の心が読めているかのように、彼女の考えと意思を汲み取ってみせる。

現在の神田空太はきつと、椎名ましろの両親、友人であるリタという少女以上に、椎名ましろの事を理解する人間だ。椎名ましろは一番の理解者である神田空太を無意識に信頼している。二人はある意味、一心同体というよりも一方的な以心伝心な関係といえよう。空太はましろを知っていて、ましろは空太が分からない。

まとめるのなら現在の二人の関係は近いのに遠いということだ。そこには身体的な

意味と精神的な意味が関わって来る。身体的に言えば授業以外常に一緒にいるような存在、なのに精神的にはどちらもお互いを遠く感じている。真つ白なましろとぐちやぐちやな空太は相容れないということだろうか。

さて、そんな空太とましろは夏休みの初日。空太は一学期終盤に行われた期末テストで、全教科白点というある種の偉業を達成したましろの再試テストの勉強を見ていた。ちなみに白点というのは白紙のテストから因んで0点の答案の事を言う。赤点よりも性質が悪い。

「で、なんで全部0点なんだ？」

「空太が教えてくれなかった」

「勉強は教えただろう」

「教えてもらった、でもどこで使えば良いのか分からなかったわ」

「お前はテストの起源から知りたいのか？」

「別に知りたくはないわ」

「あつはつはー頭ん中空っぽかお前ー」

ましろに勉強を教えるということとは、東大や芸大に現役合格すること並に難しいようだ。空太は窓の外を眺めながら遠くを見る眼で乾いた笑い声を出した。ましろはそれを首を傾げながら見つめている。

だが、空太はまだまだ諦めない。ましろにはちゃんと再試で合格して貰う必要がある。そうでないと空太も夏休みを返上してましろの補修に付き合わないといけない、千石千尋に言われたからだ。その際、空太は理不尽な言葉に色々言い返して千石千尋を叩きのめしたのだが、それは別の話。

「まあ再試突破位どうにでも出来るけどさ……ましろさんましろさん」

「何？」

「美術科の再試問題は期末テストの問題がそのまま出題されます。模範解答は貰いましたよね？」

「此処にあるわ」

「それ覚えろ」

「……………覚えたわ」

「それじゃ、それを次の再試でそっくりそのまま解答を入れること……それで何とでもなる」

「分かったわ」

椎名ましろは模範解答数枚を数秒見て、すぐに全部覚えた。それはその模範解答を絵だと思えば覚えられるという滅茶苦茶な言い分であったため、空太は敢えて突っ込む事をしなかったのだ。

「さて……それじゃまあ俺はゲームを作り方を再開するよ」

「空太」

「なんだ？」

「空太の部屋、行っても良い？」

「別に良いけど？」

空太とましろは共に部屋を出て、一階の空太の部屋へと移動した。空太はパソコンの前に座り、電源を付けて起動を待つ。その間にましろを自身のベッドに座らせた。

「で、俺の部屋に来て何をするつもりだ？」

「絵を書くの」

「俺のか？」

「そう……参考資料」

「ふーん、それはゲーム制作をしても良いのか？」

「大丈夫よ」

空太はましろの視線を見返して、そうかと言うと、起動したパソコンを操作してゲーム作りを再開した。すると、空太の部屋にはキーボードを叩く音とましろの絵を書く音だけが響くようになった。言葉はない、お互いが作業に没頭し、凄まじい集中力を発揮する。神田空太は凡人だ、しかしその集中力は天才の領域に踏み込んでいた。作業以外

のことは意識に入っていない。見る者全てが一瞬たじろぐほどの集中力、それを發揮している者が二人同じ部屋にいるのだ。張り詰めた空気が部屋を満たしていた。

「……………」

「……………」

そんな空間で、椎名ましろの瞳だけが神田空太を見ていた。彼女の視界の中には神田空太以外の余計なものは一切介入していない。そしてその手は瞳が移した神田空太を、本物以上に本物らしくスケッチブックへと顕現させる。ペンは止まらない、キーボードを叩く音も止まらない。作業は続く。

一流のスポーツ選手はその卓越した才能と鍛え上げた能力から、集中力の臨界点を超えた時、『ゾーン』と呼ばれる一種の集中状態に入ることがある。その状態になった時、その意識には余計なことは何一つ介入せず、その思考速度は普段の倍近く速くなり、その意識は普段の倍近く集中する。結果、最良以上に最高の結果を叩き出すことが出来る。空太達は芸術系能力ではあるが『ゾーン』に入っていた。

ましろはその天賦の芸術的才能と元々持っていた卓越した集中力から、空太は日課によつて鋭敏化されてきた集中力の成果だ。

「……………」

「……………」

この沈黙の中進む作業はこの一時間後、上井草美咲がハイテンションでゲームの誘いをしてくる時まで続いた。

さくら荘の夏休みはこうして幕を上げた。

神田空太の冗談

翌日、空太は椎名ましろの再試の付き添いで学校へ向かう準備をしていた。おそらく椎名ましろはまだ眠っているだろうし、まだまだ時間にも余裕があるのでそこまで焦った様子ではない。元々、授業を受けに行く訳でもないので鞆は持っていないし、制服に着替えて携帯や財布をポケットに入れるだけで準備は終わる。日課もあつてかなり早くに準備が終わり、ましろを起こしに行くには早過ぎる時間なので空太は自室でのんびりとゲーム作りをしていた。

そこへ、空太のポケットから携帯のバイブによる振動が伝わる。空太は何気なしに携帯を取り出し、表示を見ると実家からだった。元々空太はこの夏休みに実家に戻る予定だったので、おそらくはそのことについてだろうと電話に出る。

「はーいーいーいー」

『あー！ お兄ちゃん？ なんでこっちに戻って来ないの!? 夏休みに入ったら戻って来ると言ってたじゃない!』

電話の相手は妹の神田優子だった。お兄ちゃんマジLOVEで元気ハツラツちよっぴりおちゃめでキュートな妹を自称している現在中学三年生である。彼女は小さい頃

より空太にひつついていた生粋のお兄ちゃん子であり、空太が色んなことから眼を背けていることも理解している。だからこそ、兄LOVEなこの妹は空太を氣遣っていたりもする。

「ごめんな妹よ、俺は帰れそうにないんだ」

『どうして!?! 女? 女なの!?! お兄ちゃんもしかして彼女が出来たの!?!』

「いや彼女じゃなくてペットを飼いだめたんだ。猫が七匹と人間が一匹」

『ちよつと待つて、今何かおかしなワードが聞こえて来たよ! 人間は一匹じゃないよ

! 一人だよ!』

「ああ、ごめんごめん。猫が七匹と人間が一人だ」

『そういう問題じゃないよ!! 人間飼いだめたってどういうこと!?! もしかしてお父さんのベッドの下に隠してあったエッチな本に書かれてた性奴隷ってやつなの!?!』

「帰ったら殺るべき事が増えたみたいだな。親父に言つとけ、隠し場所を変えろつて」

『え? いや私その本お母さんに渡しちやつたよ?』

「……………仕事が減つてなによりだよ」

妹は思っていた以上にバイオレンスな行動を天然で行う子だった。発見したエロ本をよりにもよつて一番見せてはいけない人に渡してしまふとは。公開処刑にもほどがある。

空太は溜め息を吐きながら改めて話を元に戻す。

「とにかく、俺は実家に戻れないんだ。よろしく言っておいてくれ」

『そんなッ!? お兄ちゃんが帰って来ないと私の夏休みの計画がおじやんだよ!』

「お前の夏休みの計画にお兄ちゃんを勝手に組み込まないでくれる?」

『お兄ちゃんの人でなしー! ところで飼ってる人って女の人? ていうか飼ってるっ

てどういうこと?』

「お前はまだ知らなくても良いことサ」

『どういうことなの!? もしかしてお兄ちゃん……もう大人の階段を登っちゃったって

いうん——』

空太は電話を切った。

「手遅れだな、あの妹は……」

一つ呟いて携帯の電源を落とし、ポケットに入れる。ゲーム作りをする気分でも無くなってしまったので、空太はパソコンの電源を落として立ち上がった。ふと見てみると、窓の外には快晴の青空が広がり、夏休みの序盤にしては良いお出かけ日和だった。

「まあ……再試なんだけけどな……ましろを起こしに行くか」

空太はそう呟いて、ましろの部屋に向かったのだった。



学校へ到着し、ましろを再試の教室まで送り届けた後、空太は購買で買ったパンを抱えて廊下を歩いていった。ましろを起こす際にましろが駄々を捏ねたので少しばかり時間を食ってしまったのだ、それ故に空太はともかくましろは朝食を食べていない。一応来る時にバームクーヘンを与えたが、それでも足りないだろうと考えて買って来たのだ。ましろ当番として素晴らしく有能な行動を取る空太だった。

「あれ？ 神田君？」

そんな空太の正面から歩いて来たのは、クラスメイトの青山七海だ。彼女は自身のポニーテールを揺らして空太の方へと身体を向けた。空太は青山七海を見て、表面上は取り繕っていたが内心では帰りたい気分になっていた。

それというのも、空太は実の所青山七海という人間が苦手だ。嫌いという訳じゃない、容姿も整っているし、内面も几帳面で実直で芯の通った性格をしているし、空太に対してなにか悪意ある行動や言動を振るう訳でもない。空太が苦手としているのは、彼女の生き方だ。

彼女には『声優』になるという夢がある。その為に高校一年生の時点で養成所に通っているし、さくら荘の上井草美咲の作るアニメーションの吹き替えとして日夜努力を惜

しまない。故に、空太は彼女が苦手だ。

勿論、上井草美咲や椎名ましろといった才能人達も努力はしている。それこそ、常人の及びも付かない程の努力だ。だが、空太は彼女達が苦手ではない。ならば何故、青山七海という人間だけを苦手としているのか。

それは、彼女も……天才ではないからだ。努力して努力して、一生懸命に前だけを見て、堅実にコツコツと積み重ねて天才に近づいた秀才だからだ。才能が無い訳じゃない、だが天才と呼ばれるには小さな才能だったのだ。空太は、そんな青山七海を見ると嫌になる。自分と同じ才能にあまり恵まれなかったのに、自分とは違って懸命に前だけを見続けられる彼女を見ると、自分が酷く小さいものに見えるから嫌になる。

だから、神田空太は青山七海の事が苦手だ。

「……おう、青山」

「どうしたの？ 今日学校休みだけど？」

「椎名ましろが再試を受けるからその付き添いで来たんだよ」

「何それ？」

「まあ色々だ……青山こそなんで此処に？ 先生に呼び出されたか？」

「う……まあそうね」

空太に言われて凶星だった青山は眼を逸らしながら肯定した。

青山七海は努力の人だ。彼女は夢を追いながらも成績を疎かにはしない。実際、成績は優秀で日頃の態度も優等生と言えるものだ。それなのに先生に呼び出される、というのは少しだけ空太の興味を惹いた。

「何か悩みでもあるのか？ 俺で良ければ聞くけど」

「うーん……神田君、結構色んな人を助けてるみたいだし……いいかな」

「？」

「……あのね——」

ぐー

「……なんだ？」

「う、うん……実は……」

ぐー

「……あ、あれ？ 喉の調子でも悪いのかな？」

「商売道具だから気をつけろよ？」

「う、うん……それでね」

ぐうううう……

「なあ青山」

「……何？」

「お前の腹の虫を黙らせてくれ」

「そこは最後までスルーしてくれても良いじゃない!!」

先程から何度も鳴り響く青山の空腹からなる音が、段々酷くなっている。空太は遂にそこへ突っ込んだ。青山は恥ずかしいのか顔を真っ赤にして逆ギレである。

空太はそんな彼女を見て哀れに思ったのか、ましろの為に買ってきたパンの一つを取り出す。焼きそばパンだ。

「食うか？」

「い、いらぬ……今、ダイエット中だから」

「どうせ金欠だろ馬鹿」

「なんで分かるの!？」

「今お前が白状したよ」

「あ! 卑怯者!」

「良いから食えよ」

空太の差し出す焼きそばパンを頑なに受け取ろうとしない青山。ダイエットと言いつつながら金欠ということは、おそらく学校に呼び出された内容は一般寮の家賃滞納あたりのことについてだろう。この分じや携帯とかも止められていそうだ。

「いいから! 卑怯者の餞別は受けないわ!」

「……………」

青山の言葉に、空太は若干イラツと来た。卑怯者と言われたからではない、この頑固さが苛立ったのだ。空太は焼きそばパンの包装ビニールを剥ぎ取り、普段の日課で鍛えた俊敏な動きで青山の両腕を片手で掴み、青山の頭の上で拘束した。そしてそのまま壁に追いやり、青山の両足の間に自分の足を入れた。

青山は突然のことで何が起こったのか全く分からないでいた。気がつけば両腕は自分の頭の上で拘束されていて、両足の間に空太の足が入っているから動く事も出来ない。

「か、神田君？ なにを——むぐうつ!?」

空太は呆然と自分を見上げてくる七海の口の中に片手に持った焼きそばパンを突っ込んだ。そしてそのままぐいぐいと中に押しやる。

「食べないとどんどん押しこんでく」

「!」

空太がそう言うと、流石に苦しくなってきた青山はむぐむぐと口に入って来る焼きそばパンを咀嚼して食べていく。慌てたように食べるので、むせ込んだりもしたが、空太の眼が本気だったのと空腹が相まって無我夢中に食べた。

そして焼きそばパンを食べきった後、空太は小さいペットボトルのお茶を取り出し、

青山の口に突っ込んだ。

「んじゅっ!？」

青山は口内に入ってくるお茶を必死に飲む。入って来る勢いと飲む勢いが追い付かず、口の端からぼたぼたと溢れ出たが、空太がボトルを引つ込めたので床に数滴垂れたくらいで済んだ。

「けほっ……な、何するのよ神田君……!」

「いやいや、何処までも頑固に人の善意を受け取らないから無理矢理やっちまえて思つて」

「外道にもほどがあるじゃない!」

「でもまあ腹は膨れただろう?」

「う………まあ……それはそうだけど……やり方つてものが」

「ああそうそう、寮の家賃滞納が問題になつてならさくら荘にすれば良い。家賃は格安だし、食費は別だから自分でやりくり出来るし、部屋も空いてるからね」

青山はその言葉にきよとんとした表情を浮かべた。話してもいないのに空太に家賃滞納の事を知られているのが不思議だったのだ。

「成績優秀で優等生な青山が夏休み中に学校に呼び出されるとなれば、成績以外のことだつて直ぐに分かるさ。そのなかで学校が絡んでくるのは寮か進路の事くらいだから

な、声優志望って決めてる青山だから、寮でのことで呼び出されたって方が無難だろ？」

「……神田君、成績は良くないのに頭は良いのね」

「残念なことにな」

空太が苦笑する。

溜め息を吐いた青山は、頭に手をやりながら少し考える。先程の空太の案を受け入れるべきかどうかを考えているのだ。一般寮を出て、さくら荘へ移るという案を。

「空太」

「ん、ましろ……再試終わったのか？」

「終わったわ」

「そうか、それじゃほら……餌」

「うん」

そこへましろがやってきた。再試を追え、まだ少し眠そうな表情を浮かべている。空太はそんな彼女に飼って来ていたパンを与えた。最近の彼女のブームはメロンパンである。

もさもさと食べる様子は、小動物に餌を与えている様な感覚になった。

「あれ？ 神田君、その子……」

「ああ……二人は初対面か……紹介するよ。コイツは椎名ましろ、さくら荘の住人だ」

「有名だから知ってるよ」

「ましろ？」

「……………zzzz」

「寝んな」

空太はましろの額をデコピンした。

「痛いわ」

「ほら、俺の同じクラスの青山七海だ。挨拶しなさい」

「……………よ、よろしくね？」

「……………美咲のアニメの声」

「そうだな、青山がやってるんだ」

「綺麗な名前だったから覚えてるわ」

「ど、どうも」

すると、ましろはまた船をこぎ始めた。どうやらどうしようもないくらい眠いらしい。持っていたメロンパンを落としたので、空太は空中でキャッチしてパン入りの紙袋に戻した。後でまた食べるだろう。

「起きろ、ましろ」

「……………眠いわ空太」

「よ、呼び捨て……」

「昨日は空太が寝かせてくれなかった……」

「なっ……か、神田君どういふこと!？」

「あー……俺もつい夢中になっちゃったからな」

「空太……上手いから白熱したわ」

「え? え? 何、どういふこと!?! 神田君!？」

「でも最後まで俺のペースだったな。ましろ最後は動けなくなってたし」

「……仕方ないわ」

勿論、空太とましろが言っているのはゲームのことである。上井草美咲が乗りこんできて、ゲーム大会になり、空太が廃人並のスーパープレイでましろや美咲、仁を徹底的に叩きのめしたのだ。何もしない奴ほど、暇潰しに掛ける時間は多いということさ。

「ちよ、ちよつと神田君!?! どういふことやの! 徹夜で……は、破廉恥やわ!!」

「ん? 青山も今度やるか?」

「な、な、な……何言うてんの!!!」

「関西弁だ」

「アンタらどんな関係やの!?!」

「空太は私の飼い主よ」

「ましろは俺が世話してやってるんだよ」

「アホかああああ!!!」

青山のキャパシティが遂に許容量を超えた。大きな声で空太とましろへ突っ込む青山。空太は確信犯、ましろは天然である。最も、空太はちよつとやりすぎたかなあと反省はしている。

「……そんなあかん……若い内からそんなふしだらな生活……あかん!」

「青山さん? 全部冗談ですよ?」

「神田君!」

「はい?」

「ウチもさくら荘に入る! そんなで、アンタらのふしだらな生活叩き直したる!」

青山七海は、こうしてさくら荘入りを決意したのだった。

神田空太の作戦

青山七海がさくら荘に越してくるのは、一週間後になった所で、さくら荘の問題児とその世話役である空太とましろは会議を行っていた。

その内容は、『ましろ当番』という役職とその内容が青山七海に受け入れられないであろうということについてだ。彼女は良くも悪くも生真面目で学級委員的な性格の人物だ、パンツを男子が選んで女子に穿かせるとか、女子の服を男子が洗って干しているとか、年頃の女子の生活全てを年頃の男子が見ているという現実はどう考えても受け入れてもらえないだろう。不純異性交遊として徹底して禁止してくる筈だ。

それを考えれば、ましろ当番というものを青山七海に知られてはいけないことは明白。これはそれをどうするかの会議である。

「でだ、ましろ」

「……なにかしら」

「俺の説明を最後まで聞いたら橋本ベーカリーの究極メロンパンを買って来てやる」

「聞くわ」

実はもう買ってきてはいるが、けしてましろには見せない。見せれば確実に視線が

そつちに行き、話はまともに進まないからだ。空太はましろ限定で交渉術に長けていた。

「きつと青山はましろ当番のことを知ったら、まず改善しようとするだろう」

「なんで？」

「そういう奴だからだ」

「そう……大変ね」

「大変なのはお前だ。何故なら改善する方針として最初に、ましろが『一人で』生活出来るように指導しようとするからだ」

「空太、七海のこと良く知ってるのね」

「そういう奴だからだ」

「そう……大変ね」

とりあえず、理由は漠然とした答えを返すことでましろなりの解釈をさせておく空太。重要なのは此方の話を聞かせること、それ以外のことは適当に納得させておけばいいのだ。

「でも、多分ましろを生活指導することは不可能。となればましろ当番の俺が今まで通りに世話するしかない」

「そうね」

「だが、それが許せない青山は『ましろ当番』を俺から奪い取るだろう」
「空太のを奪うのね」

「そうだ、俺のを奪うんだ。そして、それを持って余すことになるだろう」
「空太のなのに」

「青山は声優の養成所と一緒にバイトを幾つか掛け持ちしている、学校の課題もあるだろうから、既にいっぱいいっぱい、加えて『ましろ当番』をやるなんてまず無理だ。きつと重要な場面で体調を崩すとかやって泣きをみることになる」

「空太」

「なんだ？」

「空太は未来が見えるのね」

「仁さん曰く俺は宇宙人らしいぞ」

空太はとても正確な予測をしていた。青山七海は生真面目で責任感の強い少女だ。だが、裏を返せばなんでも自分で抱えこんで、失敗すれば人一倍責任を感じる少女ということ。そして肉体は精神に大きく影響される、責任に押し潰され弱った精神状態、かつ疲労した肉体は簡単に体調を崩すだろう。最も定番なのは風邪である。

前も言ったが、神田空太は青山七海が苦手だ。だが、苦手だからこそ分かるのだ。何故なら、彼女は以前の自分と同じなのだから。

「それで、空太はどうするんだ？」

「さり気なくいいものとして扱ってたのに急に出てきましたね、仁さん」

「お前俺の扱い酷くない？」

「まあ、どうもしません。ましてに隠しごとをしろって言っても無理でしょうし、作戦を立てた所でやり遂げられる奴でもないですから。無駄に何か対策立てるより、普段通りでいいでしょう」

「でもそうしたらその……青山さんは風邪で倒れるんだらう？ 可能性の話だけど」

「はい、風邪でなくとも放っておけば疲労で倒れます。でもそうなれば『ましろ当番』はまた俺に戻ってきますよ。青山もそれで反省しないほど真面目馬鹿じゃないですから」

酷い奴だなあ、と苦笑する仁。だが、空太の話からなんとなく青山七海という人物の性格を掴んだ仁は、そういう人物には何を言ったとしても無駄である事を知っていた。そしてましろに作戦云々の話は根本から無理である事も分かっている。空太の案が一番妥当である事は日の目を見るより明らかだ。

そういうときは自業自得、他人の忠告を聞かない奴が全部悪い。責任感が強いのは結構、だが抱え込みすぎる奴はいつかどこかで破滅する。一番大事な場面で全てを台無しにしてしまうのだ。

「だからましろ、お前はいつも通りに過ごせ。強いて言うなら、青山が越してきたら仲良

くしてやれ。女子同士、色々通じる者もあるだろうからな。どうせ、俺の予想じゃ青山が越してきたら二階は男子禁制が厳しくなるだろうし……まあ時間が経てばどうせ美咲先輩が色々やって元に戻るさ」

「……分かったわ」

「空太が言うなら、そうなんだろう」

「それじゃましろ、食って良いぞ」

「メロンパン……！」

空太はそこで話は終わつたとばかりにメロンパンを取り出し、袋を開けてましろに手渡した。ましろは見た目では分からないが若干目を輝かせてメロンパンに食いついた。空太は椅子の背もたれに身を任せて天井を見る。

「あーあ、めんどくさい」

呟いて、若干にやけた笑みを浮かべたのだった。

神田空太の意地

メロンパンをましろが食べ終わったのを皮切りに、空太達は各々部屋に戻ることになった。だが、空太が語った予想は思った以上に早く実現し始める。そう、上井草美咲の暴走が既に動き出していったのだ。

彼女はさくら荘へ青山七海が越してくることを知るが否や、引つ越しセンターに連絡し、青山七海の住まう一般寮に乗りこみ、青山七海の部屋の荷物を全て『勝手』にさくら荘へと移動させたのだ。当然、それに気がついた青山七海は消えた荷物の移動先として真っ先にさくら荘を思い浮かべ、確かめに来る。

空太はそうしてさくら荘へやってきた青山七海と、玄関で鉢合わせしたのだ。

「青山、何しに来たんだ？」

「一般寮から私の荷物が消えてて……こつちにきてない？」

「多分来てんじゃね？」

「多分って何よ多分って！」

「うちにはそういうことを身勝手にやる宇宙人な先輩がいるからな」

「……はあ……流石はさくら荘だね……じゃあちよつと上がらせてもらうね」

「ああ、どうぞ二階へ」

空太は、また美咲先輩かーと思いつながら半分適当に青山七海を迎え入れた。靴を脱いで、すたすたと二階へ上がっていく青山の後ろを付いて行く空太、そういえばましろの洗濯物を取り込まないとなあとという普段通りの行動だ。青山七海の部屋はましろの隣、203号室だ。当然、途中までは一緒だ。

「……………神田君、なんで付いてくるの?」

「なんで止まるんだ、後が悶えてるぞ。さつきと進めよ青山」

「いや……………二階は男子禁制でしょ? 神田君は男子でしょ?」

「俺は特例で認められてるんだ」

「どんな特例よ!? どんな理由があらうと女子の部屋に男子が無断で立ち入って良い筈ないでしょー!」

「別に青山の部屋に行こうとしてる訳じゃない、俺はましろの部屋に行くんだよ」

「……………何しに?」

「使用済みのパンツとかブラウスとか靴下とかブラとかを回収しに」

「尚更あかんわ! この変態!!」

階段の途中で青山七海は神田空太に振り返り、両手を広げてとおせんぼする。当然の反応、だと空太は思った。事情も知らない者からすれば、椎名ましろの使用済み下着や

服を狙う変態だ。同性として、ましてや生真面目な青山七海なら尚更の対応。空太という変態を行かせる訳にはいかないのだろう。

「知ってるか青山」

「なによ、変態」

「男子つて基本変態なんだぜ」

「神田君はオープン過ぎなの!! 少しは慎みを持って!!」

「ああ、心配するなよ青山」

「何が!？」

「俺は童貞だ」

「知らんわああああ!!!!」

関西弁に戻った青山七海は、階段の途中にも関わらず拳を振りかぶり、空太の顔面へと打ち込んだ。だが此処は階段、当然のごとく青山の体勢は崩れ、拳は空を切る。そして階段から足を踏み外し、空太の身体へと身体から落ちた。普段から鍛えている空太はダイエット中でろくに何も食べていない青山の身体を軽々と受け止める。

結果的に、空太と青山が抱き合うような体勢になる。

「っ……………な、なななな!!」

「何してんだ? 空太…………」

「仁さん、俺女子に抱き着かれたの初めてです。こういうときってどうすればいいんですか?」

「抱きしめ返してやれ☆」

「ウィツス」

騒ぎを聞きつけてやってきた仁と空太は、一瞬で息を合わせてそこからさらに畳みかけた。仁のアドバイスに従い、空太は青山の身体を優しく抱きしめ返す。すると、青山七海は真つ赤な顔を更に紅潮させ、あわあわと慌てだす。最早何が何だか理解できていないのは明らかだった。

しかも、今の空太は学校から帰ってきてきてブレザーを脱いでいる。つまり、Yシャツ一枚にネクタイ、学校指定のズボンといった格好だ。つまり、青山には薄いYシャツの布越しに空太の鍛え上げられた肉体の感触が鮮明に伝わるのだ。

（あわわわ……か、神田君って意外と逞しい身体してるんや……って違う違う! え、なにこの状況!?! だ、男子に抱きしめられるって、は、初めてや……! どないしよ!?! あ、でもなんか……落ち付くなあ……）

青山は空太の逞しい肉体の持つ包容力になんだか安心感を感じて落ち付くも、内心では心臓がバクバクと動いている。安心感と羞恥心の闘ぎ合いの中で、青山は動かなくなつた。

「青山？」

「はふう……」

「ありや……ちよつとやりすぎたか？」

「どうします？ 仁さん」

空太は腕の中でなんだか幸せそうな表情で動かない青山を見て、仁にそう問いかける。

とりあえず青山の部屋のベッドに寝かせておこうということになって、空太はそのまま青山七海を御姫様抱っこで青山のベッドまで運んだのだった。



その後、空太はましろの洗濯物を取り込み、ある程度ましろの部屋の掃除をした後自室へと戻った。やることといえばゲーム制作位なので、ましろが何か起こさない限りは部屋にいることにした。

「時間は……まあまだ夕飯の準備には早いか……」

空太は時刻を確認して、呟く。恐らく青山七海が我に帰るまではまだ掛かるだろうし、どうしたものかと考える。

ゲーム制作は順調だ、とりあえずは全年齢層が出来るシンプルな操作のゲームを考えている。簡単に言えば操作は決まったボタンを押すだけであり、他は全て自動で画面が動いてくれるというもの。敢えて決まったゴールを設置しないことで飽きさせないようにしており、BGMの効果を最大限利用した一種の音ゲーとRPGの混合のようなゲームだ。

今は資料本や解説書を見ながら幾つかBGMを自作していると聞いたところだ。締めきりまではまだ時間がある、ゲーム作りも佳境を迎えて中々好調な様子だ。

「うーん……やっぱグラフィックやメインキャラのデザインに問題があるよな……俺は絵心無いから、こんなぐちゃぐちゃなキャラクターじゃ誰も見てくれない……か」

新人の作るゲームが売れる為には、まずは消費者の目を惹かなければならない。その為の宣伝効果として役立つのが、派手で遠目からでも目を惹くキャラクターやそのパッケージ、メディアを利用したCM等々があげられる。そしてその効果を最大限伸ばす為には、高いクオリティのグラフィックや個性的なキャラクターが最も効果的、これらを用意出来るかどうかで宣伝効果も変わって来るのだ。

大御所のゲームクリエイター達ならば、過去の功績やその名前だけでも十分な宣伝になるし、有名なイラストレーター達の力を借りる事も容易いだろう。だが、空太はまだ無名の新人、キャラクターやグラフィックの質は追々専門家に頼むとしても、最低限必

要なレベルのものを用意出来なければ話にならない。

空太の作品を審査するのは、『プロ』のクリエイター達なのだから。

「ましろか美咲先輩に頼む……つてのが一番手っ取り早いんだが……」

そう、審査するのはプロのクリエイター。しかし、空太の周囲には頼めば快く作業を引き受けてくれそうな『プロ以上の天才』がいる。椎名ましろと上井草美咲、この二人はイラストやグラフィック関連であればプロ顔負けの作品を幾らでも仕上げしてくれる筈だ。

だが

それは空太の意地が許さなかった。全力を出す、といったのに天才に重要な部分をやってもらおうというのが、許せなかった。誰かに頼るのはいい、全てを一人でやれる人間などいない、それは空太も分かっている。

しかし、これで空太が落選した場合——確実に『天才の仕事』は目を付けられる。例えて言うのなら、

——このグラフィックやイラストを描いた人を紹介してくれませんか？

少し違うかもしれないが、これに類する言葉が確実に空太に振りかかるだろう。空太

にはその確信があった。だから、空太はましろ天や美咲オを頼ることを良しとしなかった。そうした方が当選の可能性が上がるのに、どうしてもそうしたくなかった。自分の挑戦が、別の天才だれかの成功で終わるのが怖かった。

「……時間はある……出来る限り努力してみるか」

空太は一旦プログラミングの資料を脇に置いて、作画やイラストの描き方などの資料を読み漁り始める。そして読みながら、描く。絵を描く、ひたすら描き続けた。



青山七海は、動かなくなつてからおおよそ2時間後に我に返つた。気がつけば自分のベッドに転がっていて、起き上がりながら何があったのかを思い出して悶え転がった。神田空太に抱きしめられて石化していたのだ。しかも、こうして部屋にいるということ、神田空太に部屋に入られたということ。二重で羞恥心の大爆発だった。

「ああもうっ……！ 全部神田君のせいや……！」

大分顔の熱が引いて来て、恥ずかしさを紛らわすようにそう呟く青山。

とりあえず神田空太を含むさくら荘の面々にまだ挨拶もしていないこともあって、部屋を出ることにした。ましろの部屋はノックをしても返答が無かったので、後回し。階

段を下りて、空太の部屋の前に立った。

「……………なんかまた恥ずかしくなってきた……」

また紅潮してきた頬を両手で押さえ、ぶんぶんと顔を振った。まずはドアをノックする。

「……………あれ？」

返答はなかった。自分の部屋の時計は18時ちよつとを指していた、この時間帯なら部屋にいてもおかしくはないと思う。椎名ましろの返答が無かったこともあって、少し怪訝に思った青山は失礼だと思いつつも扉のノブに手を掛けた。

「か、神田君……………」

鍵は掛かっておらず、扉は簡単に開いた。眉をひそめながら扉を開けると、中には信じられない光景があった。

まるで別世界、神田空太は机に向かってひたすらにシャーペンを動かしていた。その横顔からは凄まじい集中力が感じられ、室内なのに強風に吹かれたような錯覚すら覚えた。話しかけることも気が引ける。しかも、部屋の床には所狭しと足の踏み場もないくらいに大量の紙が散らばっていた。

「これ……………は……………」

入り口に立つ青山の足下にも落ちてしている紙を、一枚拾いあげて見る。そこには下手く

そな絵で何かのキャラクターが描かれていた。様々なポーズをとっているが、全て同じキャラクターだ。青山は他の紙も拾ってみるが、一枚一枚、少しづつだが上手くなっていた。下手な事には変わりが無いが、それでもほんの少しづつ上手くなっているのが分かる。

「下手な絵……でも……」

笑えなかった。下手くそだからといって、青山にはこの絵を笑うことが出来なかった。空太の集中力と真剣さがそれを許さなかった。

—— 少しでも、上手く

そんな意思が感じられた。下手な絵を少しでも、少しだけでもマシになるように、努力していた。

「……………凄い……………」

無意識に、そう呟いていた。神田空太は青山七海が入って来た事に気が付いていない。それほどまでの没頭している。資料を読み、その内容を再現出来るようにペンを動かす。見れば、資料本は擦り切れてボロボロだった。

それから一息ついた空太が青山七海に気がつき、作業を中断するまでは10分ほど要したのだった。

神田空太の無職

青山七海の歓迎感つつがなは恙無く行われ、彼女の荷物の整理も、ましろの世話で鍛えられた掃除や整理のエキスパートである空太がいればその日の内に終わらせることが出来た。なにはともあれ、青山七海のお引越は無事に終了したわけだ。

何故か空太に対して羞恥心混じりに尊敬の念を送る青山七海の態度に、空太は若干戸惑いを隠せずにいたが、さくら荘に来た以上は空太の継続する才能と現在は自身の夢に挑戦する姿を見ることがなるのだ、ましろ達天才が認めている以上秀才である七海が認めない訳にはいかないだろう。

というわけで、その翌日。空太は日課をこなしたあと、風呂掃除をしていた。今週はましろの当番のだが、ましろが風呂掃除をすると洗剤を排水溝に流しこんだり水が出しっぱなしになって風呂場や廊下が水浸しになったり、そのせいで床に置いておいた電子機器がショートしたりした経験があるので空太がやっている。ましろ当番の、空太がやっている。

「はあ……次は弁当と朝食を作るか」

シャワーを止めて、風呂場が輝いて見えるほどに洗浄した空太は呟く。掃除のエキス

パートにまで成長した原因が駄目人間の世話のせいとは如何ほどかと思う。

風呂場から出る空太。すると、そこに

「あれ？ 神田君、おはよう」

「ああ、おはよう青山」

青山七海が入ってきた。おそらく顔を洗いに来たのだろう。

「お風呂掃除？」

「ああ」

「……今日は椎名さんの当番だったとおもうんだけど……椎名さんは？」

「今日もネーム原稿を書いて徹夜だと思うから、多分寝てんじやね？」

「……そういうの駄目だと思う」

ああ、やっぱりこうなるかと空太は溜め息を吐いた。青山七海が不機嫌顔でましろを起こしに行くのを見送りながら、自分の顔を洗う。

生真面目な青山からすれば、自分の担当する仕事はきちんと自分でやらないといけないという正論を貫くので、こうなることは分かっていたのだが、どうも予想以上に真面目でお固い様だ。責任感が強いのはいいのだが、それを他人にも押し付けようとする行動はあまり褒められるものではないだろう。無責任な者に仕事をやらせるのなら、強要よりもずっと良い別の方法があるはずなのだから。

「まあ……ましろはそう簡単に言うことを聞く生物じゃないけどな」

空太はそう言つて、二階から聞こえて来た青山七海の悲鳴にくすつと笑みを浮かべた。



「説明して神田君！ 椎名さんは何なの!？」

「なんなのつて言われても、珍獣としか言いようがないな。もしくは天然記念物だよ」

「そういうことじゃない！ あの散らかった部屋と、椎名さんの非常識さと、生活能力の皆無さについて！」

「そういうことだ、ましろには自分の身の回りのことに付いて一切の生活能力がない。絵を書く事と漫画に関わる事以外は何も出来ないぞ」

「なっ……!？」

ましろと青山の間に色々やり取りがあつたようで、青山はげつそりした様子で空太に詰め寄つてきた。空太は予想通りとばかりにお茶まで用意して待つていたので、青山は空太が知つてて放つておいたことを察した。

「だから、そのましろ当番だ」

「……つてことは、昨日椎名さんの使用済み衣服を回収するつて言ったのは……」

「洗濯物の取り込みだ」

「……椎名さんが神田君を飼い主つて言ったのは……」

「俺がましろの世話役だからだ」

「……全ての謎が解けた感覚……でもすつきりしないわ……」

がつくり肩を落とす青山に、空太は苦笑する。自分も初めてましろの非常識さを知った時は内心大慌てだったなあと感慨深い気分になる。説明するのも面倒なので、自分からは何も言わないことにした。

「でも、納得できない！ だつて男子禁制の二階に神田君が上がるのはおかしいし、女子の部屋に男子が入るのもおかしい！ 自分の事は自分でやらないと……」

「じゃ、ましろ当番やつてみるか？ お前さんが」

「うん、神田君の代わりにこれからは私がましろ当番を担当します！」

「大丈夫なのか？ バイトとか養成所とか色々あるんだろう？ 疲れて倒れても知らないぜ？」

「そのときは自分の責任だから、神田君が気にしなくてもいいよ」

「へえ……まあどうしても無理なようなら俺がましろ当番に戻るよ」

「それはないから安心して」

青山七海は強情に空太から『ましろ当番』を奪い取った。そう、空太の予想通りになった。多少手順は違ったが、それでも空太の言った通りになった。空太はやる気満々に両手を握っている青山七海を見ながら、お茶を飲んだ。

どれくらい持つか、気になる所ではあるが、倒れる前に手助けはしようと思ったのだった。

神田空太の援助

「椎名さん！ 洗濯物は自分で洗う！」

「あああ！ 蛇口は開けたら閉めて！」

「自分の事は自分で出来るようにしないと駄目よ！」

あのましろ当番交代の時から、さくら荘では青山七海の声が良く聞こえるようになった。椎名ましろを朝早くに叩き起こし、朝食を食べさせて、着替えを自分で出来るように指導し、ましろが当番になっている掃除等のやり方も指導する。さくら荘にいる時の青山七海は常に椎名ましろにつきっきりで、空太としては楽になったが、青山七海は日に日にげつりしてきたようにも思う。

だが、空太達は特に何か手助けする行動は起こさなかった。それはさくら荘の全員が空太の予測を知っているからだ。いずれましろ当番は空太に戻るようになる、という予測を。

美咲や千石千尋は仁から伝達されたようで、その時の反応は、

『こーはい君の言うことなら多分当たるね！ ななみんには悪いけどわくわくしてきた

よー！』

『神田がそう言ったの？ ……下手な天気予報より当たりそうね』

というものだった。空太の信頼度は随分と高い所まで鰻登りのようだ。

青山七海の怒声と悲鳴が良く響くさくら荘は、青山とましろの二人以外は通常運転である。とはいえ、このままいけば青山七海はいつか倒れるわけだ。さくら荘の仲間としてそれはあまり勧められたものではない。神田空太を含めて、全員が青山の体調を気にかけてはいるようだ。

「はあ……」

空太がリビングで一休みしていると、溜め息を吐きながら話の中心人物である青山七海が入ってきた。彼女は空太と目が合うと、疲れた表情を消してあははと乾いた笑みを浮かべた。

「あ、あはは……椎名さん、本当に凄い人だね……洗濯機の使い方も分からないなんて思わなかったよ」

「まあな、俺も最初の何十回位は同じ説明をしたんだが、結局ましろが覚えたことは何一つない」

「何それ……」

空太の言葉に若干絶望と諦めの表情を見せる青山。空太はそんな青山の様子に苦笑しながら、肩を落とす青山の下がった頭にぽんと手を置いた。空太の身長は鍛えている

せいか平均よりも少し高い。仁よりちよつと小さいが、対して差はないほどだ。青山の俯いた頭は丁度手の乗せやすい位置にあった。

「まあもう無理なようなら、また俺がやってやるけど？　青山が、もう無理って、思つて・い・る・ん・な・ら・ね？」

「むっ……！」

空太の挑発的な言葉にカチンと来たのか、青山七海は空太の手を振り払って空太を睨みつけた。

「大丈夫です！　神田君の力なんて必要ないから!!」

ぶんすか怒ってリビングから出ていく青山七海。わざと炊き付けた訳だが、知つての通り青山七海は声優の養成所へ通つている。そしてその養成所で行われる発表会が近々行われるのだ。空太はそれを知つて、嫌な予感がしていた。不安、というか最悪の展開を予想していたのだ。

ましろ当番で疲労した青山七海が、発表会当日に倒れる

という展開。空太の勘は結構当たるのだが、それは悪い予感に限って良く当たるのだ。故に、空太は周囲が思っている以上に青山七海にましろ当番を下りて貰おうと思つ

ていた。不安は不安でしかないし、悪い予感はず感でしかない……が、それでも不確定要素は失くしておいた方が良いに越したことはないのだ。だからこそ、空太は青山の体調には人一倍気にかけていた。

才能を持たない秀才が、理不尽な展開で取れたかもしれない成功を逃すのはあまり良く思えなかったのだ。

「……………色々小細工してみようかな」

空太はそう呟いて、青山七海が『倒れないように』する準備を整え始めた。無論、その発表会を過ぎるまでのサポートだが、空太はましろ当番でなくなつたことで出来た暇をそういう風を使うことにしたのだった。



その日の夜、全員が就寝した頃だ。

空太はリビングにいた。昼間の内に買ってきた茶葉を温めて、ネットで調べた正式なやり方でお茶を入れているのだ。所謂ハーブティーという奴だ。ティーポットで作ったハーブティーを温めたカップに注ぎ、そこへ微量の生姜を加えた。一口味見してみると、中々の出来だった。本格的なものに比べればやはり不出来なものだろうが、庶民感

覚では美味いと感じられた。

「あれ？ 神田君……まだ起きてたんだ」

「ああ、青山を待ってた」

「え、な、なんで？」

「ほら、これ飲んでくれ。最近ちよつと趣味で始めたんだ（嘘）」

「なにこれ……紅茶？」

「ハーブティーだ。身体が暖まるぞ」

空太の差し出したカップを受け取って、素直に口に入れる青山。悪意のある行動であったのなら当然拒否しただろうが、空太の事がある意味尊敬している部分を持っている青山からすれば、空太の言葉を信用するのは当然のことだった。

「はあ……美味しいね、これ」

「それは良かった。で、青山はなんで起きてるんだ？」

「あ、うん……椎名さんのブラウスのボタンが取れかけてたから」

青山の手には確かにボタンの取れかけたブラウスがあった。なるほど、と頷いてテーブルに座る空太。青山も対面に座って、リビングに置いてあるソーイングセットから針と糸を取り出した。ちくちくとボタンとブラウスを縫い合わせていく。その手際を見ると、中々手慣れたものだった。

「なあ青山、ましろはどうだ？」

「あはは、大変だよ。非常識で凄い才能を持つてるのに駄目駄目で……でもなんと
いうか、憎めない人だよな」

「それは分かるな、それに可愛いしな」

「神田君……椎名さんが好きなの？」

「さあてそれはどうかな？」

「……」

じとつとした眼で見てる青山に、空太は不敵に笑うだけではぐらかした。

ハーブティーを口に含みながら、空太は更に会話を繋げる。

「そういうえば、青山って声優目指してんだよな？」

「うん、皆上手くて置いて行かれそうだから毎日必死だよ」

「声優っていうとアレか……腹式呼吸とか」

「そう、私もそれが普通に出来るまでちよつと掛かったかなあ……呼吸にも色々種類が
あつてびっくりしたよ」

「知ってるか？ 寝る時に目を閉じて身体の力を完全に脱力させた状態で、腹式呼吸を
10分位やると、睡眠1時間と同等の休息が取れるんだってさ」

「へえ……そうなんだ？ 今日からやってみようかな」

空太はさり気ない会話の中に、効率の良い休息を取る方法を織り交せて良く。青山七海は身体的には普通の女子だ、こうして疲労回復にサポートを入れていけば騙し騙しな何とか発表会を迎えることが出来る筈だ。食事の栄養バランスも考えて作るか、と空太は考える。

明日の内に、ましろ達を含むさくら荘の全員に食事当番を代わって貰うように頼んでおこう。見えないところでもましろの世話をやっておくのも一つの手か。

空太は色々とこれからの事を考えながら、青山七海のサポートを開始した。

神田空太の悩み

それから、神田空太による様々な生活習慣の矯正が始まった。あくまでさりげなく、誰にも気付かれないような暗躍さ加減で始まった。青山七海がどのような生活をしているのか把握してはいないが、それでも栄養のある食事を用意し、当番の仕事の負担が減るよう日々掃除洗濯料理買い出し等々を随時短いスパンで何度も行なった。

結果、最近の青山七海はかなり体調が良さそうだ。少なくとも、表面上は。

空太はそんな青山のサポートを続けつつ、残り数日にまで迫った青山の発表会を待っていた。無論ゲーム作りも順調だ、最近ではそこそこ見れる程度には絵も上達し、どんな人がどのように何をしているのか等、きちんと一目で判断出来る絵になってきた。とはいえそれでもましろや美咲に比べれば天と地の差であるのは変わりないし、クラスにいる様なちよつと絵の上手い奴にだって負けるクオリティだが。

それでもゲームの出来が上がっているのが分かるというのは、空太にとって制作活動が楽しいと思える要因となった。

何もかも順調だった。だが、この日その良い傾向が崩れた。

発端は、やはり青山七海だった。

発表会まで残り僅かという時期に、最近表情が浮かないものになっていた。体調は悪くない、そこは空太がばっちりサポートしているのだから大丈夫だ。しかし、発表会への緊張とプレッシャー、ましろを相手にする疲労感、そして学業やバイト、課題等で潰される睡眠時間が、青山を精神的に追い詰めていたのだ。

肉体ならいくらでもサポート出来る。だが、精神面とくれば話は別だ。空太は今の青山の様子を見て、このままではやはり倒れてしまう気がしてならなかった。

だが、問題はこれだけではない。

空太が青山のことで少し頭を悩ましている中、三鷹仁が空太に話してきたのだ。自分の進路について。

何故自分に話してきたかと聞けば、空太には色々世話になったからと返ってきた。内容はこうだ、元々空太達の通う水明芸術大学付属高等学校は、一定の成績さえ取れていれば水明大学へとエスカレーターで登ることが出来る。空太としては、美咲も仁もそうして水明大学へと行くのだと思っていた。

だが、仁はエスカレーターを蹴つたらしい。大阪の芸術大学を受験するとの意向だ。

「……空太は、どう思う?」

「え、知らないですよ。そうすればいいじゃないですか」

「……空太は聞かないんだな。美咲のことはどうするのかって」

「それこそマジどうでもいいんですけど。仁さんの事だから何か考えがあつてのことでしょう？ 俺じゃまだ、美咲の隣に立つには相応しくないんだ……！ 的な」

「ははは、空太は本当に宇宙人なんじゃないかって思うときがあるよ。うん、何か話してみてすつきりした、ありがとう」

「それはどうも」

だが、空太はこんな感じでその話を適当に流した。ぶつちやけ、空太にとつて仁と美咲の関係は彼らだけの問題であつて、自分が介入する気はさらさらないので。二人の関係が破滅に向かおうが、幸福を掴もうが、どちらにせよ空太はそれなりの反応しかしない。

受験する学校は人の自由、そこに誰かの想いは関係無いのだ。

「ただ、一つだけ言つとききます。美咲先輩にはちゃんと言つといた方が良いですよ、まあ今すぐつてわけじゃないですが」

「……ああ、美咲には俺の口からちゃんと言うよ。それ位のけじめは付けないな」

「精々頑張つてください」

「生意気な後輩め」

何処かすつきりした様子で部屋から出ていく仁。言い忘れていたが、此処は空太の部

屋だ。ゲーム作りの途中で仁が入ってきたから作業を中断していたのだが、空太は話が終わると直ぐに作業を再開した。

「ですって、美咲先輩」

空太がそう言うと、空太のベッドの下からのそのそと力なく上井草美咲が出て来た。彼女は仁が来る少しまでに空太の部屋を訪れ、仁が来たと同時にベッドの下に隠れたのだ。本当は仁を驚かせようとしたのだが、案外シリアスな話をしていたので出ていけなかったのだ。

しかも、その話は自分にとっても重要なものだった。

「……………はい君、私どうすればいいかな」

「何が？」

「仁が……………遠くへ行っちゃう」

「それで？」

「私……………仁と離れたくない」

「美咲先輩は仁先輩とどうなりたいんですか？」

「ちゅーしたい……………デートしたり、ぎゅってしてもらったり、したい」

「へー頑張れ」

空太はそう言って作業に戻った。カタカタとキーボードを叩く音が響く。美咲は空

太の短い言葉にえつと顔を上げた。そんな簡単に切り上げちゃうの？ という視線を空太の背中に送りながら言葉を紡ぐ。

「え、えつとそれでね？ 私どうすればいいのかなって……」

「俺が知る筈ないじゃないですか」

「っ……」

空太が手を止め、美咲の方へと身体を向けた。

「あのですね、人間の感情ってのは複雑なようで案外単純です。あの人が好きだ、だから恋人になりたい、これだけです。美咲先輩だってそうでしょう？ 仁さんを好きになった過程はどうあれ、仁さんが好き、だから恋人になりたい。そういうわけだ」

「う、うん」

「でも、単純だから上手くないかない。誰かを好きになるのは簡単だ、誰にだって出来る。でも、誰かに好きになって貰うのは難しい……誰にでも出来ることであって、誰にでも出来る事じゃない。恋人になる、文字にすればたったの五文字のことを成し遂げるには、今までの関係を『全く違うモノへ』変化させるってことだからです。しかも、失敗すれば好きなのに近づけない関係へと変化する……だから皆勇気が出ない、今の美咲先輩の様に」

「……………」

「どうすればいいか、そんなの人それぞれ。好きになった自分と相手によつて常に変化する……仁先輩の事を俺より知ってる美咲先輩なら分かると思いますよ。さしあたってまずは、仁先輩がどうしたいのか……良く考えてみる事です。勿論、仁先輩に直接聞くのは駄目です……それは、仁先輩の決意に対する侮辱ですからね」

空太の言葉に、美咲は俯いた。長々と語つたが、とどのつまり空太は美咲を助けるつもりもフォローするつもりもないのだ。一言でまとめるのなら、

——自分で考えろ

空太は美咲の悩みを切り捨てた。真剣に考えた訳ではない、ただただ空太にとつてそういう人間関係のもつれが、酷く面倒だっただけだ。

美咲は少しだけ考えたあと、空太に礼を言つて部屋を出ていった。

「……はあ、面倒なことになってきた。止めてえ……」

空太はそう言つて、これまた大きな溜め息を吐いた。

だが、これ以外にもまだ問題は残っていた。それは、空太に大きな衝撃を与えるものとなる。

神田空太の溜息

普段はてんやわんやと騒がしいさくら荘の光景は、段々と影が差していた。主に受験生である美咲と仁の二人の問題や、青山七海の意地が中心になってだ。過去、こういった悩み事はさくら荘になかったわけではない。だが、その時々でさくら荘の住人全員が力になって解決してきた。

だが、今回は少しわけが違う。他人に話し難い悩みだったり、他人に頼らない意地が協力を避けているのだ。全員が力になれば案外簡単に解決しそうな話だというのに、そう出来ない想いがつかえになっていた。

そんな中、さくら荘で最も信頼の厚い男、神田空太は普段通りゲーム作りをしていた。彼としては重暗いさくら荘の雰囲気はあまり好ましい状況ではない、が、特にそれをどうしようよとは思っていない。理由は単純明快、『面倒』だから。椎名ましろが漫画や絵以外に興味薄なのと同じ、神田空太はゲーム作りやましろ当番以外にあまり興味が無いのだ。面倒的な意味で。

ゲーム作りは中々順調、既に完成まで秒読みという所まできていた。イラスト的な部分は結局実力的に間に合わなかったので、泣く泣く悔し交じりに美咲に頼むことになっ

た。けて、ましろには頼ろうとしなかったが。

「はあ……やっぱりこんなもんか……赤坂にもチエック入れて貰おうかな」

呟き、溜め息を吐く。空太的には中々の出来だが、やはり自信は持てない。今まで何もしてこなかった自分が早々簡単に上手く行く筈がないからだ。

空太は同じさくら荘の住人であり、天才プログラマーである赤坂龍之介にゲームの資料データと共にメールを送った。

『赤坂、ゲームのプレゼン資料見てみてくれ』

『了解した、ざっと見てみるから少し待て』

流石に同じ場所に住んでいるだけあって、直ぐにメールの返答があった。空太は背もたれに身体を預けて天井を見上げる。首を鳴らしてぐいっと身体を伸ばした。

「後は……青山と仁さん達か……」

すると、空太の部屋の扉がノックされた。返答を返すと、扉が開く。姿を見せたのは、ましろだった。

「……………どうした？」

「七海がおかしいの」

「青山はさくら荘の奇行種だからな」

「……………巨人？」

「あ、知ってたんだ……意外だな」

「漫画、読んだことあるわ。七巻だけ」

「なんで七巻？」

空太は苦笑しながら立ち上がり、青山の下へと向かう。青山がおかしい、と言われれば少し気になる。体調管理は重々注意していた筈、それでいておかしいとはどういうことなのか？ 変な行動を取っているの意的な意味であればいいのだが。

だが、その不安は最悪の形で現実になった。

空太は部屋を出て、玄関で青山七海を見つけた。そう、ふらふらになって具合の悪そうな青山七海を。

「……………はぁ……………めんどくせえ……………」

空太は顔に手をあてて心底だるいなあとと思う。あそこまで徹底して体調管理したのに体調崩すのかこの馬鹿は、と内心青山に呆れながら歩み寄った。空太に気が付いていない様子の青山を抱え上げ、二階へと上がる。

「……………なに？ あ、神田君……………なに……………」

「お前本当馬鹿だよなあ、大人しくベッドに沈んでろ」

「今日……………バイトだから……………」

「連絡入れろ、休め、そんな状態で来られる方が迷惑だ」

「うん……ごめん」

空太に抱えられながら、携帯でバイト先に連絡を入れる青山。意識は朦朧としていて、空太が二階に上がったことにも何も言わないようだった。か細い声で休みますと伝える青山を見下ろしながら、空太は何度目になるか分からない溜め息を吐いた。

青山の部屋の扉を開けると、ましろの部屋までとはいかないが散らかっていた。おそらく朦朧とした意識で着替えようとして色々出したんだろうと予想される。パンツやブラ、女の子らしい服が普通に散乱していた。

「……………なんか面倒過ぎて腹立ってきた」

空太は通話を切った状態のまま携帯を持った青山をベッドへ放り投げると、散らばった衣服を回収し、纏めてテーブルの上に置いた。丁寧に畳んだ状態だ。そして迷惑料的な意味でメモを残す。

『部屋はちゃんと片付けた方が良く、特に衣服類。 P S 案外エロい下着持ってたな（笑） 神田空太』

よし、と頷きながら全然良くない内容のメモを書き終えると、空太は青山の身体の上
に掛け布団を掛ける。

その時、青山がうなされるように小さく呟いているのに気がついた。

「明日は……行くから……絶対、行くから……」

明日。それは青山に取って重要な日、発表会の日だ。空太としてはこの日の為に体調管理をしていたのにやっぱり倒れた。こうなると空太の予想と悪い予感合わさって当たったことになる。これは最早予知のレベルじゃね？ と内心自分に感心している空太である。

「行きたいなら倒れてんじゃねーよ」

「あう……」

ぺしっと額を叩く空太。青山は小さく悲鳴を上げた。

神田空太の衝撃

青山の部屋から出て、二階の階段を降りる空太が見たのは、玄関で靴を脱いでいる千石千尋だった。空太は彼女にとりあえずおかえりなさいと会釈して、赤坂からの返信があるかどうか確認する為に部屋へ戻ろうとする。

だが、そんな空太の背後から千石千尋は話しかけた。

「待ちなさい神田」

「……………なんですか？」

「うん……………心底面倒臭そうな顔しないでくれる？」

引き攣った表情を浮かべながら、彼女は空太に一枚の手紙を差し出した。外国からの手紙特有の便箋、エアメールという奴である。空太はそれを受け取って、すぐにましろ宛てだと理解した。このさくら荘で外国に手紙をやりとりする相手がいるのはましろ位だからだ。

そして、差出人の名前を見る。そこには、アデル・エインズワースと書かれていた。外国の名前で、『男性』に付ける名前。空太は若干眉を潜める。

「神田、それましろに渡しておいてね」

「……………了解」

「ふふふ、神田……………アンタも高校生らしいトコあるじゃない、頑張んなさいよー」

千尋はそう言つて、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべながらリビングへ姿を消して行つた。空太は手紙を眺めながら様々な思考を働かせる。面倒、考えなければいいと思ひながら、どうしても思考してしまふ。

アデル・エインズワース

まず真つ先に考え付くとすれば、親族か外国の友人。年齢は分からないが、男性であるなら空太的にはあまりよろしくない手紙だ。内容は大体予想がつく、ましろの体調や近況を気にかけて手紙、もしくは彼女の絵の才能をまだ諦めていない手紙、あとは……………恋文。

ましろの過去は空太もまだあまり多くは知らない。外国に恋人がいた、好きな人がいた、告白してきた男がいた、という話は聞いたことはない、ないが、あり得ない話ではない。

ましろが空太達にあまり恋愛的興味を持たないのは、恋愛感情が希薄なのではなく、他に好きな相手がいたからかもしれない。そう考えてしまうのは、やはり空太も男子高生で子供だからだ。

「……………ましろに聞けば、分かるか」

聞いて、もしもそうだったらどうするのか。空太にはまだ判断がつかない。もう一度階段を上がって、ましろの部屋の扉の前に立つ。少しためらいながらもノックをした。

「入るぞ」

空太はノックをしても返答が無いことは分かっているのですが、そのまま部屋に入った。するとそこにはスケッチブックに何かを書きこんでいるましろの姿があった。

ましろは空太の方を向くと、スケッチブックを一旦置いて立ち上がる。

「七海は？」

「ああ、取り敢えず寝かせてきた」

「そう……」

「はいこれ、お前宛てに手紙だ」

「……うん」

「……誰なんだ、その人？」

「特別な人」

「………どういう意味だ？」

空太の問いに、ましろはびっくりした様な表情を浮かべた。

何故なら、空太が自分の発言に対して意味を問うてきたのは初めてのことだったからだ。今まで、自分の言葉を聞いて、勘違いせずにちゃんと理解してきた空太が、初めて

自分の言葉の意味を汲み取れなかったのが驚きだったのだ。

「……好きな人」

「……そう、か」

空太は数秒目を閉じて、諦めた様な表情を浮かべたあと部屋を出ていく。後ろ手で扉を閉め、そのまま茫然としながら自分の部屋に戻ってきた。パソコンを立ち上げると、赤坂からメールが届いている。

空太は無感情に、でも確認はしなければならぬと思いつつながらメールのアイコンをクリックする。

『読了した。僕の貸し与えた本を良く読んでいるみたいだな。絵は勿論だが、内容としては悪くない、今言えるのは、相当の事が無ければ一次審査程度なら通過することは難しくない出来だということだな。コンセプトやターゲットをしっかりと捉えているし、僕としても中々興味深い内容だった。』

ただ、神田の考えるゲーム内容ではコストや考えられる人材費の面で、新人の考えるゲームに投資するものとして中々難儀しそうな部分も見られる。二次審査のプレゼンの結果次第だが、もし仮に二次審査も通過出来たとすれば、その点はスポンサーやプロと話し合うことになるだろう。その際は、僕も多少は助力しよう。』

評価は上々、一次審査は突破出来る可能性のある作品だと認められた。それも、プロ

グラマーとして天才的な才能を持つ赤坂龍之介に。今の空太であればそれなりに嬉しい事実である筈なのに、何故か今は何も感じない。ああ、そうかと思う位だった。

頭の中が真つ白だった。取り敢えず今は何も考えたくはなかった。

ゲームのデータを纏めて、天才のお墨付きをもらった内容で『ゲーム作ろうぜ!』の参加エントリーをクリック。これで、後は一次審査の結果が届くのを待つのみだ。

空太は椅子から立ち上がり、ベッドにその身を埋めた。

『好きな人』

ましろの言葉が頭の中でぼんやりと浮いては消えていく。

「あーあ、面倒臭い……やめた」

空太は枕に顔を埋めて、そう呟いた。

神田空太の失敗

暗い部屋の中で、空太は目を覚ました。電気は付いておらず、早朝の薄暗いぼんやりとした光がカーテンで遮られた窓から、微かに差しこんでいる。空太の朝は早い、日課故か頭は不思議なほど鮮明に回り、直ぐに朝だと理解出来た。

ベッドの温もりから身体を離し、ふらふらと立ちあがる。そしてカーテンを開け、窓を開き、朝のひんやりとした心地良い空気を全身に受けて、思い出す。

「……好きな、人」

椎名ましろに届いた、椎名ましろが好きな人からの手紙。空太の恋心には、一筋の罅が入りこんでいた。少し前まではこの胸を締め付ける様な感触が心地良かった、椎名ましろとの会話もやりとりも、何もかもが密かに楽しかった。

なのに、

今は全く無感動だ。胸をギリギリと締めあげる様な苦しさと、椎名ましろを好きだという気持ちが無価値であったことの衝撃が、空太を精神的に追い詰めていた。

喉が渇く、目の前の光景が酷く色褪せて見える。空太は思った、

——ああ、これは見たことがある景色だ

と。全てを諦めて、投げ出して、開き直った自分が今まで見ていた景色だ。無感動で無意味な世界と自分。気が付けば椎名ましろのせいで色が付いていたらしい。彼女に会った瞬間、彼女自身が灰色の世界に鮮やかな色を塗ったのだ。

だが、それはもう色褪せて灰色になった。元に戻った。色を付けられた空太の恋心に罅が入り、そこから全部の色が抜け落ちてしまったから。

「……なるほど、失恋……恋を、失うと書いて、失恋……言い得て妙だな」

確かに、今までの何もかもを失った気分だった。ゲーム作りも、全力を出すという約束も、どうでもいいと思えるほど、気持ちが重く、久しぶりの感覚。

——何かを諦める感覚

諦める、なんていつ以来だろうか。小学生のころ以来だろうか。それくらいから、空太は諦められる場所に立とうとしなくなった。

改めて、椎名ましろは凄い奴だと理解する。気が付かない内に世界に色を付けられ、気が付かない内に挑戦者の立場に追いやられていたらしい。なんて奴だ、凄すぎて嫉妬

すら湧かない。

「……日課、やるか」

空太は時計を見る。時刻は午前4時30分ちよい、いつもよりも早い。空太にとってはそれがありがたかった。今はとにかく、少しでも長く自分だけの世界に没頭していたかった。

部屋を出て、手際良く準備を済ませると……空太はベランダで身体を動かし始めた。

◇ ◇ ◇

——どれくらい経っただろうか？

止まらない。作りあげた拳も、限界まで伸ばした蹴りも、空気を切って動く。汗が全身を濡らして、服が汗を吸いこんで重い。心臓が破裂しそうなほどポンプして、体力なんてもう限界を超えている。でも、身体は止まらない。

俺自身がそう思ってるのか、それとももう意識なんて遠くへぶっ飛びまってるのかもしれない。それでも、空気を身体が切る度に感覚が研ぎ澄まされていく。自分だけの

世界が広がっていく、此処は俺の、俺だけの、俺一人だけの世界だ。ここには夢も、才能も、誰もいらぬ、俺が自由でいられる最高の世界だ。

ずっとこの世界にいたい。いつだったか、この世界を見つけた時に心からそう思った。色の無い世界が常な俺の、もう一つの世界。俺だけが存在する色も才能も人も関係無い世界。ここなら誰も俺を傷付けない、俺が誰かに嫉妬して諦める事も無い、最高じゃないか。

「……………つはあ……………」

汗が伝い落ちる、血液が血管を凄い勢いで通って行くのが分かる。心臓の鼓動の音が大きく響いて、筋肉が軋む音が時折体内から聞こえた。限界を超えている、だが止まらなくなかった。

しかし、身体はどんどん動きを止めていく。足が止まり、拳が思った場所へ届かず空振る。そしてそのまま体勢が崩れて倒れる。咄嗟に足を出して持ちなおそうとした、だが足が前に出ない。酸素が足りていないのか、視界が真っ白だ。

真っ白で、まっしろで……………ましろを思い出す

「く……………っそ……………!!」

歯噛みする。なんで俺じゃない、俺ではダメなのか、何が不足なのか、どうすればよかったのか、こんな思いをするのならば……ましろになんて……!

「ましろになんて……会いたく……なかった……!」

倒れる身体を、何かが支えた。その瞬間、自分の世界が崩壊し、灰色の世界が戻ってきた。

「……空太……」

最悪の音が、頭上から聞こえた。動かない筈だったのに、無意識なのか顔が上を見た。そして、そこには俺を支える人がいた。白く細い身体で、俺の力の入らない身体を支える奴がいた。

「ましろ……!?!」

俺が今、一番会いたくない奴が、そこにいた。そして、ましろに聞かれた。

「空太……今、なんて……」

「あ……あ……ま、しろ……!?!」

ましろが今まで見せた事のない表情を浮かべていた。感情の起伏が少ないましろ、なのに何だその顔は、

——なんでそんな、泣きそうな顔をしてるんだ……？

ましろは俯き、俺を縁側に座らせると用意しておいた水筒を俺の手に持たせて、去って行った。手を伸ばそうにも、力が入らない。ましろの背中がリビングから消えて、階段を上る音が静かに聞こえた。

思ってもいないことを口走って、一番聞かれたくない人に言うてしまった。

「ああ………これは、どうしたものかな………」

俺は灰色の世界を見つめながら、そう呟いた。身体が動くようになったのは、それから一時間後くらい……時計が8時を回った頃だった。

神田空太の本当

動けるようになった空太は、一旦シャワーを浴びて乾いた服に着替えた。そして自分の部屋に戻る途中、青山七海と千石千尋が言い争っている玄関に鉢合わせした。

見た限り、外に出ようとしている青山を千尋が止めようとしている、という構図だが、その理由はなんとなくわかる。青山の容体はまだ回復していないのだろう。後ろから見てもまだ少しふらふらしているし、顔も若干紅潮している。絶不調であることは明らかだ。

「あ、神田……アンタも止めてやって、青山体調悪いのに発表会行こうとしてんのよ」

「ああ……確か青山今日でしたね……」

「神田君……止めないで、私……行くから」

空太が背後にいることを千尋の言葉で気付いたという風な青山。聞いた感じ、声はいつも通り。鼻つまりや喉が腫れるといった症状はないようだ、おそらく今青山を苦しめているのは熱によって重だるい身体や寒気といったものだろう。比較的、症状は軽いうだ。

空太はもしもこれだけマネジメントして、それでも青山が体調を崩した場合のことを

考えて、喉や鼻詰まりは最低限避けようと特に手を尽くしていた。自分の部屋の奥深くに仕舞われていた空気洗浄機を引つ張り出したり、内緒で青山の部屋を徹底的に掃除し、換気することで埃や空気の汚れを取り除いたり、毎晩作ったハーブティーに大根おろしやはちみつを少量加えてみたりもしていた。また、食事当番を此処最近ずっと引き受けて青山の食事にも栄養バランスを考えていたりもした。

これはその成果だろう。現に青山は体調こそ悪いが、喉や鼻は万全だ。

「……何時からだっけ？ 発表会」

「……9時30分から」

「……どれくらいで終わる？」

「2時間位……」

空太は溜め息をついた。ただでさえ何もしたくない気分なのに、自分の心は青山を応援したいと言っていた。何故なら、青山も頑張っていたから、特筆して才能があるわけでもないのに、それでも頑張っていたから、空太はその背中を押してやりたかった。

なにより、空太は期待していたのかもしれない。青山七海に、『凡人でも成功出来る』と証明して欲しかったのかもしれない。そう考えると、今の青山は止めるべきでも止めたくなかった。

「先生……」

「何？ 神田……っ!？」

「どいてください」

「神田……アンタ、その顔……!？」

空太は千尋の身体を押しつけて、青山をおぶった。そしてそのまま玄関を飛び出した。

背後から千尋の止める声が聞こえた、だが空太はそれを無視した。もうどうでもいい、今はなんでもいいから、凡人の頑張りを止めないで欲しい。この背中少女は、この日の為に自分の時間をギリギリまで削って来たのだから。

「青山……今から俺が発表会の会場まで運ぶ、金が無いからタクシーとかは使えないが……必ず送り届ける」

「神田君……ありがと……」

空太は走る。会場までの道は知っている。何度か見に来た事があるのだ、空太は一応どこでやるのかを知っておいた方がいいだろうと思ひ、事前に視察に来ていたのだ。故に、ある程度近道も知っている。

路地を走り、建物の裏や時には中を経由して、走る。その速度は並の陸上選手よりも速かった。



「ありがと……神田君。行ってくるね」

「ああ、取り敢えずこれ飲んでけ」

しばらく走って、会場に辿り着いた。青山は空太の背中から下りて、会場の入り口を見た。そんな青山に空太はポケットから何かを取り出した。

青山の為に常備していたのだと体調を崩した時用の解熱剤。空太は改めて、過去の自分の用意周到さに感謝した。本当に予知能力持つてるんじゃないかと思う程の抜きなさ、自分で自分を賞賛したくなるほどだ。

青山はそれを受け取り、その場で解熱剤を飲んだ。青山の発表順次第だが、後の方であれば薬の効果も多少青山の力になる筈だ。

「行って来い」

「……うん」

青山が入り口の中へ消えていく。

立ちつくす空太。その背後に勢いよく一台の車が止まった。ドアが大きな音を立てて開き、そこから現れたのは美咲や仁、そして暗い顔のましろだった。彼女達は空太の姿を見つけて駆け寄って来る。

「こーはいくん！ ななみんは!?」

「空太！ 千尋ちゃんが空太が病気の青山さんを連れて行ったって……大丈夫なのか？」

「……………」

空太の近くに来ると、ましろ以外が詰め寄って来る。

だが、空太は無感情な瞳のまま仁達に振りかえる。

「！」

「こー、はいくん……?」

「……………空太?」

空太の顔は、ぼろぼろだった。濁った様な瞳、疲労が溜まって死にそうな顔色、見れば一目で分かる、今にも死にそうな顔だった。比喻では無く、本当に。

だが、そんな状態でも空太は『普段通り』口を開いた。

「ああ、仁さんに美咲先輩……それに、ましろも……大丈夫ですよ、今青山入ってっただけ」

その様子が、とても不気味だった。今にも死にそうな顔なのに、声音はいつも通り、顔と声が全く合わない空太が、痛々しい。

実際、空太は限界だった。普段は顔に出さなかったが、青山の体調管理の為に様々な

手を尽くし、夜はゲーム作りで時間を削り寝るのは夜遅く、日課も休まないため朝は早く、学校があれば授業や教員からの頼みで働き、帰ってくればまた青山の為に食事や掃除をする。誰にも悟らせず、空太は青山よりも自分の体力と時間を削っていた。

そこに、ましろへ届いた手紙と『好きな人』宣告を受け、意気消沈していた所に今朝のことが加わったのだ。肉体的にも精神的にも、空太はもう限界を超えていた。

「とりあえず、終わるまで待つてることにします」

「空太……」

なのに、空太はまだそうやって倒れずにいた。本当なら倒れてもおかしくないことぐらい、ましろにだって分かるくらいなのに、倒れない。なぜそこまでするのか、なぜそんなに頑張るのか、それは考えればすぐに分かる。

—— 周囲が期待するからだ

空太には凄い才能がある。自分なんかよりもずっと凄い奴。そんな事を本当は空太よりもずっと才能のある奴から日常的に言われ続ければ、そうあろうとするだろう。誤魔化して誤魔化して誤魔化して、自分すらも騙してそうあろうとするだろう。

空太はもう、自分自身が頑張っていることにすら気が付いていなかったのだ。そこ

に、椎名ましろが言ってしまった。

『夢があるなら、頑張れ』

前を向かせた。全力なんて面倒と思っていた空太の意識を、全力を出す方向へと強制的に変更した。その結果がこれだ。元々、無意識に騙し騙し頑張っていた空太が、更に頑張ろうとした。自分の力量以上のことをしようとした。当然、空太は今まで頑張っていたのだからそれ以上のことは出来ない。既に限界まで振りしぼっていた身体は限界を超え、今の空太になった。

「空太……もういい、休んでくれ……!」

「……はいくん……ごめん、ごめんね……!」

仁達は、やっとそれに気がついた。空太には万能の人なんかじゃない、才能溢れる奴なんかじゃない、空太はただ、必死でそうあろうとしていた、ただの凡人だったのだと。だから悔いた。自分達の期待が、何気ない言葉が、空太という平凡な少年を痛めつけていたことを。

「何言ってるんですか……仁さん、美咲先輩……?」

「空太……」

「ま、しろ……あ、あはは……さつきは悪かった……本当は、ましろに会いたくないなんて……嘘だから……だから……」

「空太……！」

空太はまただ、と思った。ましろが、また泣きそうな顔をしている。どうしてそんな顔をするのか、今度は分からない。

困惑する空太を、ましろは抱きしめた。その小さな身体は、少しだけ震えていた。

「ど、どうしたんだよ……ましろ」

「分からない……でも、こうした方が良くと思った」

「な、なんだよ……それ……」

空太は更に困惑する。予知能力とまで賞賛していた思考が、全然働かない。この状況が分からない。

「空太……お前はもう十分頑張ったよ……悪かった、気付いてやれなくて……」

「仁さん……」

「こーはいくん……ごめん、本当にごめんね……！ こーはいくんの気持ちの知らないで……あたし……！」

仁が歪んだ表情で空太に謝り、美咲はそう言つて泣きながらましろと一緒に空太を抱きしめた。

空太は、何が何だか分からなかったが……こうしていると凄く楽になった気分だった。心の何処かで、三人の言葉が深く染み入った。

そして次の瞬間、

空太は足から力が抜け、真っ白になっていく意識の中、意識を失った。朝と同じようだったが、

——今度はなんだか、凄く安らかな気分だった。

神田空太の看病

青山七海の発表会は、失敗に終わった。発表順が後半だったこともあり、解熱剤の効果も上手く作用して発表の時には大分体調も通常時に回復していたのだが、それでも失敗した。やはりまだ多少回復したとはいえ万全でない身体では無理があったのだ。結果、普段の実力の半分も出せず、失敗した。

だが、青山七海はその失敗を悔やむ前に、会場前で待っていた仁によつて神田空太が倒れたことを知らされた。無理をしていたことを知らされた。歩いて帰ることは普通に出来る体調ではあったので、仁が呼んだタクシーでさくら荘まで帰ってきて、すぐさま空太の部屋へと向かった。

「神田君?!」

「あ、ななみん……」

「美咲先輩……神田君は……?」

「うん……今、寝てるところ」

空太は自分のベッドで寝かされていた。蒼白な表情で、目元にも若干クマが出来ている。皆自分のことに必死で、裏で支えてくれていた空太のことになど全然気が付いてい

なかった。

「空太の奴な、最初青山さんがさくら荘に来る前に言ってたんだ」

「え？」

「青山さんは真面目だから、きつとましろ当番のことを知ったら空太からましろ当番を代わるだろうって……それで、無理をする人だからどこか大切な所で倒れるだろうって」

「そんな……それって……」

「そう、青山さんは空太の言う通りにましろ当番になった。そして、空太の予想してた通り発表会のこの日、体調を崩した」

空太は全部分かっていて、それを知って、青山は空太に対する罪悪感を感じる。

「でも……それならなんで言ってくれなかったの……!」

「言って、青山さんは言うことを聞いたかい？ 空太は分かってたんだ、青山さんが無理するなって言われて素直に聞くようなタイプじゃないって。だから放っておいた、無理して倒れれば、観念してましろ当番を空太に戻すだろうと、考えてね」

「でも、こーはいくん……ななみんに発表会があるって聞いてから、寧ろななみんの体調を気に掛けてたみたい……思い返してみれば、最近こーはいくんが食事当番をいつべんに引き受けてからのご飯は栄養がちゃんと考えてあったもん……」

「……………」

そう言われて、青山は思いだす。

『ほら、これ飲んでくれ。最近ちよつと趣味で始めたんだ』

『なにこれ……………紅茶？』

『ハーブティーだ。身体が暖まるぞ』

夜遅く、神田空太は毎晩自分にハーブティーや夜食を作ってくれていた。趣味で始めたと言っていたから気にしていなかったが、本当は夜遅くまで起きている自分の体調を気遣っていたのではないかと？

それに、最近良く空太は自分に疲労回復の方法について色々言っていた気もする。話し半分で聞き流してしまっていたが、あれは空太なりにさり気なく気を回していたのではないかと？

「それに……………空太は最近本気でゲーム作りしてたからな……………夜遅くまで空太の部屋、電気付いてたし……………空太は朝も早いからな……………碌に寝てなかったんじゃないか？」

「あたし……………それなのにこーはいくんの部屋に突撃して徹夜で遊んだり、話したりしてた……………馬鹿だよ……………あたし」

その場の全員が気付く。空太が自分達の回りでどれほど頑張っていたか、どれほど自分達が空太に支えられていたのかを。失ってから初めて気付く、そして気付いた時には

もう遅い。

「……持つて来た」

そこに、ましろが水の入った桶とタオルを持つてきた。彼女は空太の横に歩み寄ると、たどたどしくタオルを濡らし、絞って空太の額に乗せた。

この中で、ましろが一番空太に対して罪悪感を感じていた。思いかえせば、空太はましろ当番だった頃から色んな事をしてきた。ましろが凄いと思う位、色んな事をしてきた。だからましろは安心して空太を頼っていた。頼り過ぎな位、頼っていた。ましろ当番だからではないが、ましろもどこかで思っていたのだ、

——空太なら大丈夫、空太は凄いから

空太に一番負担を掛けていたのは、自分だ。ましろはそう思っていた。だから、今朝ましろになんか会いたくなかったと言われた時、空太の本当が見えた気がした。透明だった空太の色が、偽物だったことが分かった気がした。透明だったのは、空太の本当を隠す為の壁だったのだ。その中に、空太は自分を包み隠していたのだ。

「空太……私のせい……」

「ましろちゃん……」

「ましろん……」

ましろの眩き、仁達は眉を潜める。けして、ましろだけのせいではないが、ましろの背中に言葉が出てこない。

「……とりあえず、青山さんはまだ体調悪いんだから……寝てた方がいい」

「……でも」

「ななみん、こーはいくんもそう思ってるよ……きつと」

「………はい、じゃあ大人しく寝てます」

青山はそう言つて、うしろめたそうに部屋を出て行つた。

「俺、おかゆでも作るよ。空太が起きた時、食べさせてやろう」

「そうだね……うん！　じゃあ私は皆のご飯を作るよ！　こーはい君にいつもやって貰つてたからね！」

「ましろちゃん、空太を看ててくれるか？」

「分かつた」

こーしてさくらら荘の面々は動きだす。

神田空太が倒れ、やっと自分達の周囲が見えて来たようだ。

神田空太の認識

「……はあ……」

神田空太が眼を覚ましたのは、翌日の朝だった。朝が早いことから、空太は基本的に寝起きが良い。起きてすぐに鮮明に働く頭を使って、眠る前のことを思い出した。

ただの過労とはいえ、倒れるほど動いているつもりはなかった。他の人が普通にやっていることだと思い込んでいた。寧ろ、天才達ならばもつとやっているのだろうとさえ思っていた。

だが違った。自分はやり過ぎな程頑張っていたらしい。

「面倒面倒言って……笑えるな——ん？ ……ましろ」

空太はそんな自分に嘲笑しながら、身体を起こす。すると、自分の太ももの上に毛布越しの重みを感じた。視線を落としてみると、そこには椎名ましろが眠っていた。どうやら、一晩中ずっとと見ていてくれたらしい。好きな人にここまでして貰えるとは、中々俺も幸せ者だなあ、と思いつつ、空太は嘆息する。

そこまで考えて、空太は眼を閉じた。

頭に思い浮かぶのは、少し前までの様々なことだ。本気を出すと約束したこと、まし

ろが漫画家デビューしたこと、青山がさくら荘に来たこと、ましろ当番が代わったこと、青山が倒れたこと、ましろに『好きな人』から手紙が来たこと、病気に斃される青山を発表会に連れて行ったこと、そして、自分自身が倒れたこと。

なんだか少しの間に色々起こっている。しかし、気絶する前はそんな様々なあれこれに苛まれていたというのに、今は酷くすつきりしている。精神的に整理が着いたというべきか、それとも考えることを放棄したのか、それは空太自身も分からない。

でも、今も確かに空太はましろが好きであるし、『好きな人』からの手紙を気にしている。才能とか天才とか考えるのは面倒だし、頑張ることだっけしたくない。だがそれでも、空太の世界には色が付いていた。灰色の世界には、鮮やかな色彩が確かにあった。

「……………ん……………空太……………?」

「よ、ましろ。良い朝だな」

「空太……………大丈夫?」

「……………大丈夫だよ、心配するな」

「……………私のせいだもの」

ましろがしゅんとした様子でそう言う。空太はそんなましろを見て心底面倒そうに溜め息を吐いた。そして、自分を見上げてくるましろの頭に手を乗せて、くしゃくしゃと撫でる。

ましろは髪の毛が乱れる事も気にせず困惑した表情を浮かべた。

「あのな、俺が倒れたのは俺の責任だ。そもそも、ましろ当番程度で倒れるほど俺は柔じゃない」

「でも……」

「俺の認識が甘かったんだ。ましろ達はもつとずっと高みにいる存在だと思ってたから、俺のやつてることなんて大したことないと思ってたんだ」

「空太は凄いわ」

「そうだな、俺のやつてたことはましろ達から見ても異常だったんだ」

異常だと、知った、思い知った。空太は苦笑する。

だから、もう間違えない。自分がどういことが出来て、どこまで出来る人間なのか。空太は少しだけ嬉しかった、思ったよりも自分の出来ることは多かったことが。

「なあましろ」

「何?」

「あの手紙の人ってさ、どういう人なんだ?」

だから、まずはそこから始めることにした。決着を付けることにした。あの手紙の男がましろにとって本当に好きな相手ならば、諦めようと思った。だが、もしもましろの言う『好き』が恋愛的な意味でないとすれば、空太にもまだチャンスはある。

勇気とか根性とか、空太にとっては欠片も持ち合わせていないものだった、しかし今だけはほんの欠片程の勇気を持って、空太は自分の意志で一步、足を前に出した。

はたして、ましろの答えは――

「……アデルは私の絵の先生よ」

後者だった。

空太はそれを聞いて、安心感からか脱力する。

「絵の、先生……何歳だその人……」

「七十歳」

「……………くはっ！ あはははははははっ！」

空太はなんだか可笑しくなってきた。思わず吹き出してしまった。自分は七十歳の老人に対して嫉妬していたのか、ましろが好きな人と言ったからといって、少し早計過ぎている。そう考えるとそんな自分が可笑しくて、もう笑うしかない。

ましろがきよとんととした表情で見上げてくるが、それも気にならない程、今の空太は晴々した気分だった。

「はあ………そっか」

「空太……嬉しそう、何かあった？」

「ああ、あったよ。ありがとな、ましろ」

「そう……」

空太の言葉に、ましろはほんの僅かな微笑みを浮かべた。

空太は自分の身体をぐいっと伸ばして、ベッドから降り、立ち上がる。ましろもつられてゆつくりと立ち上がった。

「さて……と、それじゃ適度に頑張りますか」

「空太」

「大丈夫だ、今回みたいに倒れる程じゃないよ」

「おなか減った」

「はあい台無しい→」

「空太」

「はいはい……飯にしようか」

「うん」

空太はそう言って笑う。その表情はなんだか、今までになく空太らしい不敵な表情だった。

ましろは、部屋から出ていく空太を見おくりながら、微笑んだ。そして、誰にも聞か

れないような声音でぼつりとつぶやいた。

「今の空太……綺麗な空色をしてる」

ましろは気持ち嬉しそうに、空太の部屋を出て、空太の背中を追った。

神田空太の改革

起き上がった空太は、まず青山七海の部屋へと向かった。彼女も空太同様熱を出して体調を崩していたのだ、おそらく仁や美咲が看病をしたのだろうが、熱が引いたとしても病み上がりなのだからぶりかえしていても仕方が無い。とりあえず具合を見ておこうと判断したのだ。

起きてからの空太は、なんだから今までずっと重い枷を付けていた付けていて、それを脱ぎ去った様な身軽な気分だった。身体的にはなく、精神的にだ。

なんとなく、今なら何でも出来るとすら思えた。自分の中の歯車が上手く噛み合った様な、そんな感覚。

二階に上がって、青山の部屋の扉を開けた。ノックを忘れた気がするけど気のせいだ！

「青山、起きてるか？」

「あっ……！」

扉を開けた先、そこには

「ナイスパンツ！ 俺好きだぜ縞々！」

「出ていけえええ!!」

着替え中の青山が下着姿で立っていた。思わずサムズアップした空太は、顔を真っ赤にした青山七海の見事な張り手によつて部屋を追いだされた。勿論ちゃんと躲した。躲した上で自ら部屋を出たのだ。

扉を背に、空太は青山の荒い呼吸の音を聞いていた。

「青山」

『な、なに?!』

「悪かったな、色々……もうちよつと体調気に掛けてやつてれば良かったんだけど」

『……そんなことない……神田君はずつと私のことを気に掛けてくれてたつて聞いた、神田君が謝ることなんて一個もないよ。全部無理をした私のせい……だから、ありがとう……神田君』

空太は扉越しに、青山へと謝った。いざという時に体調を崩すなど、空太のマネジメントが足りていなかったのだろうと反省しているのだ。

だが、扉の向こうから聞こえて来たのは、青山の感謝だった。神田空太は頼まれてもいないのに良くやってくれた、感謝してもし切れない程のことをしてくれた。体調を崩してそれを台無しにしたのに、自分を抱えて発表会の会場まで運んでくれた。自分も倒れそうな程苦しんでいたというのに、たった一人で頑張っていた。寧ろ謝るのは自分達

の方だとおもった。

「そっか、じゃ全部青山のせいってことで。ましろ当番は返してもらおうぞ」

「え!？」

「だって今そう言ったじゃん。これから二学期も始まって来るし、ましろ当番は正直酷
だろ? これからは青山のお守をしなくてもいいからな、ましろ当番は俺に返せ」

「う……………そう、だけど……………はあ……………じゃあよろしく、椎名さんに変なことしたら許さな
いからね?」

「青山になら変なことしても良いのか?」

「そういうことじゃない!!」

「ははは! 分かってるよ、まあ……………元気になったようで良かった、それじゃ」

空太はそう言つて、扉から背を離す。そして、階段を下りようとした。

すると、背後で扉が勢いよく開く。出て来たのは青山だ。

「神田君!」

「!」

「……………今回のこと、ありがとう……………本当に……………ありがとう!!」

青山は深く頭を下げてそう言った。大きな声で、そう言った。全力の感謝を、今はこ
ういう形でしか表せないから、そうした。

空太はそんな青山のことを見て、ふと笑う。そして、人差し指で上を指差しながら、真つすぐな瞳で返した。

「じゃ、さっさと声優になってテレビから青山の声を聞かせてくれ。それが一番、俺は嬉しいよ」

「! ……うん! 頑張るから! しつかり見ててね、神田君!」

「おう」

空太は短くそう言つて、階段を下りて行く。もう心配はいらない、空太も青山も、今回のことを通じて一歩だけ前に進んだ。自分の実力を知ることが出来た。今はそれだけでいい、あとは本人次第だ。



空太は青山と別れてから、リビングに向かった。そこにはましろ、仁、美咲の三人がいて、此方を見ていた。空太の顔がすつきりとした表情をしていたからか、それともましろが何か言ったのか、三人とも空太の方を見て笑みを浮かべた。

「もういいのか? 空太」

「ええ、おかげ様で」

「こーはいくん復活なんでもーん！ もう倒れちゃ駄目だよ！ こーはいくんにはあたしの遊び相手をする重要な使命があるんだからね！」

「反省してないなアンタ」

「反省したよ！ でも更生はしないんだもーん!!」

「ま、その方が美咲先輩らしいっちゃらしいですか……」

空太は冷蔵庫に掛けられた小さな掲示板に近づいて、ましろ当番と書かれた磁石を青山七海の場所から神田空太の場所へと移行する。

そして、そのまま空太は冷蔵庫からお茶を取り出し、コップに入れた。そして、三人が座っているテーブルに自分も着く。

「仁さん、美咲先輩、俺もう少し頑張らないことにしました。心配かけましたね」

「そうか……いいんじゃないか、空太には結構プレッシャー掛けちゃったし、それ位が丁度いいだろ」

「うんうん、こーはいくんも復活したことだし！ さくら荘一同！ もっともつと楽しんで行こう!!」

美咲がそう言つて立ち上がる。仁も空太も、いつものさくら荘が帰ってきた感じがして苦笑する。これがさくら荘、人の迷惑なんて顧みず、楽しく青春を謳歌している問題児達の集団。少し躓いたとしても、全員が力を合わせて乗り越えられるのだ。

「空太」

「ん？」

美咲が騒いでいて、仁がその相手をしているという光景を見ながら、ましろは空太に話しかけた。空太もましろに目を向けないまま対応する。

「教えて欲しいことがあるの」

「へえ……言ってみろ」

空太は珍しくましろが知的好奇心を露わにしたので、少々びっくりしながらも聞き返した。すると、ましろは真つすぐな瞳のまま、空太にしか聞こえない様な微かな声音で、こう言った。

——”恋”を教えて

神田空太の一手

恋を教えて。椎名ましろが神田空太にそう言った時、神田空太はそれに答えることが出来なかった。

今でこそ椎名ましろに恋している神田空太ではあるが、恋をこういうものだと思える程恋について何か知っている訳ではない。心理学者という訳でもないし、まして恋愛について教えられる程長い年月を生きてもいない。寧ろ、恋愛についてだけ知りたいのであれば空太よりも仁や千尋に聞いた方がよっぽど効率が良いし、確実だ。

とはいえ、椎名ましろは恋を知りたい。それも、空太に教えて欲しい。

当然、本や漫画の知識でいえば、恋愛について知っている。胸がドキドキして、ちよつとした行動できゅんとして、ハラハラして、切なくなつて、ときたまぼかぼかと温かくなる。そんな感情が、恋だ。しかしましろは稀代の非常識人、そんな感情を感じた事も無いし、文面だけ見ても理解は出来ない。

それはつまり、

恋愛漫画を書くことが出来ないということだ。彼女は、漫画を書く為に恋愛を知りたい。本当の恋愛を知りたい、胸がドキドキして、きゅんとして、温かくなる様な体験を

したい。

だから、空太に教えて欲しい。空太に、ドキドキさせてほしい、きゅんとさせてほしい、温かくさせてほしい。

椎名ましろは稀代の非常識人。だから気が付かなかった。ドキドキさせてほしい、きゅんとさせてほしい、温かくさせて欲しい、そんな願いの相手に空太を『選んだ』ことの意味に気付かなかつた。紛れも無く、それは好意を持った行動ということではないか。

「恋を教えて、ねえ……」

空太は日課を終えて、皆が起きてくる頃であろう時間帯に、縁側に座ってそう呟いた。あれから、数日経った。空太の疲労も、青山の体調も元通り、ましろ当番も空太に戻されて、さくら荘の雰囲気はいつも通り、和気藹々としたものに戻っていた。

とはいえ、まだまだ悩み事が無くなった訳ではない。ゲーム作ろうぜ！には自作ゲームを送ってエントリーし、ましろとの約束もまだ有効であるし、その上恋を教えるとは凄まじい連続攻撃、怒涛の攻めではないか。

「おはよ、神田君」

「ん、ああ青山おはよう」

すると、そこに青山が起きて来た。彼女はアレから無理をせず、ましろ当番でなくと

も余裕のある範囲でましろを色々気に掛けている。その内に、ましろとは名前同士で呼ぶ仲になった様だ。空太的にも、ましろにちゃんとした友人が出来ることはなんとなく嬉しい事実だったりする。

「何してたの？」

「ん、ちよつと運動をな」

空太の日課は、まだ知られていない。仁以外には。朝帰りの多い仁以外が起きてくる時間には、既にシャワーを浴びて一息ついているのだから、知りようもない。まあ、徹夜をすることも少なくない面子がさくら荘には多いのだ、いずれ知られる事だろう。

空太の返答を聞いて、青山が頷くと、彼女は空太に一通の封筒を手渡した。

「はいこれ、神田君に来てたよ」

「……あーゲーム作ろうぜの合否か」

「っ！ そ、それって……」

「まああまり心配して無いけどな」

空太はその封筒をビツと破って、中の手紙を取り出す。

そこには、こう書いてあった。

『一次審査通過』

赤坂龍之介、プログラマーの天才によってお墨付きをもらったのだ、一次審査くらい

は突破してくれないと困る。空太は嘖き出すように短く笑うと、青山に見えるように手紙を見せた。すると、青山は自分の事のように笑顔で笑かせた。

やったね、と何度も言ってくるので、空太は苦笑しながらありがとうと返した。

二次審査は数日後、8月31日のプレゼンテーションにて行われる。

空太は自分のゲームを分かりやすく説明し、納得させ、ゲーム制作まで漕ぎ付けるための場が設けられた。チャンスを手にしたのだ。

「まあ、本気の俺が作ったゲームだ。一次審査も通れない様じゃ、ゲーム作りの才はないだろ」

「それなんか凄い嫌味だね」

「自信を持つ事は良いことだ、寧ろ人は自分の凄い所をしつかり凄いと云えないと駄目だよ。謙虚なもの良いけど、プライドと自信はある程度必要だ」

「んー……そんなもんなん？」

「弱い奴は落とされる、それはスポーツの世界でなくとも同じことだ」

「神田君……なんかこの前から神田君じゃないみたい……」

「どういうことだ？」

「なんか、漲ってる……？　みたいなの」

青山の感想は、的を得ていた。

あの一件以来、空太は随分と変わった。いや、特筆して行動に変化があるわけではない……が、その表情というか雰囲気、活力が感じられる。

「んー……まあ、無理しない程度に頑張ってるからな」

「？」

「噛み合った、と言った方がいいかもしれない」

その原因は、やはり空太の内面に起こっていることだった。空太はあの一件以来、自分の身体がようやく自分のものになった様な感覚を得ていた。今まで噛み合っていなかった精神と肉体が噛み合ったのだ。

だからだろう、自分の出来ることがしつかり理解出来る。故に漲る自信と活力が雰囲気に出ているのだろう。

「ま、なにはともあれ……プレゼンの練習、手伝ってくれるか？」

空太はそう言って、青山に笑みを向けた。

神田空太の挑戦

それからというものの、空太はプレゼンに備えて資料作りに勤しんでいた。元々、赤坂龍之介から一次審査が通るお墨付きをもらっていたことで、事前に多少資料作りを始めていたこともあり、資料作りは早々に終わった。そしてそれを仁達さくら荘の面々に発表、指摘を貰い、資料を修正、その繰り返しだ。

空太の作ったプレゼン資料と、その内容を分かりやすく説明する発表術は修正するまでもなく良かった。分かりやすく、要点がまとまっていて、ちゃんと伝わってくる。だから、指摘自体は本当に細かい点だったが、それでも空太は資料を何度も見直した。誰も分からなかった悪点を見つけ、一つ一つ潰していった。

そして最後はプレゼン時間を10分程に縮めながら、ゲームの全容がすべからず全員の頭の中に浮かぶようなプレゼンが完成した。

「———となっています。以上」

「凄まじいな……今なら俺も他人にそのゲームを詳しく説明出来そうだよ」

「すっごいねこーはいくん！ こーはいくんのイメージがぎゅぎゅぎゅーんと私の中に流れ込んで来たよ！」

「うん、少なくとも私には完璧に思えた」

空太のプレゼンを聞いて、仁、美咲、青山がそう感想を漏らした。それもその筈だ、何せ空太はこのプレゼンにおいて『椎名ましろでも理解出来るプレゼン』を目指してやっていたりする。椎名ましろが理解出来るのに、他の人が理解出来ない筈が無い。寧ろより一層理解を深めたことだろう。

「ましろ、分かったか？」

「うん、面白かった」

「そいつは良かった、ましろに分かるプレゼンってのはやっぱり難しかったぜ」

空太は遠い目をしながら資料を置いた。とはいえこれでなんとかプレゼンも上手くいきそうだが、後はまあゲーム自体を面白いととってくれるかどうかだ。審査員達は仁達ではないのだ、素直に面白いと思ってくれても、客層、売上、人材価値、等々を評価して、採用してくれるかどうかは全く分からない。不確定で、予想不可能、どうなっても不自然ではない。

「ふー……まあ明日のプレゼンに間にあったからいいか」

「空太……頑張ってね」

「ああ、頑張るよ……約束だからな。ましろも明日編集者との会談で連載について話し合おうだろうか？ しつかりやってこいよ？」

「うん……頑張る」

さくら荘に住まう一人の天才と、天才の様な凡人が、来る明日に世間へ自分を公開する。それが吉と出るか、凶と出るかは誰も分からない。

ただ、そうだったとしても、この二人に『負ける』つもりは欠片も無かった。

◇ ◇ ◇

翌日。空太は龍之介の助言に従い、スーツを着ていつになく真剣な表情を浮かべながら自身の部屋を出た。その瞳はやけに静かで、集中しているというよりは研ぎ澄まされていると言った方がいいほど、鋭かった。何者の干渉も許さないと云えるほど、今の空太は圧倒的な気配を漂わせている。

あの青山の一件いらい、さくら荘の面々は空太を別人のように感じていた。勿論良い意味でだが、空太から漲る活力と自信、そして余裕ある雰囲気は、大空の様子は、大空の様な果てしない存在感を表現していたのだ。

だが、今の空太は違う。まるでこれまでの空太はずっと力を溜めていて、今の空太はその力を解放した状態なのだと思う程だ。

「空太、今日はなんか違うな……」

「そうだね……なんか張り詰めた糸みたい……緊張感が伝わってくる」

リビングに現れたそんな空太を見て、仁達はそんな感想を漏らした。これが、本当に意味で本気の、全力になった空太の姿。いままでは嘯み合っていなかった精神と肉体、そして全力だと思っていた過負荷が取り除かれた、神田空太という凡人の正しい本気。

今の空太は、天才の領域に凡人でありながら強引に踏み込んでいた。開き直って、何もかも投げ出して、無気力だと思いつつ、十数年ずつと続いていた全力以上の頑張り、その努力は確実に成果を出していた。

「——ふう……仁さん、美咲先輩」

「ん？」

「なに？」

「俺、頑張りますから。良い報告を持って帰って来ます」

「……ああ、頑張れよ」

「応援しているぞこーはいくん！ もし失敗しても気にするな！ こーはいくんならきつと出来るよ!!」

空太の言葉に、二人は笑みを浮かべてそう応援した。空太も、その言葉だけでふと笑みを浮かべる。

そして、空太は軽く朝食をとったあと、玄関へと向かった。

「……つと……」

靴を履き、立ち上がる。

そ、そこへ

「空太」

声 が 掛 っ っ た。聞 き な れ た、鈴 の 様 な 声。振 り 向 け ば、そ こ に は 椎 名 ま し ろ が 立 っ て いた。と な り に は、青 山 七 海 も いる。二 人 と も、空 太 を 真 つ す ぐ に 見 て いた。

「ああ、ましろ……青山」

「これ……」

「これは……」

ましろが お も む ろ に 差 し 出 し て き た の は、お 守 り だ っ た。神 社 で 買 え る 様 な、し つ か り と 刺 繍 が 施 さ れ て いる お 守 り。

「ましろがね、神田君の為に何かしたいって言うから……一緒に買って来たんだ」

「そう、なのか……」

空太は 青 山 の 言 葉 を 聞 い て、ま し ろ の 顔 を 見 た。

「空太……いつてらっしゃい」

ましろの、いつになく強い声。その言葉は、空太の背中を強く押しているようにも思えた。それだけで、胸がいつぱいになる。笑みが浮かぶ。

だから空太はお守りを胸ポケットに入れて、玄関の扉を開ける。そして、顔だけ振り返って一言だけ、こう言った。

「いってききます」

空太の本気が、世の中にどれほど通用するか、それを試す為に。

神田空太の笑顔

プレゼンテーションの会場で、空太は自分の番を待っていた。今日ここでプレゼンをする人は自分だけでは無い、あのゲーム作ろうぜの参加募集にエントリーし、一次審査を突破してきた者が此処にいるのだ。故に、空太以外にもゲームのプレゼンをする者がいる。

空太は待合室のソファに座り、ましろ達から貰ったお守りを握り締めていた。きつと出来る、今の自分は何でも出来ると言い聞かせ、緊張を解す。すると、幾分か身体の固さが取れたようだ。

プレゼンの資料は持ってきた、練習だった、やれることは全部やった。あとはそれをここでも見せれば良いだけだ。

「神田空太さん」

「はい」

呼ばれた。空太は立ち上がり、呼びに来た職員の後ろに付いてプレゼンの部屋へと入った。

中には、四人の審査員がいた。年配の男性や、若い女性職員、そしてなにより空太の

眼に留まったのは、ゲーム作ろうぜのトップページにも顔が乗っていた人気ゲームクリエイター、藤沢数希。

眼鏡を掛けて、優しげな表情を浮かべた若い男だが、その全身からクリエイターとしての気配を感じた。

だが、それで臆する空太ではない。自分は誰かに臆する為に此処に来たのではないのだから。

背筋を伸ばし、何も問題はないかのように自分のプレゼン位置へと足を踏み入れた。その姿を見て、審査員からほお、という感心した様な息遣いが聞こえる。だが、感心するのはまだ先だ。

空太は資料を取り出し、数秒眼を閉じる。そして、日課でいつも入っているあの自分だけの世界、それを視界の中に捉えた。

極限の集中力

今の空太には、何も邪魔する要素はない。精神は酷く穏やかで、広く広く広がる自分の世界があるだけだ。それでいて、周囲の声はしっかりと聞こえている。

「それでは、神田空太さん……始めてください」

そんな声が聞こえた。故に、空太はゆっくり丁寧に頭を下げ、数秒の後頭を上げる。そして審査員を見据えて言った。

「——よろしくおねがいます」

すると、あの藤沢数希が手を上げていた。なんだろうかと思う空太だが、審査員である彼の意思は無視出来ない。視線を送ると、彼はニコツとほほ笑みながら出来るだけ優しく問いかけて来た。

「一つだけ、聞かせてもらえますか？」

「なんですか？」

空太はそれに応える。問いがあるのなら、聞こうじゃないか。すると彼は、笑みを浮かべながらも空太を見抜く様な鋭い視線で、問いを放つ。

「クリエイターになるには、どうしたらいいと思いますか？」

それは、空太にとっては難しくもなんともない問いだった。だから、空太は答えた、失礼とも思ったが、それでも答えた。

「挑戦しなきゃならない」

空太が、いままでずっと避けていたこと。挑戦する事を放棄していたから、空太は夢を叶えることは出来なかった。だから良く分かる、空太にとって、挑戦する事が全ての始まりで、第一歩なのだ。何をしようにも、最初に踏み出さなければ何も始まらない。ゲームを作ることにも、空太は勇気が必要だった。何故出来ないのかなんて、最初から分かっていた。

「挑まなきゃ始まらない。始めないと始まらない。何もしない奴に、夢が振って来るわけがない」

「……」

「だから俺はここにいます」

藤沢数希は空太の言葉を受け止め、頷いた。空太の瞳の中に、何かを見た様な顔だった。

「うん……分かりました。すいません、それでは始めてください」

「はい」

空太はパソコンの電源を入れて、スクリーンにプレゼンの為に用意した映像を出す。そして資料を手に持ち、改めて審査員を見た。

ここからは、俺が主役の舞台だ。審査員は観客、見せて魅せて、何が何でも惹きつけ

てやる。

「それでは——始めます」

空太はそう言つて、もう一度丁寧に頭を下げた。

◇ ◇ ◇

プレゼンが終わつた。

空太はさくら荘へと帰る道を歩いていた。

「……」

言葉はない、表情にも大して変化はない。商店街を通り、街路を通り、そしてさくら荘の前へと辿り着く。見上げれば、いつもと変わらぬさくら荘が空太を見下ろしていた。

空太は一つ息を吐くと、門を潜つてさくら荘のベランダに入った。すっかり疲れた様に、縁側にどさつと力なく座つた。そして、夕焼け色に染まつた空を見上げて笑みを浮かべる。

それを、リビングから見つけたましろが空太の後ろへと歩み寄った。空太の後ろ姿からは喜びも悲しみも感じられない。結果がどうだったのかも予想出来ない。

「空太」

話しかけるましろ。空太はその言葉に肩を少し揺らし、ゆっくり振り返った。

「……よ、ましろ。ただいま」

「……おかえり」

「はあ……なあましろ」

「何……?」

空太は溜め息を吐きながらまた空を見上げた。そして、背中を見せながらましろに話し掛ける。

「疲れた」

「……うん」

「すっげえ疲れた」

「……うん」

「でも、悪い気分じゃないな……全力だして、本気でやって、真剣に取り組んだから、楽しかったし何でもやれるような気がしてた」

空太は言う、出し切ったと。日課の後以上に、身体の中の力が全部抜け出た様な気す

らする。肉体的疲労ではなく、魂の一滴まで絞り出した様な気がする。

「ましろ、これありがとう」

空太はましろに後ろ手でお守りを見せた。

「うん」

そして、空太は立ち上がり、ましろの方を向いて笑顔を見せた。それは、今まで空太が見せた事のないような、心の底からの笑顔、満面の笑み、満足感を感じさせる笑顔。ましろの、初めて見る笑顔。夕焼けに晒されて、それはとても綺麗に見えた。美少年という感じの綺麗さではない、これは頑張っている者の美しさだ。ましろは思った、この光景は自分でも絵に表現する事が出来ない。

「通ったよ、二次審査」

空太はそう言った。やったよと、全力出して、本気を出して、頑張って、なんとか成功を掴んだよと。

「ありがとうましろ、俺の背中を押してくれて」

その時、ましろは自分の胸の中に温かい何かが生まれたのを感じた。じんわりと広がる熱い感情を感じた。ドキドキと速まる心臓の鼓動が聞こえた。締め付けられるよう

な、胸の苦しみを感じた。空太の笑顔に、むずむずと動きだしたい思いを感じた。ましろはそれがどういふものなのかを知っている。これは恋だ。ドキドキして、きゅんとして、胸がせつなくなる、特別な感情だ。

ましろはそれを理解する前に動きだした。空太の下へ駆け寄って、やりたいままに空太の胸に飛び込んだ。

「ま、ましろ?」

「空太……おめでどう」

「……ああ、ありがとう」

空太はましろを抱き締めて、そう言った。

神田空太の挑戦は、世の中の扉を一つ抉じ開けたのだった。